宮崎県文化財調査報告書

第２２集

昭和５５年３月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第２２集

昭和５５年３月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会におきましては，文化財指定のための調査，また，開発工事等において偶然発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて，毎年報告書を刊行しております。

今回は，国富町，えびの市，野尻町，高原町で発見された地下式古墳と延岡市熊野江積石塚，高崎町上示野原遺跡の７件を報告するものであります。

本書は，本県の文化財解明のための一資料として研究に活用していただくとともに，年々失なわれていく埋蔵文化財について十分認識していただき，なお一層の御理解と御協力を願うものであります。

なお，この調査にあたられた県文化財保護審議会委員及び県埋蔵文化財調査員並びにこの調査にあたり種々御配慮いただいた地元教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和５５年３月３１日

宮崎県教育委員会

教育長　四　本　　茂

例　　言

1．この報告書は，宮崎県教育委員会が実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書であるが，野尻町大萩地下式横穴第36号と，えびの市平松地下式古墳５４－１号については，地元教育委員会において調査されたものであって，依頼により掲載するものである。

2．掲載しているのは，地下式古墳（横穴）５，積石塚１，弥生遺跡１の合計７件についてである。

3．本文中，同種遺跡について，地下式古墳又は地下式横穴の名称を使用しているが，執筆者の使用にしたがった。

4．本書の編集は，宮崎県教育庁文化課が担当し，県文化財保護審議会委員石川恒太郎が監修した。

5．熊野江積石塚第６号出土の人骨については，長崎大学医学部内藤芳篤教授,同分部哲秋助手の玉稿をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

昭和54年度に県教育委員会が実施した緊急発掘調査についての調査組織は次のとおりである。

調査主体　宮崎県教育委員会

(事務局)	教育長	四本　茂
	教育次長	国府重則
	〃	坂口鉄夫
	文化課長	日高三好

課長補佐	串間　実	
庶務係長	田中君彦	
主任主事	王原敦美	
文化財係長	山下正明	
主任主事	岩永哲夫	（調査担当）
〃	小森達郎	
〃	立元久夫	
〃	今村正人	

（調査員）

石川恒太郎	（県埋蔵文化財調査員）
茂山　護	〃
面高哲郎	〃
北郷泰道	〃

総　目　次

Ⅰ　熊野江積石塚第６号発掘調査 …… 1
（延岡市大字熊野江２,４５３）

Ⅱ　飯盛地下式横穴５３－１号発掘調査 …… １７
（東諸県郡国富町大字須志田飯盛）

Ⅲ　大萩地下式横穴３６号発掘調査 …… ２９
（西諸県郡野尻町大字三ケ野山大萩）

Ⅳ　日守地下式横穴（古墳）５４－１～４号発掘調査 …… ６１
（西諸県郡高原町大字後川内１の１１９）

Ⅴ　上示野原遺跡発掘調査 …… ８９
（北諸県郡高崎町大字大牟田上示野原）

Ⅵ　平松地下式古墳５４－１号発掘調査 …… １０７
（えびの市大字島内字平松１１３５）

Ⅶ　平松地下式古墳５４－２～４号発掘調査 …… １３１
（えびの市大字島内字平松１１３５）

(付)　昭和５４年度埋蔵文化財発掘調査一覧 …… １５７

Ⅰ　熊野江積石塚第６号発掘調査

延岡市大字熊野江２４５３番地

県埋蔵文化財調査員　　石　川　恒太郎

長崎大学医学部教授　　内　藤　芳　篤

〃　　助手　　分　部　哲　秋

本　文　目　次

Ⅰ　所　在　地 …… 3
Ⅱ　発見の動機と調査経過 …… 3
Ⅲ　遺跡の地理的環境 …… 4
Ⅳ　遺　　物 …… 4
　A　箱式石棺 …… 4
　B　人　　骨 …… 5
　C　弥生式土器破片 …… 5
Ⅴ　遺跡の年代と種類 …… 7
Ⅵ　延岡市熊野江・積石塚箱式石棺の弥生時代人骨について …… 8

挿　図　目　次

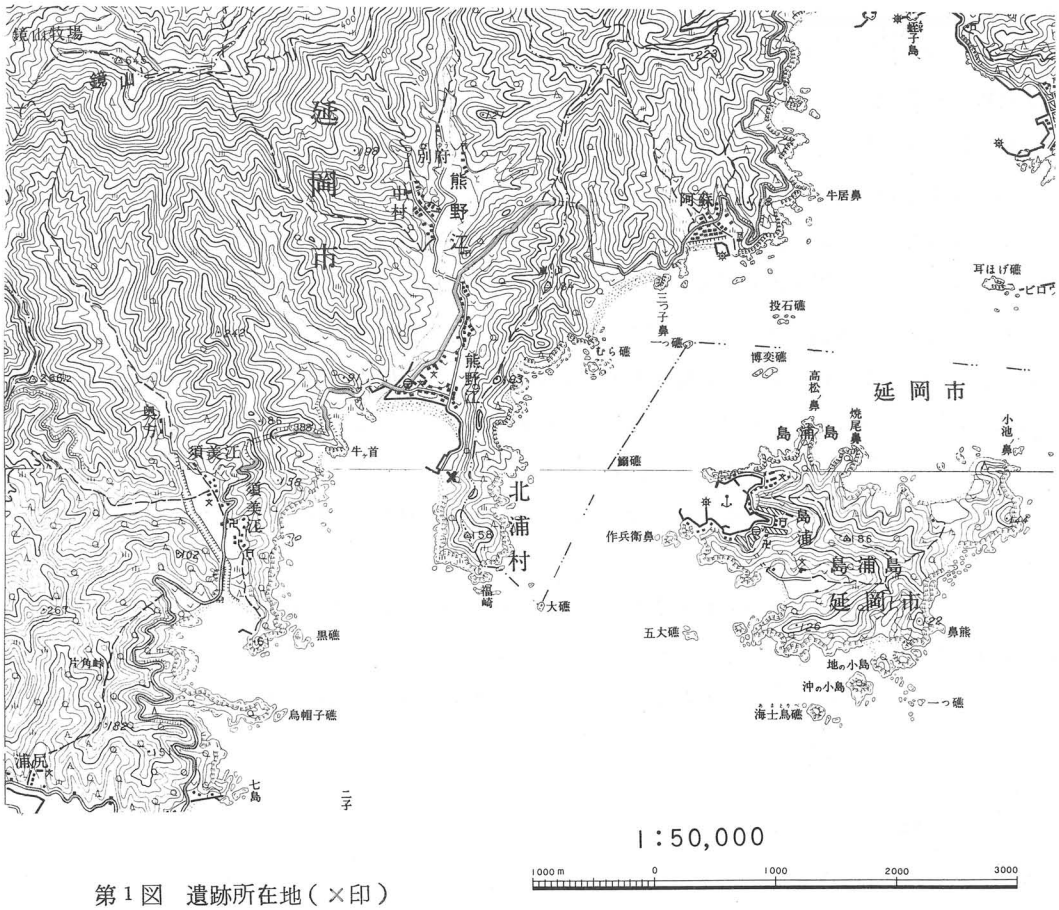
第1図　遺跡所在地 …… 3
第2図　箱式石棺実測図 …… 6

図　版　目　次

図版1　遺跡の状況 …… 13
　(1)　掘り出した状態 …… 13
　(2)　蓋石を除いた状態 …… 13
　(3)　弥生式土器破片拓影 …… 13
図版2　人　骨(1) …… 14
図版3　人　骨(2) …… 15

Ⅰ　所　在　地（第１図）

延岡市大字熊野江２４５３番地



1:50,000

1000m　0　1000　2000　3000

第１図　遺跡所在地（×印）

Ⅱ　発見の動機と調査経過

昭和５４年３月７日，延岡市熊野江において箱式石棺らしいものを発見した旨，延岡市教育委員会から連絡があった。説明によると，県水産課が栽培漁業センター建設工事の排水ピット掘削作業中に石棺の一部が露出しているのを発見したということであった。

現地は，昭和１５年に箱式石棺５基が発見され，昭和１７年６月２３日に県指定史跡南浦古墳に指定された延岡市大字熊野江２４５３番地の一角である。熊野江の中心部から南につき出た岬の中央部西側海岸に所在する。

調査は，昭和５４年３月１２日～１３日まで県教育委員会が主体となり，石川恒太郎を調査員とし，県教育庁主幹寺原俊文，県文化課主任主事小森達郎で行った。また，延岡市教育委員会社会教育課牧野義英主事，県文化財保護指導委員甲斐常美氏にも協力していただいた。　（小森達郎）

Ⅲ　遺跡の地理的環境

遺跡は熊野江湾の東岸をなす福崎の中央西岸にあるが，『日向地誌』には，福崎について，

「福崎　森山ヨリ南ニ連絡セシ山脈ノ尾，本村ト古江村トノ界，海中ニ斗出スル十余町磯石海岸ニ連ナリ以上両崎ノ間湾海トナル」

とある。森山というのは東臼杵郡北浦町にある標高４６０.６ｍの山で，この山脈が現在の延岡市と北浦町（旧古江村）との境界をなして南下して福崎という岬を形成しており，その西方須美江に在る黒八重（黒礁）崎と9間が海湾となっているわけで，この福崎という岬は嵐山（１８４ｍ）から１０３ｍ程度の丘３個に次いで南端に１５８ｍの標高をもつ山で海に臨んでおり，この１連の丘地の頂上が延岡市と東臼杵郡の境界であるとともに延岡市と北浦町の境界をもなしているのである。そして福崎の岬は陸に接するところが狭く，南方が東西に広く，あたかも斧頭のような形をなしているが，その首部から肩部が広がっている西側に熊野江の船付場（埠頭）があり，その船付場の道路を隔てた西側に遺跡があるのである。

だからこの遺跡は後（東側）に丘地を負い，前に熊野江湾に臨むところで，以前には『日向地誌』にあるように「磯石海岸に連」なっていたのである。だからここを開発して磯石を除くに及んで，棺上に積まれていた石の下から棺に用いられた平石（千枚岩）が発見されたわけである。

Ⅳ　遺　　物

発掘した遺物は箱式石棺１と，その中に葬られていた人骨と弥生式土器の破片２個のみであった。

A　箱式石棺

箱式石棺は千枚岩（せんまいがん）を箱形にならべて，その上に同質の岩で蓋をしているもので，弥生時代から古墳時代を通じて死者を葬むる棺として用いられており，延岡市内では，ここの遺跡をはじめ無鹿，樫山，浦城，岡富，下平原などに広く分布しており，県下でも北方町，高千穂町，西郷村，諸塚村，日向市などから南は串間市まで広く分布している。もちろん箱式石棺にもいろいろの形式があるが，棺に底石を敷かず，蓋石の上に石を積んで，いわゆる積石塚（ケイルン）の形をなしているものが古式で，このような形式のものは殆んどみな弥生時代のものである。

石棺は第２図に見られるごとく，ほぼ東西に方位しており，蓋石は扁平な千枚岩を棺の上に３枚乃至４枚並べて棺上を封じ，その石と石との継ぎ目に２枚乃至３枚９石を並べて継ぎ目を封じていたものと思われるが，石質が比較的脆かったのと，上から積石の重圧がかかったため，へし曲げられたようになっ

ていて，どれまでが１枚の石か見分けられない状態であった。第２図上段と写真１を参照されたい。この蓋石で蔽われている範囲は東西の長さ中央で１８５cm，幅中央で５５cmであった。厚さは１枚の所は５cm内外，２枚重なっている所は１０cm内外であった。

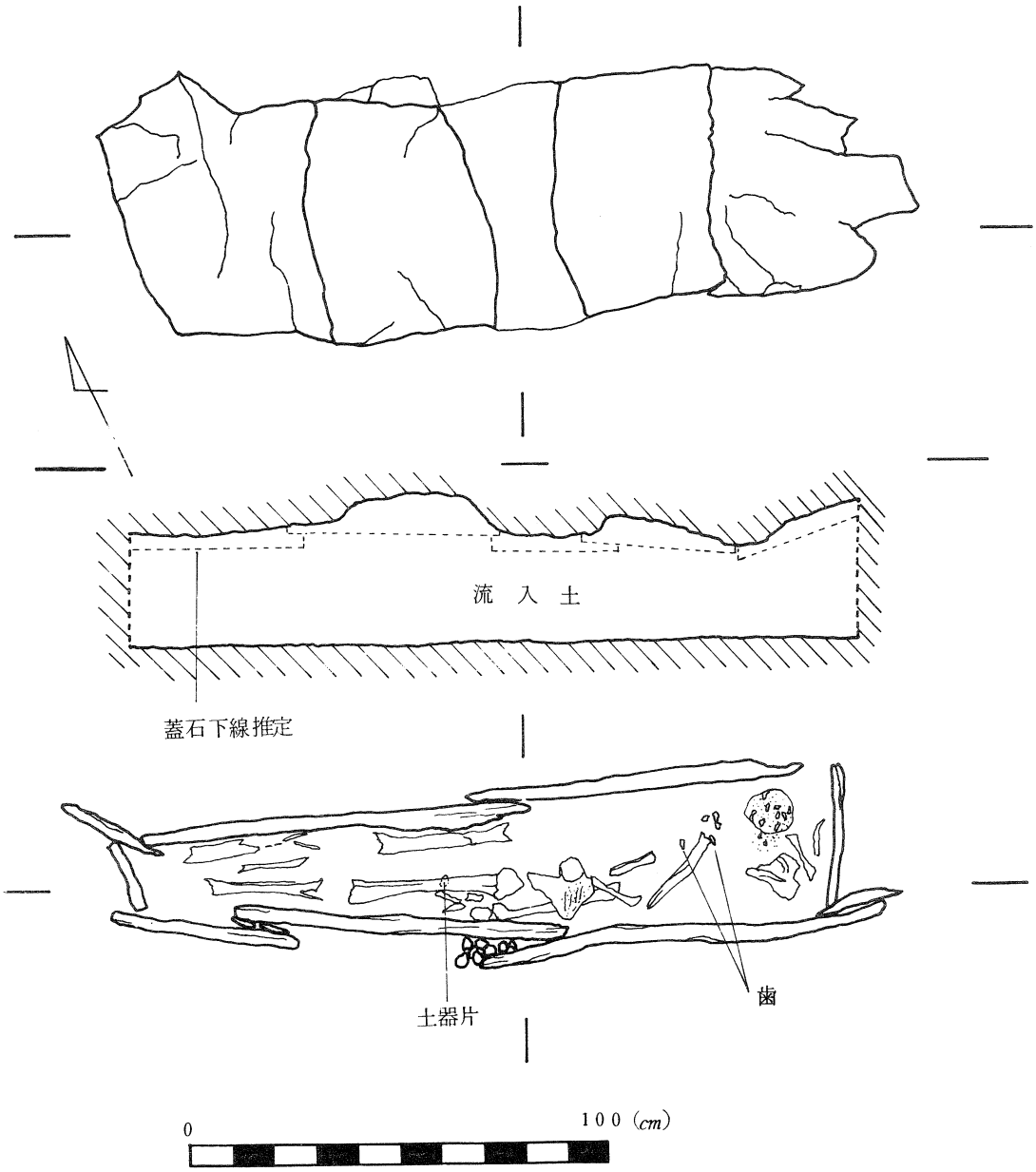
蓋石を除くと，第２図中央のように，棺内には流入土が充満していたが，この流入土を除くと，第２図下段に見るごとく，棺形はかなりゆがんでいたが，棺の南と北の両側壁はそれぞれ３枚の石を並べて造られていた。北側の壁石は西端のものが外側にはずれていた。南側の壁の長さは三枚で１５５cmであるから北側も同長であったはずである。東と西の壁はそれぞれ１枚の石であるが，東壁がやや長く，壁の長さは３０cm，石の厚さ２cmで，西壁は長さ１７cmで石の厚さは４cmである。そしてこれらの東西の両側石は南北の側石の先端から東側は１２cm，西側は６cmのところに付いている。従って棺の内側は東西の長さ１６２cm，東と西の壁幅は東方が３０cm，西が１７cmとなる。棺内の深さは約２０cmであった。

B　人　骨

遺物は人骨１体と，弥生式土器の小破片２個のみであったが，人骨については長崎大学医学部教授内藤芳篤博士の鑑定を求めて，その御所見を頂いたので後に記したが，棺内の位置について一言しておく。人骨は第２図下段と図版１に見えるごとく，頭部を東にし足を西方にして伸展葬されていた。

C　弥生式土器破片

弥生式土器破片は図版１（拓影）に見るごとく，極めて小さい破片２点であるが，この遺跡が弥生時代のものであることを示す重要な遺物である。しかし余りに小さい破片であるから器形を知ることはできないが，大きい方は長さ３.７cm，幅２.５cmの三角形に近い破片で，厚さ３mmの黄褐色であり，小さい方は長さ２cm，幅１cm，厚さ７mmの表面は赤褐色，裏面はやや黒味を帯びた破片で，明らかに同じ土器の破片ではなく，別々の器の破片であることが知られる。しかし何れも胎土に石の細粒を含んでおり，大きい方は器の表裡両面に藁のようなもので調整した痕跡が見られる。去る昭和１５年（１９４０年）にここで５基の箱式石棺が発見されたとき，筆者は当時の村長の要請によってそれらの石棺を調査したが，その時はすでに地方の人によつて棺内の人骨などをさらえて，最も山手にある１棺に合葬された後であったが，残りの石棺内を調べて人の歯数個と，弥生式土器の小破片を採集したのであった。それでこの時は副葬されていた土器も人骨とともに合葬され，残っていたのはその破片のみであったのであろうと考えたのであったが，今回の調査の結果，初めから破片が副葬されたものであることを知った。これは当時この地方で土器の入手困難のため破片を副葬する風習があったのではなかろうかとも思われるのである。



第 2 図　箱式石棺実測図

V　遺跡の年代と種類

この遺跡は去る昭和１５年（１９４０）にここで同様の箱式石棺５基が発見されたが，今回発見のものもこれの１部であって，棺上には石が積まれて，いわゆる積石塚（ケイルン）をなしていたから，遺跡の種類としては積石塚群で，今回発見のものは熊野江積石塚群の第６号積石塚である。県下で発見されている積石塚は，ここ熊野江のほか延岡市浦城，同市無鹿，日向市平岩，児湯郡都農町，同郡川南町などであるが，箱式石棺を内容とする積石塚は，前に見たごとく弥生時代のものである。

棺内で発見された弥生式土器は，破片が余りに小さいので，その年代を確認し得る器形を知り得ないが，破片の大きい方のものに認められる藁様の圧痕や破片が薄手であることなどから弥生時代後期のものであろうと推定される。

前に述べたごとく，ここでは１９４０年に同じ箱式石棺が５基発見されたが，このうち最も汀線に近いものは，汀線から５～６ *m*しか離れていないものもあった。このように汀線に近い所に墓が造られているということは，その墓が造られた時代の汀線は現代とさほど変らなかったものと考えられ，この遺跡が縄文時代に近い頃までは遡らないことを示すものであろう。尤も現在は開発や埋立てで１９４０年の頃とは大いに異なっている。

さきにわれわれは西諸県郡野尻町の大萩遺跡で，弥生時代後期の墓である土拡墓群を発掘し，その墓に葬られていた人々の集落をも発見したが，墓群に最も近い集落は２００～３００ *m*の所にあり，墓から最も近い水田は約１Kmの距離であった。この積石塚に葬られている人々も，すでに水田耕作を行なっていたと考えられるが，熊野江川の沿岸にある水田を耕作した人々の集落が河口に近い所にあったと考えると，この石原迄の距離は約1,０００ *m*で，ここに墓を造ったことは丁度よい距離となる。このようにここの積石塚は考古学的に珍らしい遺跡であるばかりではなく，熊野江地方の古代の人々の生活を復原して考える上にも極めて重要な遺跡である。

（石川　恒太郎）

延岡市熊野江・積石塚箱式石棺の弥生時代人骨について

内藤芳篤・分部哲秋※

はじめに

延岡市熊野江において積石塚の箱式石棺内より人骨1体が発掘された。本書別項に記載されているように，石棺内より弥生式土器2点が発見されるなど考古学的所見より本人骨は弥生人骨と考えて差し支えないものと言われているが，同地からはすでに1940年石川氏によって石棺5基の調査およびその報告がなされており，このたびの石棺もそれらと同一群をなすものであろう。

人骨の保存状態は必ずしも良好ではないが，残っていた資料について精査した結果，下記のような所見から女性・熟年骨と推定されたものである。以下その所見について述べる。

資料および所見

(1) 頭蓋骨

1. 脳頭蓋

右側の頭頂骨および側頭骨の部分が残っていた。

頭蓋諸径の計測は不可能で頭型などを知ることはできないが，骨壁は一般に薄く，頭蓋縫合はやや密である。また乳様突起は細くて長い。

2. 歯

遊離した状態で6本の歯が残っていた。これらを歯式で示せば次のとおりである。

$\underline{M_1P_2P_1C\ I_2I_1}$ 歯は著しく磨耗し，Broca の4度である。6本共に歯冠の大部分が消失し，咬耗は歯頸の直ぐ上にまで及んでいる。また$\underline{M_1}$ にはカリエスが認められる。

$\underline{I_1}$, $\underline{I_2}$ などの咬合面は水平ではなく，傾斜しており，本例における過耗状態は単に経年的なものではなく，食生活その他による特殊な咬耗の結果と考え得るものであろう。

(2) 上肢骨

1. 鎖骨

両側の鎖骨々体が残っていたが，比較的細くて短かい。

2. 肩甲骨

左側の肩甲骨が残っていたが，烏口突起，肩峰，内側縁等を欠如していた。

肩甲骨は比較的大きくて頑丈である。

3. 上腕骨

左側上腕骨の下半部を残していた。

※ 長崎大学医学部解剖学第2教室

表面の剝離があり正確には解らないが，余り大きいものではない。

4. 前腕骨

左側の橈骨がほとんど完全な状態で残り，尺骨は下端を欠如していた。

橈骨

長さの割りに比較的太くて，橈骨粗面の発達も良好である。

主なる計測値は次のとおりである。

橈骨最大長	217㎜
生理的長	205㎜
最小周	42㎜
骨体横径	16㎜
骨体中央横径	15㎜
骨体矢状径	10㎜
骨体中央矢状径	11㎜
骨体中央周	43㎜
長厚示数	20·49
骨体断面示数	62.50

本例の計測値と三津，土井ケ浜両弥生人の女性・左側橈骨のそれとを比較してみると，最大長および生理的長では三津弥生人（218㎜，209㎜）より多少小さく，土井ケ浜弥生人（214㎜，201㎜）よりやや大きい。最小周では三津（37.40㎜），土井ケ浜（37.8㎜）両弥生人より太い。従って長厚示数では三津（17.7），土井ケ浜（17.9）両弥生人より大きい値を示し，観察所見と一致して比較的太いことが知られる。また骨体横径では三津（15.50㎜），土井ケ浜（15.5㎜）両弥生人より僅かに大きく，骨体矢状径では三津（10.57㎜），土井ケ浜（10.6㎜）よりやや小さいために，骨体断面示数では三津（68.31），土井ケ浜（69.1）両弥生人より小さい値を示し，多少扁平に傾いている。

尺骨

下骨端を欠如しているが，骨体はやや彎曲し，比較的太く，骨間縁の発達も良好であり，尺骨粗面は多少陥凹している。

(3) 下肢骨

1. 寛骨

左側の腸骨大部分が残っていた。

全般に比較的大きく頑丈で，臼部も広く，腸骨粗面はやや隆起している。大坐骨切痕は広くて円形に近く，女性のそれを思わせるものがある。

2. 大腿骨

両側共に上，下骨端を欠如し，骨体のみが残っていた。

骨体は多少彎曲し，比較的太いが，余り長くはない。骨体断面は円形に近く，むしろ横に広い感じである。粗線は明瞭であるが，柱状形成の像は見られない。

長径の計測はできないが，ほぼ中央と推定される部位において，矢状径（右２６㎜，左２４㎜），横径（右２６㎜，左２５㎜），周径（右８４㎜，左８１㎜）であり，これから断面示数を求めると，右側が１００.００，左側が９６.００となる。

女性の右側大腿骨について比較してみると，矢状径，横径では三津弥生人（２６.３１㎜，２５.４２㎜）と大差なく，土井ケ浜弥生人（２５.６㎜，２５.０㎜）よりやや大きい。周径では三津弥生人（８２.４０㎜）より僅かに太く，土井ケ浜弥生人（７９.３㎜）よりはかなり太い。また断面示数では三津（１０１.４５），土井ケ浜（１０２.８）両弥生人と大差はない。

3. 脛　骨

右側脛骨は骨体一部のみであったが，左側の脛骨は上，下骨端を除く骨体大部分が残っていた。

骨体は比較的太いが，扁平性がとくに著明とは見られない。

長径の計測は勿論不可能であるが，ほぼ中央と推定される部位において，最大径は２９㎜，横径は２０㎜，周径は７７㎜であり，また最小周は７２㎜である。これから断面示数を求めると６８.９７となる。

左側脛骨について比較してみると，最大径，横径では三津弥生人（２７.５０㎜，１９.６８㎜）と大差なく，土井ケ浜弥生人（２６.３㎜，１９.２㎜）よりは大きい。中央周，最小周では三津弥生人（７７.０９㎜，７１.７５）とほとんど差がなく，土井ケ浜弥生人（７３.５㎜，６８.７㎜）よりは太い。また断面示数では三津（７１.９０），土井ケ浜（７０.８）両弥生人よりはやや小さい値を示し，いくらか扁平に傾いている。

(4) その他の骨

肋骨，椎骨，距骨，趾骨などの骨片が残っていたが，破損がひどく充分な観察はできなかった。ただ椎骨についてはとくに精査したが，残っていたものからは老人性に見られる変形等を見いだすことはできなかった。

(5) 推定身長値

左側撓骨を用いてPearson の方法により推定身長値を求めると１５３.７７㎝となる。

三津弥生人の推定身長値は大腿骨を用いた場合１５１.９１㎝（２例）とされているが，左側橈骨を用いて算出すれば１５４.１０㎝（１例）となる。土井ケ浜弥生人については撓骨を用いると１５２.６７㎝（２０例），また大腿骨を用いた場合は１４９.９７㎝（１６例）と報告されている。

本例の場合，大腿骨最大長を計測し得ないのは措しまれるが，橈骨からの推定身長値をみると，三津，土井ケ浜両弥生人と同様にかなり長身であるということができる。

要　　約

1. 延岡市熊野江において積石塚箱式石棺から得られた1体の人骨は，乳様突起，大坐骨切痕等の形状および四肢骨の大きさから推して女性と考えて差し支えないであろう。また歯の咬耗は著しいが，頭蓋縫合や椎骨片の状態から老人というよりも熟年とした方が妥当と考えられる。

2. 歯は右側下顎歯6本が残っていたが，ほとんど歯頸に達する咬耗が見られ，かつ咬合面が傾斜したものもあり，食生活その他による影響が考えられる。

3. 四肢骨は比較的大きく，女性としては頑丈であり，橈骨および脛骨には軽度の扁平性がうかがわれる。

4. 橈骨を用いてPearson の方法により推定身長値を求めると153.77 *cm*となり，比較的長身である。

5. 計測可能な項目について，三津，土井ケ浜両弥生人と比較してみると，全般的によく近似しているが，そのうちでは三津弥生人に近い値を示し，土井ケ浜弥生人よりは多少頑丈な形質を示している。

（擱筆する当たり，本研究の機会を与えていただいた宮崎県文化財保護審議会委員石川恒太郎氏，宮崎県教育庁文化課および延岡市教育委員会ご当局に感謝の意を表します。）

文　　献

1) Martin－Saller, 1957:Lehrbuch der Anthropologie Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.

2) 藤田恒太郎，1962：歯の解剖学，7版，金原出版．東京.

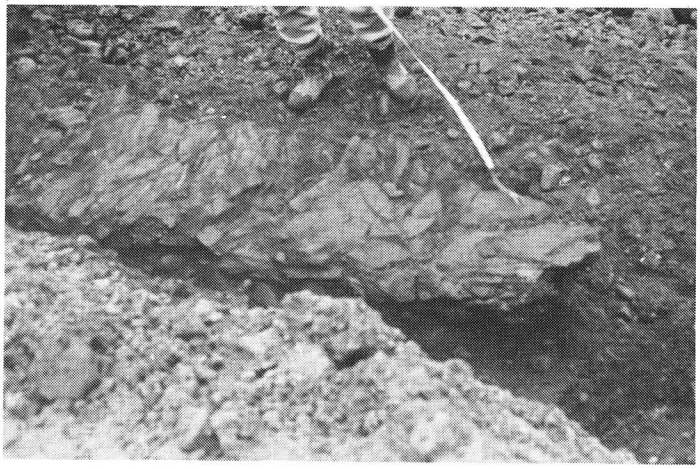
3) 藤田恒太郎，1939：歯牙の人類学．人類学・先史学講座，8．雄山閣，東京.

4) 牛島陽一，1954：佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究，人類学研究．1：273－303.

5) 財津博之，1956：山口県土井ケ浜遺跡弥生前期人骨の四肢長骨に就いて．人類学研究，3：320－349.

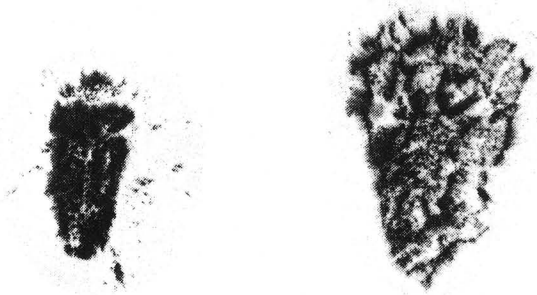
図版 1

遺跡の状況



(1) 掘り出した状態

(2) 蓋石を除いた状態



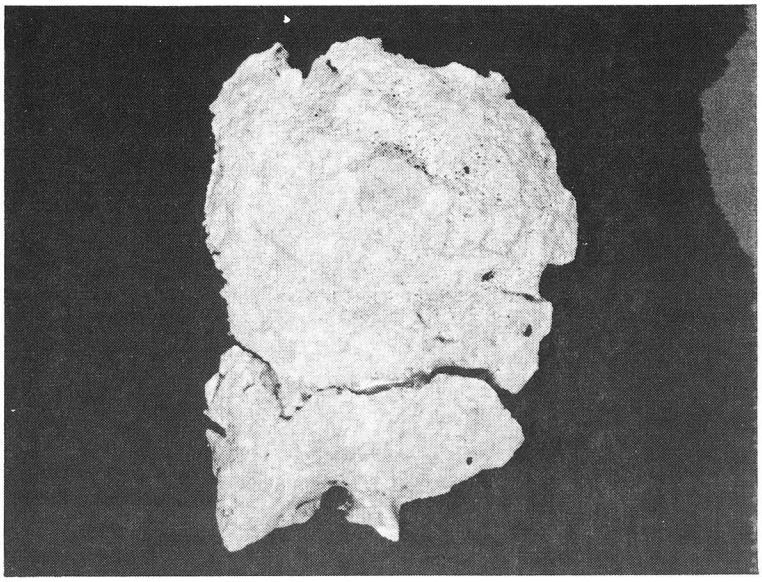
(3) 弥生式土器破片拓影

図 版 2

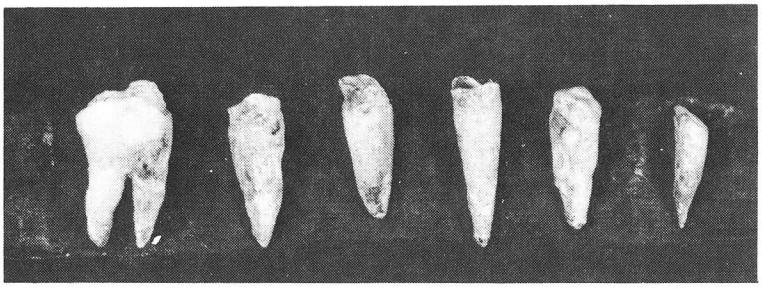
人

骨

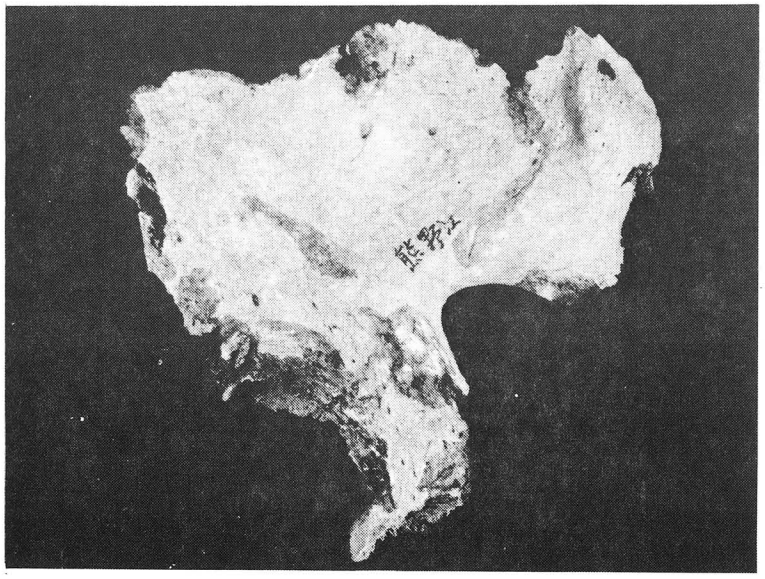
(1)



(1) 女性熟年頭蓋骨



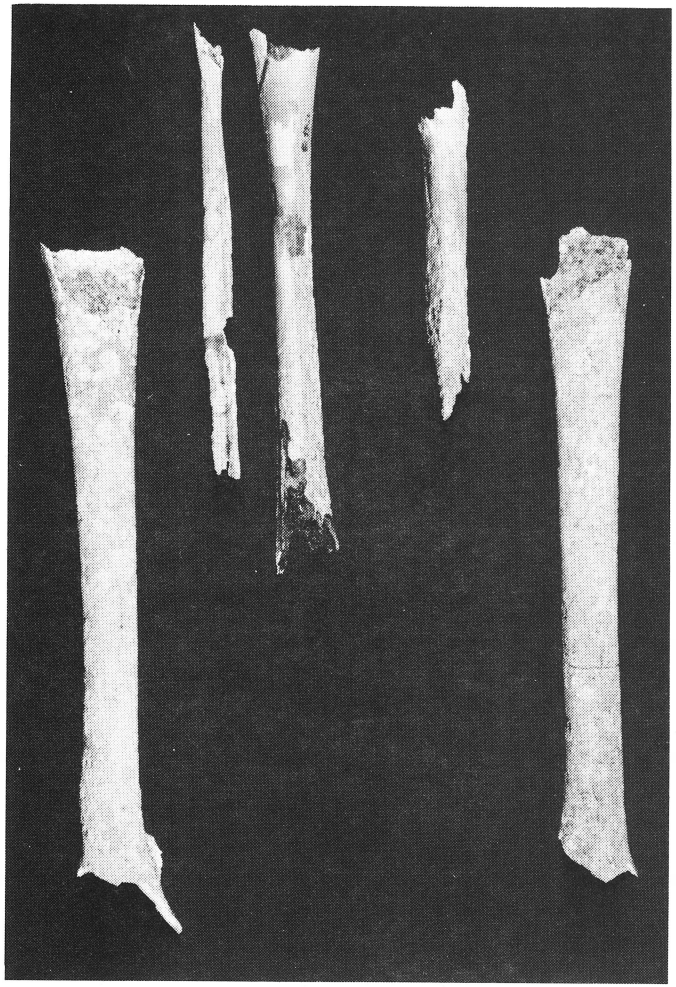
(2) 女性熟年歯



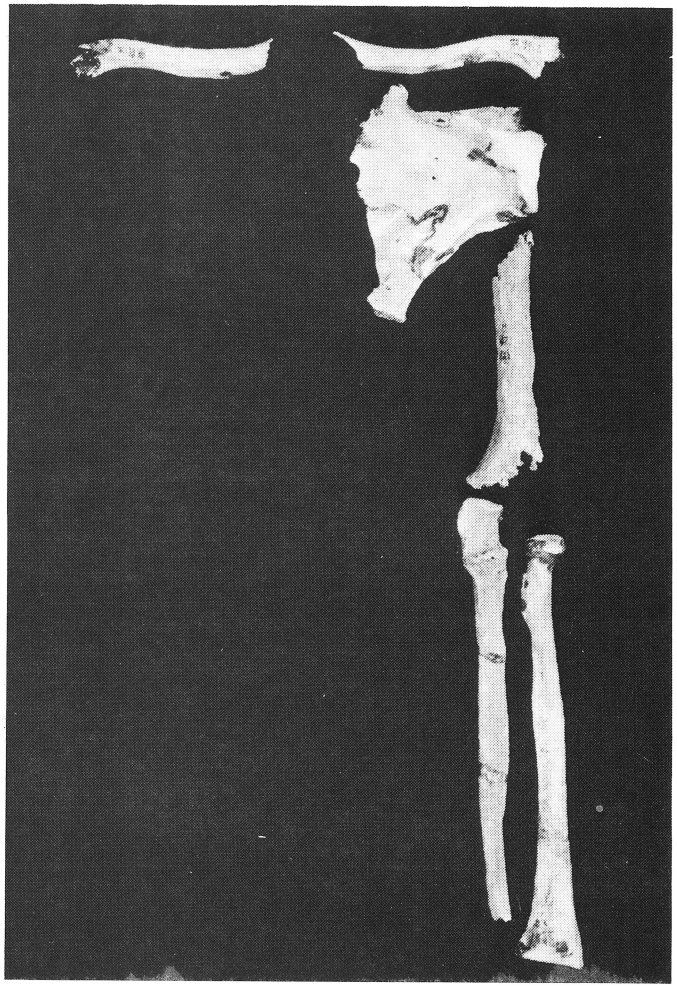
(3) 女性熟年寛骨

図版 3

人骨 (2)



(2) 女性熟年　　下肢骨



(1) 女性熟年　　上肢骨

Ⅱ　飯盛地下式横穴５３－１号発掘調査

東諸県郡国富町大字須志田字飯盛

県埋蔵文化財調査員　　面　高　哲　郎

県文化課主任主事　　岩　永　哲　夫

本　文　目　次

Ⅰ　所　在　地 …… 19
Ⅱ　発見の動機と調査経過 …… 20
Ⅲ　調査の結果 …… 20
Ⅳ　結　　語 …… 24

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地 …… 19
第2図　飯盛地下式横穴53－1号実測図 …… 21
第3図　副葬品実測図 …… 23

図　版　目　次

図版1　遺跡状況(1) …… 25
図版2　〃　(2) …… 26
図版3　副葬品 …… 27

Ⅰ　所　在　地（第1図，図版1）

東諸県郡国富町大字須志田字飯盛

第1図　遺　跡　所　在　地

宮崎県のほぼ中央部には，全体として三角形をなす宮崎平野がある。九州山地と接し，平野の西端に位置するあたりは，九州山地に源を発する河川により形成された洪積世台地，および丘陵が南東方向に発達している。その1つ，深年川，綾北川により形成された丘陵，中ほどの標高約70 mの平担地において，本地下式横穴が発見された。この丘陵上には，国指定の前方後円墳など47基の高塚古墳本庄古墳群の他，多くの地下式横穴も発見されている。本地下式横穴の所在する飯盛においても，本庄古墳群に含まれる前方後円墳2基，円墳6基があり，また地下式横穴が昭和42年12月，46号附近にて1基，昭和43年1月，47号附近にて1基の計2基が発見され，石川恒太郎氏により調査されている。（注1）

今回発見された地下式横穴は，本庄古墳群第４４号前方後円墳の南南西約７０ *m*の位置にて発見されたものである。

仮に飯盛地下式横穴５３－１号として記述する。

注１　石川恒太郎「国富町飯盛の地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書，　第13輯，昭和43年

Ⅱ　発見の動機と調査経過

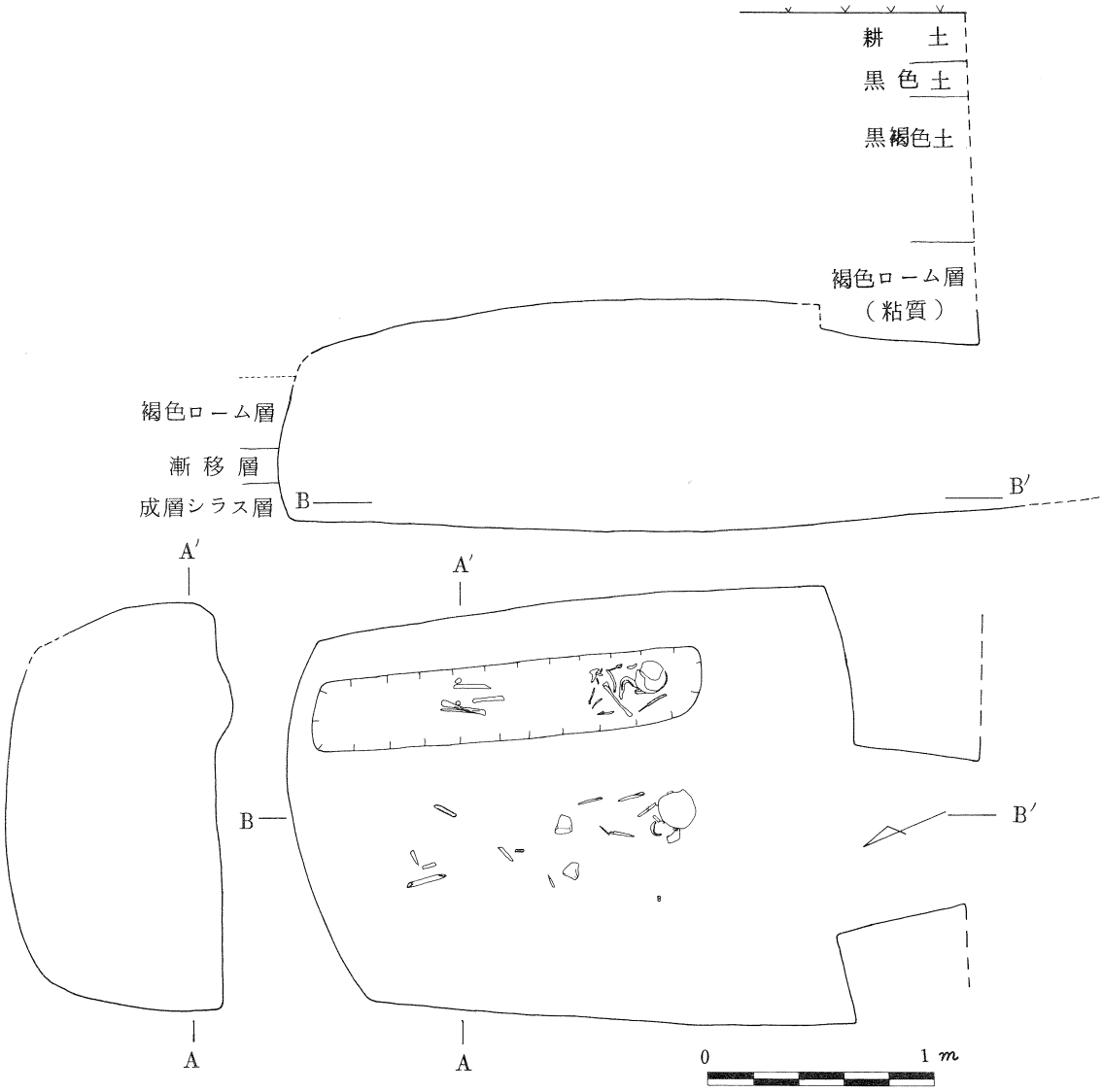
昭和５３年４月ころ本庄高校実習畑地の一部が陥没し，地下式横穴らしいとの報が国富町教育委員会から県教育委員会へ連絡があり，同年６月１４・１５日発掘調査を実施することになった。

調査は，筆者と県文化課岩永哲夫主任主事が担当し，国富町教育委員会の方々の協力をいただいた。

調査は，陥没した部分より進める。陥没は，羨門部の部分であったが，竪壙部は，農道にかかっていたので，調査は，主として，玄室，羨道を行なうことにした。

Ⅲ　調査の結果（第２，３図，図版１，２，３）

本地下式横穴は，後円部を南南西にもつ全長約４３ *m*の前方後円墳南７０ *m*の地点にあり，玄室を北北東，竪壙を南南西，つまり主軸の方位が北北東の地下式横穴である。玄室は，第Ⅲ層褐色ローム層第Ⅳ層成層シラス層中に構築され，床面は，地表下約２１５ *cm*のところにある。この地点の層序は，第Ⅰ層耕土，第Ⅱ層黒褐色土層（この層中ほどには，第一オレンジ層がブロック状にはいっている。）第Ⅲ層褐色ローム層，第Ⅳ層成層シラス層となっている。



第２図　飯盛地下式横穴５３－１号実測図

羨道は，逆八字形に拡がる両袖式で，東辺はほぼ直角，西辺は鋭角をなして玄室に交わっている。断面は台形で，高さは徐々に高くなっている。羨門部幅６２cm，玄門部６４cm，高さは中ほどで約７５cmを計測できる。

玄室の平面プランは，梯形をなすが，奥壁は弧をなしている。各部の計測値は，東辺２２４cm，西辺２１３cm，北辺付近幅１６１cm，玄門付近においては１９３cmである。側壁は，８５度から８０度の角度をもち，弧を描いて立ち上がっている。高さはほぼ一定で７７cmある。天井は，アーチ形となっていて中央部の高さは９３cmある。玄室全体の形状は，辺が外へ膨らむ箱形であるが，長方形切妻形妻入りの退化形態と見取ることもできる。

奥壁・西壁において，玄室構築時の幅１５cm，刃先丸形の工具痕が見られ，特に奥壁において明瞭である。奥壁では，上から下へ，西壁では，左上から右下へ工具を使用している。天井部については，丁寧な仕上げで，工具痕はほとんど見られない。

東壁より２５cmほどの位置に，３４cm×７５cm×９cmの隅丸長方形の凹み床が東辺より２０cmの位置にあり，小児１体（１号人骨）が埋葬してあり，頭蓋骨には朱が付着していた。玄室中央部にも１体（２号人骨）埋葬している。また，２号人骨西約３０cmの位置に歯牙が数本まとまって検出された。したがって，本地下式には，２体ないし３体が埋葬していたと考えられるが，１号人骨以外は，散乱した状態であった。

副葬品は，１号人骨頭部周辺において，刀子１本，朱玉片３，２号人骨頭蓋骨下および周辺に管玉１１個頭蓋骨北２０cmに刀子１本が出土している。

刀子（第３図１）

１号人骨頭部西５cmにて出土した全長１３.４cm，ほぼ完形の鹿角装刀子である。身長５.３cm，刃部中央部で刃幅０.９cm，背幅０.２cm，柄部は，８.１cmである。

朱玉片（第３図２）

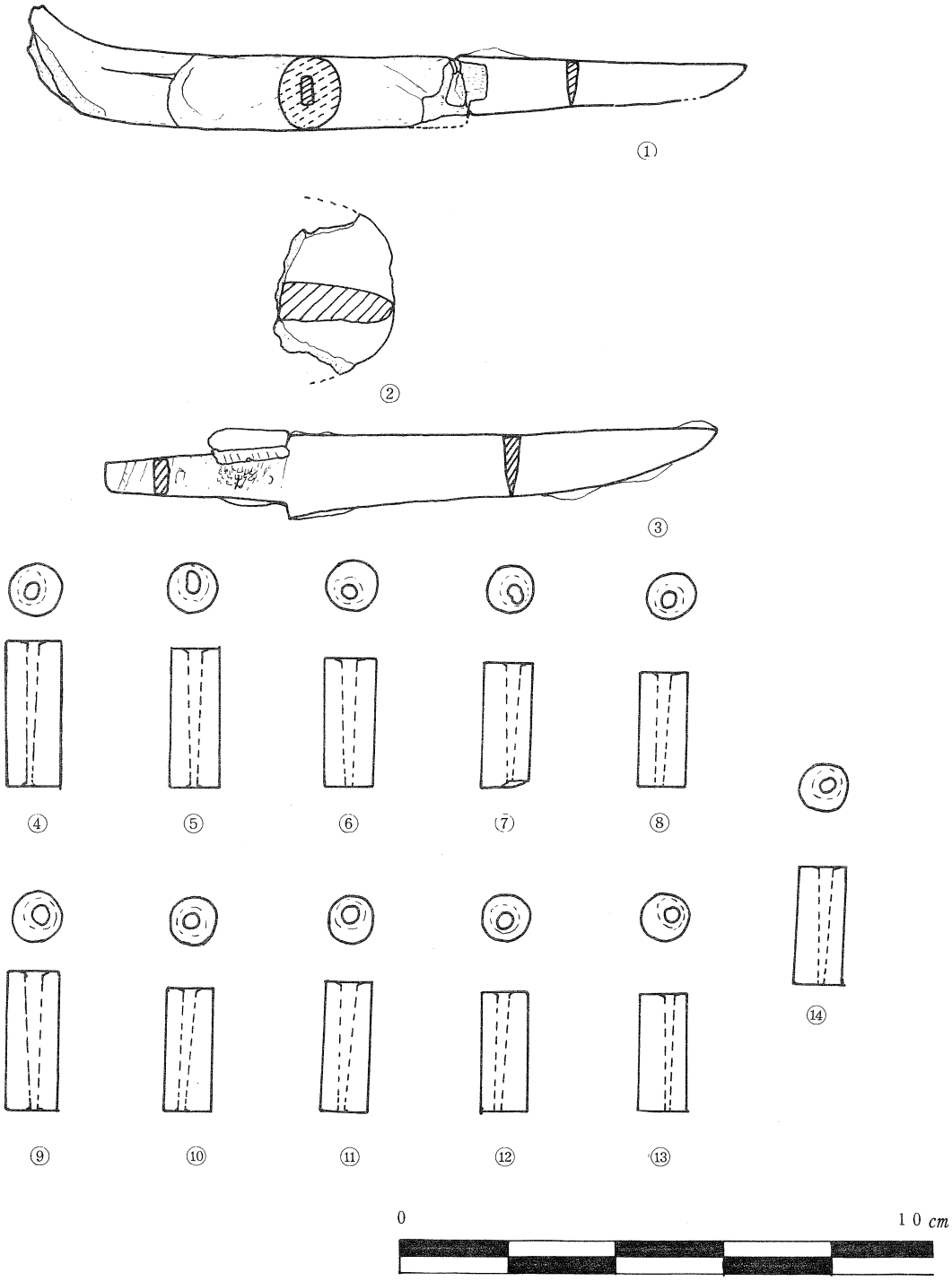
朱玉片は，いずれも１号人骨周辺において出土したものである。頭蓋骨すぐ右下にて出土した朱玉片は，推定径３.５cm，厚さ０.８cmで，重さは，すこぶる軽い。断面は，一面は，弧をなし，片面はほぼ平坦となっている。

刀子（第３図３）

２号人骨頭附近で出土し，全長１１.３cmの完形の刀子である。身長８.０cm，関幅１.６cm，中央部にて刃幅は１.１cm，背幅０.３cm，柄長３.３cmで，柄部には，わずかに鹿角装が残存している。

管玉（第３図４）

２号人骨頭蓋骨下およびその周辺で１１個出土し，いずれも碧玉製で淡緑色を呈する。長さは，２.７～２.２cm，径は，１cm内外で孔は片面穿孔である。



第3図　副葬品実測図

Ⅳ 結　　語

飯盛地区においては，今回の調査を含め計３基の地下式横穴が発見されている。本地下式は，玄室梯形アーチ形，羨道両袖式の構造であり，昭和４２年発見の飯盛１号と構造類似している。飯盛１号の閉塞は，羨道部に長さ３０cm内外，幅，厚さ各１０cm内外の堅い石を詰めて閉塞されているが，本地下式については，閉塞石等は全く認められなかった。閉塞施設の全く認められていない例は，東諸県郡綾町地下式横穴，同郡国富町吹上地下式横穴等にある。[注1] 飯盛５３－１号，綾町地下式の土砂の流入状況，流入量が類似している。[注2] 飯盛５３－１号の羨道部の土砂は砂粒様で硬化していず，[注3] 流入土であることを示していた。したがって，本地下式には何らかの閉塞施設が存在していたのではないかと考えられる。

閉塞施設を考える場合，参考になる地下式に，東立野の地下式９号，下北方地下式５号がある。[注4] 両地下式は，羨道両側に切り込みがあり，切り込みより竪穴部の方に東立野では粘土塊，[注5] 下北方では円礫が積まれていたことから，[注6] 調査者は切り込み部にまず板状のもので閉塞を行ない，その後，粘土塊を積む，つまり，板状閉塞の併用を推定している。本地下式の場合，閉塞施設等は全く認められなかったが，羨門部付近において板状のもので閉塞していたのではないかと考えるが今後の課題としておきたい。

飯盛５３－１号の構造は，日高正晴氏の分類，１類の退化形態であり，築造年代は古墳時代後期と考えられる。[注7]

（面　高　哲　郎）

注１　石川恒太郎「国富町飯盛の地下式古墳調査報告」　宮崎県文化財調査報告書，第１３集　昭４３

注２　石川恒太郎「綾町地下式古墳調査報告」　宮崎県文化財調査報告書　第１４集　昭４４

注３　日高正晴，岩永哲夫「吹上地下式古墳発掘調査」　宮崎県文化財調査報告書　第２０集　昭５３

注４　綾，吹上両地下式の場合，調査者は竪穴全体を土をもって埋め閉塞していたと報告されている。

注５　日高正晴，茂山護「東立野の地下式９号墳」　宮崎考古　第１号　昭５０

注６　石川恒太郎，田中茂，茂山護，野間重孝「下北方地下式横穴第５号」　宮崎市文化財調査報告書　第３集　１９７７

注７　日高正晴「日向地方の地下式墳」考古学雑誌４３巻４号

図版 1

遺跡状況(1)

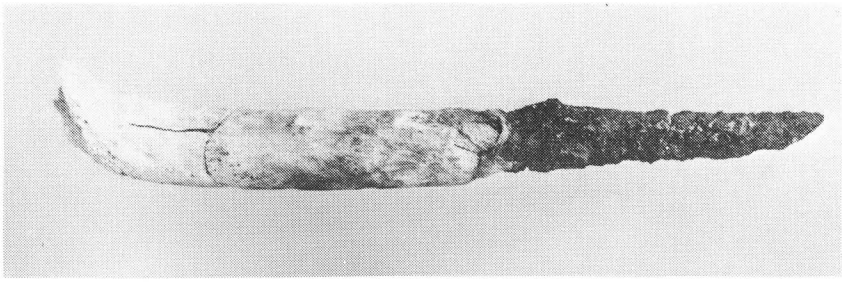
遺　跡　遠　景

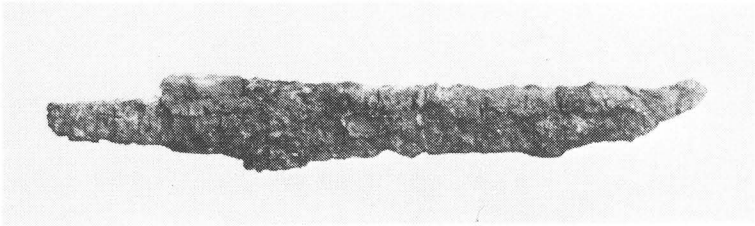
玄　室　内

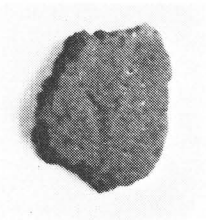
羨　　道　　部

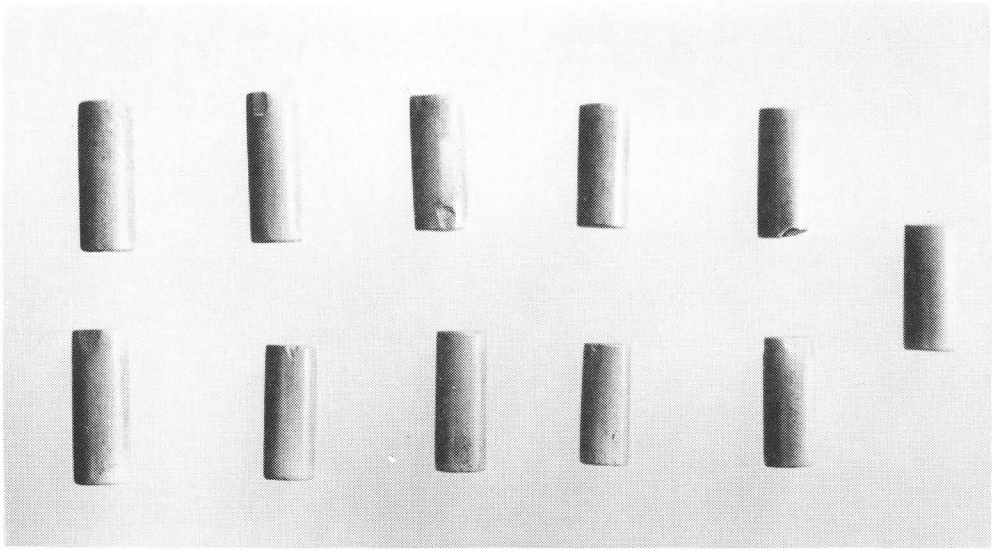
1 号 人 骨 出 土 状 況

図版 3
副葬品









Ⅲ　大萩地下式横穴３６号発掘調査

西諸県郡野尻町大字三ヶ野山大萩

県埋蔵文化財調査員　　茂　山　　護

大萩地下式横穴３６号の朱線

本　文　目　次

はじめに …… 33
Ⅰ　調査の経緯 …… 33
Ⅱ　遺構の所在地 …… 35
Ⅲ　地下式横穴の構造 …… 35
Ⅳ　遺物の出土状況 …… 39
Ⅴ　出土遺物 …… 41
(1)　武　器 …… 41
(2)　農耕具 …… 43
(3)　その他の遺物 …… 45
Ⅵ　玄室壁面の装飾 …… 48
Ⅶ　考　　察 …… 48
Ⅷ　結　　語 …… 52

挿　図　目　次

第1図　大萩遺跡地下式横穴分布図 …… 33
第2図　地下式横穴36号実測図 …… 37
第3図　直刀・剣 …… 40
第4図　鉄　　鏃 …… 42
第5図　骨　　鏃 …… 43
第6図　鎌・斧頭・鍬(鋤)先・刀子・棒状鉄器 …… 44
第7図　鋲金具付木片 …… 45
第8図　地下式横穴出土(鋤)先実測図 …… 47

図　版　目　次

図版1　大萩地下式横穴36号の朱線 …… 30
図版2　壁面の彩色線文 …… 55
図版3　鉄鏃・鉄斧・鍬先の出土状況 …… 56
図版4　直刀・剣・木製装具 …… 57
図版5　鉄　　鏃 …… 58
図版6　鎌・斧・刀子・鍬先・棒状鉄器 …… 59

表　目　次

表1　大萩遺跡の地下式横穴一覧表 …… 34
表2　大萩地下式横穴36号出土の鉄鏃 …… 41
表3　鍬（鋤）先・鎌を副葬した地下式横穴 …… 49

はじめに

野尻町にある「大萩遺跡」は，昭和４８年に，２２基の地下式横穴が，特殊農地保全整備事業に伴って緊急調査されて以来，５０年度までに地下式横穴のほかに弥生終末期の土壙群や住居跡など相次いで発見され俄に注目された西諸県地方でも重要遺跡の一つである。

このほど，大萩遺跡の一角に属する岩瀬口で，朱線で彩色された地下式横穴を調査したので結果の概要を報告する。

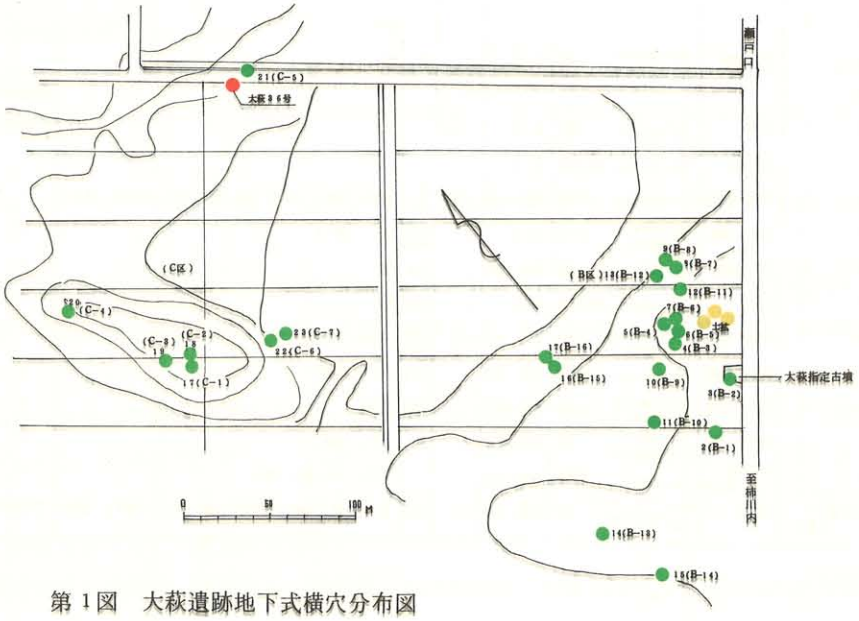
※　大萩遺跡(1)　瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告

宮崎県教育委員会　　１９７４

Ⅰ　調査の経緯

遺構発見の直接の切つ掛けは，５３年８月２３日に，畑地灌漑用水導管埋設工事中，農道に掘った埋設溝中に幅３０cm，長５０cmほどの陥没口ができたことによる。４８年度以来，多くの地下式横穴が発見されているだけに，工事担当者に遺跡に対する認識があり，直に工事を中止し町教委へ通報された。町教育委員会では県文化課と連絡をとり，２４日に町文化財専門委員真方良穂氏と県文化課埋蔵文化財担当の岩永哲夫氏が現地を踏査し，地下式横穴であることを確認し，今回の発掘調査となったのである。

調査は，野尻町教育委員会の依頼を受けて昭和５３年８月２８，２９の両日，茂山護が担当した。調査にあたっては，成長期にあった栽培作物の撤去に心よく応じていただいた地主の古園夏次氏をはじめ，諸連絡や折渉に奔走いただいた真方良穂氏，国武正広氏（町教委主事），それに東郷秋男・カオル夫妻の協力を得た。記して感謝の意を表したい。



第１図　大萩遺跡地下式横穴分布図

（表１）　大萩遺跡の地下式横穴一覧表

番号	調査年次	地下式横穴番号	構造 堅坑・閉塞	構造 玄室規模と床面形（奥行×幅×高さ）	構造 方位	人骨 数	人骨 頭位	副葬品	文献・その他
1	34	A	方形・	160×225×？ 梯形	南北	2 体	東	剣1，刀子2，鏃17，鉄斧1，銀環1，貝輪2，朱玉4	宮崎県文化財調査報告書第5輯（35年）
2	48	B — 1				1男			塗朱
3	〃	〃 2				5男2女2		剣6，刀子7，鏃13，銀先1，斧頭1，石突5，骨製品	県指定円墳下
4	〃	〃 3				1男			
5	〃	〃 4				3			
6	〃	〃 5							
7	〃	〃 6							
8	〃	〃 7							
9	〃	〃 8							
10	〃	〃 9						直刀1，剣1，刀子3，鏃10，鉾1，鉋1	
11	〃	〃 10							
12	〃	〃 11							
13	〃	〃 12						剣5	
14	〃	〃 13						直刀2，剣2，刀子1，貝釧，櫛1，鉄製品残欠2	
15	〃	〃 14						直刀1	
16	〃	〃 15						刀子1	
17	〃	C — 1	方形・礫積	210×185×？ 梯形	南東—北西	4	北東	刀子4，鏃5，刀1，鏃片3	
18	〃	〃 2	半円形・礫積	100×200×70 楕円状	北東—南西	1	南東		
19	〃	〃 3	長方形・	280×190×110（妻入り） 長方形	南西—北東	1	北東	直刀1，刀子1	
20	〃	〃 4	方形・礫積	（平入り） 梯形	東—西	1	南	刀1，鏃1，刀子1，剣1，矢柄1	
21	〃	〃 5	半円状・礫積	170×240×120 梯形	東—西	1	北	刀子1，貝輪2	
22	〃	〃 6						鈴3	
23	〃	〃 7	方形・礫積	180×230×110（寄棟平入り） 梯形	東—西	2	北	鏃	
24	〃	B							調査前に破壊
25	49	F — 1	半円状・	160×200×60 楕円	南—北	1 体		刀1	大萩遺跡　宮崎県教育委員会49年
26	〃	〃 2	長半円状・	120×180×90 隅丸方形	南—北	1		刀子1	〃
27	〃	〃 3	半円状・板石積	170×260×120 楕円状	南西—北東	2女男	東西	銀環4，貝釧1，刀子1，刀2，鏃6，轡1，辻金具3，尾錠1	〃　木棺痕跡あり
28	〃	〃 4	半円状・礫積	160×260×120（寄棟平入り） 長方形	東—西	2	北西南東	刀子1，鏃10	〃
29	〃	〃 5	方形・礫積	70×210×50 梯形	南西—北東	1	南東	鏃8	〃
30	〃	〃 6	半円状・	135×190×？ 隅丸方形	南—北	2	南西	鏃1	〃
31	〃	〃 7	半円状・礫立	135×245×110（寄棟平入り） 長方形	南西—北東	2女男	北西南東	蛇行剣1，剣1，刀1	〃
32	〃	〃 8	隅丸方・土嚢積	125×220×86 楕円形	南西—北東	1	北西	刀子1，鉄鏃6	〃
33	〃	〃 9	方形？・土塊	100×218×85（寄棟平入り） 長方形	北東—南西	1	南東	刀子1	〃
34	〃	〃 10	長半円状・板石	170×235×？（寄棟平入り） 梯形	南西—北東	1	東	刀子1，貝輪1	〃　全面塗朱
35	〃	〃 11	長半円状・粘土板	115×230×？ 楕円状	南東—北東			刀子1，刀1，鉋2，鏃5	〃
36	53	（岩瀬口）大萩36	半円状・	130×275×112 / 145 梯形	南西—北東	2	南東	直刀1，剣1，銀先1，斧頭1，鑿1，刀子1，鏃19，鉄製品	彩色線文の装飾あり

Ⅱ　遺構の所在地（第1図）

遺構が発見されたのは，西諸県郡野尻町大字三ケ野山字岩瀬口３２５７－１番地で，畑地から農道下にかけて構築されていた。この地点は，いわゆる大萩遺跡の北西部にあたるところで，県指定大萩古墳（円墳）の北北西約３４０ｍの位置になる。この位置は，４８年の緊急調査の際Ｃ地区とされた地域の北端に相当しており，当時単独に発見されたＣ－５号の所在地に近接している。整備前の地形図をみると，大萩遺跡はかなり起伏の多かったところで，遺構の多くは，当時の微高地を中心に発見されている。

大萩遺跡では，４８年度から５０年度にかけて実施された緊急調査で，３４基の地下式横穴が発見されており，これに，３４年に鈴木重治氏が調査した１基（鈴木重治〝野尻町大萩地下式横穴〟宮崎県文化財調査報告第５輯）を加えると総数３５基となる。今回発見の岩瀬口の遺構は，大萩遺跡としては36基目になるわけである。大萩遺跡では今後も引き続き遺構の発見が予想されるだけに，同一遺跡では遺構番号の統一がのぞましく，同時に遺構総数がわかるようにしたい。そこで，今回発見された遺構は，小字は岩瀬口になっているが大萩遺跡の一部であるので，「大萩地下式横穴３６号」（略称大萩３６号）と呼称することにしたい。

Ⅲ　地下式横穴の構造（第2図）

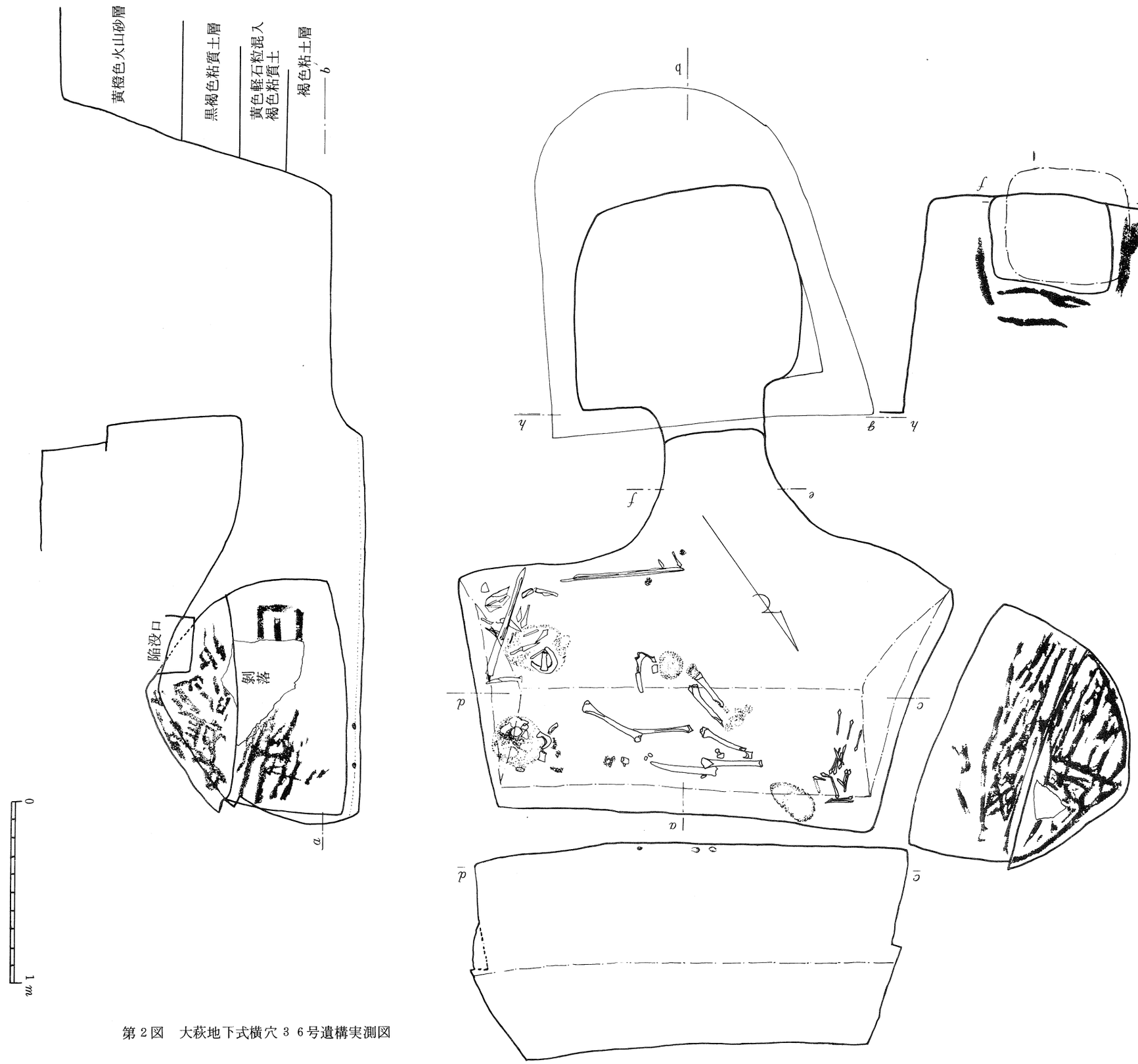
大萩３６号は，竪坑，羨道，玄室から構成され，Ｎ４５°Ｅの南北方向を主軸として竪坑を南に，玄室を北側にして構築されていた。現地はすでに基盤整備で表土層が50～80cmも削平されているため，現耕土下は２０cmほどで赤ホヤと呼ばれている黄橙色火山砂層になっている。大萩遺跡の地下式横穴は，いずれも，この赤ホヤ層を玄室の天井として下層の黒褐色粘質土から褐色粘質土層にかけて構築されるのが普通であり今回も同様であった。

本遺構の竪坑は，偶然にも畑地と農道の境する北側を基底にして幅176cm，長さ186cmの半円形状の掘り跡を黄橙色火山砂層面に鮮明に黒褐色の埋土で描き出しており容易に竪坑の全貌を確認することができた。半円形の掘り込みをもつ竪坑は，赤ホヤ面からⅥ層の粘土層まで120cmの深さに，基底面は垂直に，半円部は坑底へ向けて斜めに掘りこんであった。坑底は幅145cm，長さ120cmとせばめられていた。

羨門は，基底壁面のほぼ中央に，左右の側壁からそれぞれ６０cmの位置にあり，坑底を底辺として高さ５０cm，幅６５cmの長方形状に開口する。羨門の周壁には，羨門を囲むようにおよそ１０cm幅の塗朱があり，上方は二段に塗朱されていた。

羨道は，長さ７０cm，中央部分で幅７５cm，高さ７５cmを示し，側壁天井共に玄室へ向って喇叭状の広がりをみせている。床面は羨門から１５cmほど入りこんだところで一段下りそのまま玄室へ続く。竪坑底面とはおよそ１５cmの比高差となる。羨道の天井はほぼ平担で，喇叭状に玄室へ向って開く壁面は鋭利な工具で調整されたらしく滑らかであった。

玄室は，羨道のある南側で，幅275cm，奥壁幅210cmを測り，奥壁へ向ってせばまる左右の壁面は，



第２図　大萩地下式横穴３６号遺構実測図

東壁で130 cm，西壁は140 cmであった。羨道の一段下った地点からの奥行は210 cmを示す。平面形は梯形平入りである。

天井は，東西に棟をおく寄棟造りで，45°～55°の勾配で壁に接する。壁に接する床から55～65cmの高さには，奥壁と左右両側の三方に，幅6～7 cmの棚状施設が設けられ家屋形の庇を形作っている。床はほぼ平担で，一面に薄く黄褐色の敷砂が観察できた。また，奥壁や側壁面には，掘削に使用されたクワ・スキ先や手斧鍬跡を示す半円形や長方形の掘り跡が随所にのこっていたが，それは副葬されていた鍬（鋤）先及び鉄斧の刃幅と全く一致するものであった。

ところで，36号の玄室について特記されることは，玄室内壁全面が幅3～4 cmの朱線によって彩色されていたことである。装飾地下式横穴として新たな資料を加えたことになる。

羨門の閉塞　石積などの特別な遺構は認められなかった。しかし，羨門部周囲の埋土がやわらかで有機質の腐蝕とみられるような黒土であったことや，羨道に軽く斜にしか埋土がなく玄室内部に達していなかったのをみると，何等かの閉塞遺構が存在した事は十分に推測されるところである。果してそれが木製戸であったか，竹垣様のものであったかは明らかでない。礫積閉塞の多い大萩遺跡では少数例であり，羨門の塗朱とも関連して特殊な閉塞をとっていたことも考えられる。

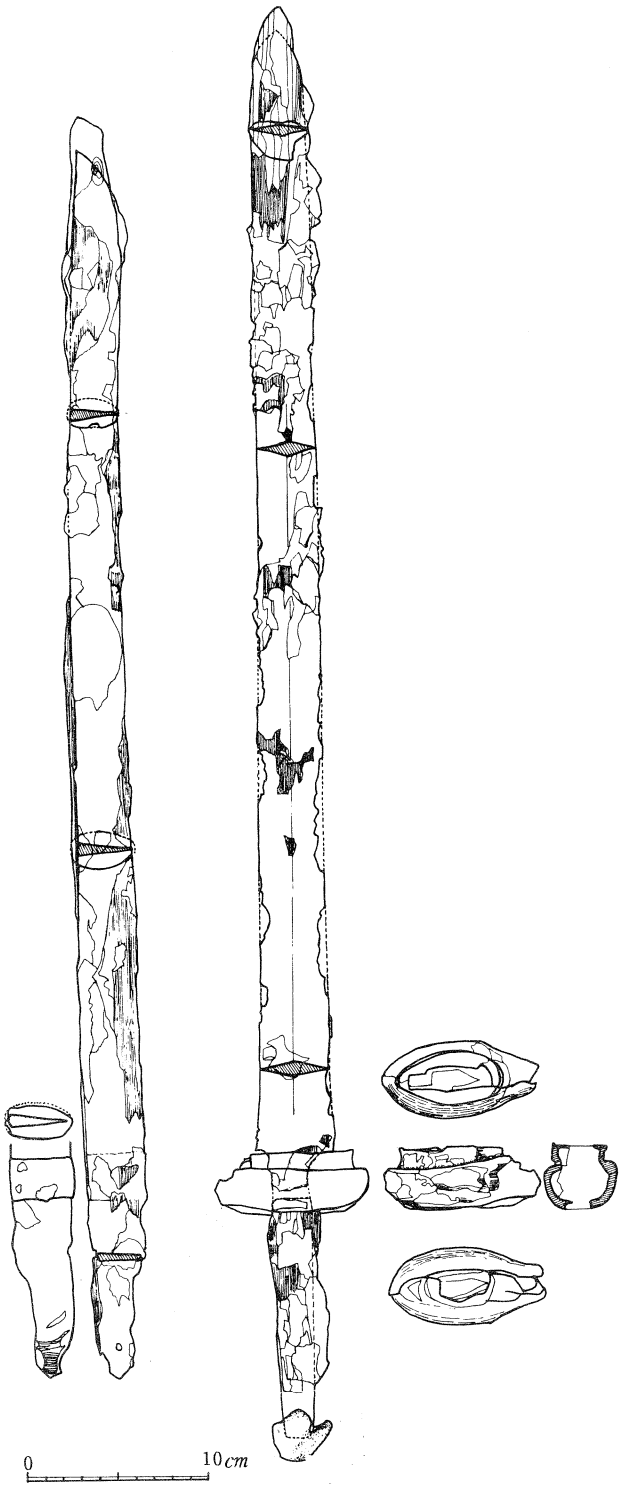
埋葬遺骸

玄室内に遺存した人骨は2体分であった。どちらも頭蓋骨は奥壁に向って右手の東壁側に置かれ，頭位方向はE 15° Sを示した。遺骸は，羨道に近い方から1号人骨，奥壁側を2号人骨と呼ぶことにした。2号人骨に下顎骨の一部が残っていただけで，どちらも押し潰され頭蓋骨の痕跡をとどめるだけであった。ことに1号人骨の方は，壁面の剝落もあってわずかに輪郭を残している程度であった。頭蓋骨に比べ，大腿骨や脛骨は遺存していたが，配列に若干の乱れがみられた。頭蓋骨にはどちらも朱がみられ，四肢骨の間にも点々と朱が遺存していた。埋葬方法は，大腿骨や脛骨の遺存状態からB区，F区の人骨同様，仰臥伸展葬※をとっていたものと考えられる。

※坂田邦洋〝人骨の埋葬方法〟大萩遺跡(1)　宮崎県教育委員会1974

Ⅳ　遺物の出土状況（図版3）

玄室内の遺物は，埋葬人骨を中心に3ヶ所にまとまりをもって出土している。第1は，1号人骨の頭蓋骨の周囲，玄室東南隅に出土した遺物群で，剣・平根式鉄鏃・刀子・鍬（鋤）先・斧頭・鎌が雑然とした状態で出土している。この位置は側壁の一部が剝落している部分で，遺物はほとんどこの崩壊土の下にあった。ただ剣だけは崩壊土の上面に剣身が出ていたことから側面に立てかけてあったのではないかと推測される。柄部分が南壁近くに，木製装具は2号人骨の下顎骨の近くに検出されたことは，側壁剝落の際に折損し飛散したことを示すものであるが，若干の不自然さを感じないでもない。これは，重なりあった状態で出土した鍬（鋤）先と斧頭，傍の刀子についても1号人骨の頭蓋骨痕跡上にあったことなどから果して副葬の原位置にあったものか疑問が残るところである。鎌は東壁のほぼ中央付近に刃部を北にして壁と垂直の位置にあった。頭蓋骨の東南傍に副葬されていた鉄鏃は6本で，鏃身の先端はまちまちの方向にあった。或は棚状施設上に副葬されていたのかもしれない。第2群は，玄室入口のす



第3図　直刀・剣

ぐ右手に入口を遮蔽するように側壁と平行に東西方向に置かれていた直刀と，切先部分に出土した鉄鏃である。直刀は刃を下に刀背を上にした状態にあった。鉄鏃は２本でいずれも尖根式である。第３群は，２号人骨の足元にあたる玄室の北隅に副葬されていた尖根の鉄鏃１３本と，骨鏃である。鏃身の方向は，１群の平根鏃と同様一定したものではなく多方向に折り重なつた状態にあった。

以上のほかに，２号人骨のすぐ北側に，３本の釘の通つた長さ６*cm*幅２*cm*の木片が出土している。また玄室東南隅に薄手の木片があったが，中凹みの木片の状況から剣の鞘木の残片と考えられた。

壁面の彩色とも関連して注目されるのは，玄室床面の所々に朱が遺存していたことである。特に頭蓋骨周辺，北隅の鉄鏃の部分，それに中央の肢骨の間に，径10～20*cm*の範囲に集中しており，その中には径３～４*cm*の円盤状を呈する朱玉の残片も遺存していた。そのほか直刀の周辺や肢骨の間に点々と朱玉の遺存が認められ，床面全域が塗朱されているかのようであった。

Ⅴ　出土遺物

(1)　武　器

直刀（第３図　　図版４）

平造りで，わずかに内反りのみられる直刀である。茎尻に若干の欠損があるが鋒までほぼ全形を残している。現存長67.5 *cm*，茎の長さ10*cm*，刀身の幅３*cm*，刀背厚0.７*cm*を測る。鞘口には幅2.３*cm*の素文の口金具がのこっている。茎や刀身部分には柄木や鞘木の一部が銹着している。柄木は葛巻されていたらしく紐状の痕跡が観察できる。鞘木の厚みは２*cm*前後と推定されるが幅については計測できない。

剣　（第３図　　図版４）

関の部分で折れ，茎と剣身が分れているが，全長約７７*cm*，身幅は３～４*cm*，鎬造である。剣身には鞘木や，鞘木を被覆していたとおもえる皮革の腐飾痕とみられるものが付着している。柄元には，中を刳ぬき合せ造りにした楕円球状の木製装具が着装されていたものと考えられる。この木製装具は長さ8.5 *cm*，幅4.２*cm*，前後の厚さ3.４*cm*の大きさで，柄側は球面状に，鞘口にあたる部分は平滑に仕上げられており，横断面形は壺形を呈する。装具の側面に薄く円弧の浮彫痕があり，円文か直弧文が彫刻されていたのではないかと考えられる。剣の装具としては鹿角製柄頭や鞘飾を着装する例が多いが，地下式横穴出土の剣で木製装具を着装した例はこれまでなく，新たな資料を加えたことになる。

鉄鏃（第４図　　図版５）

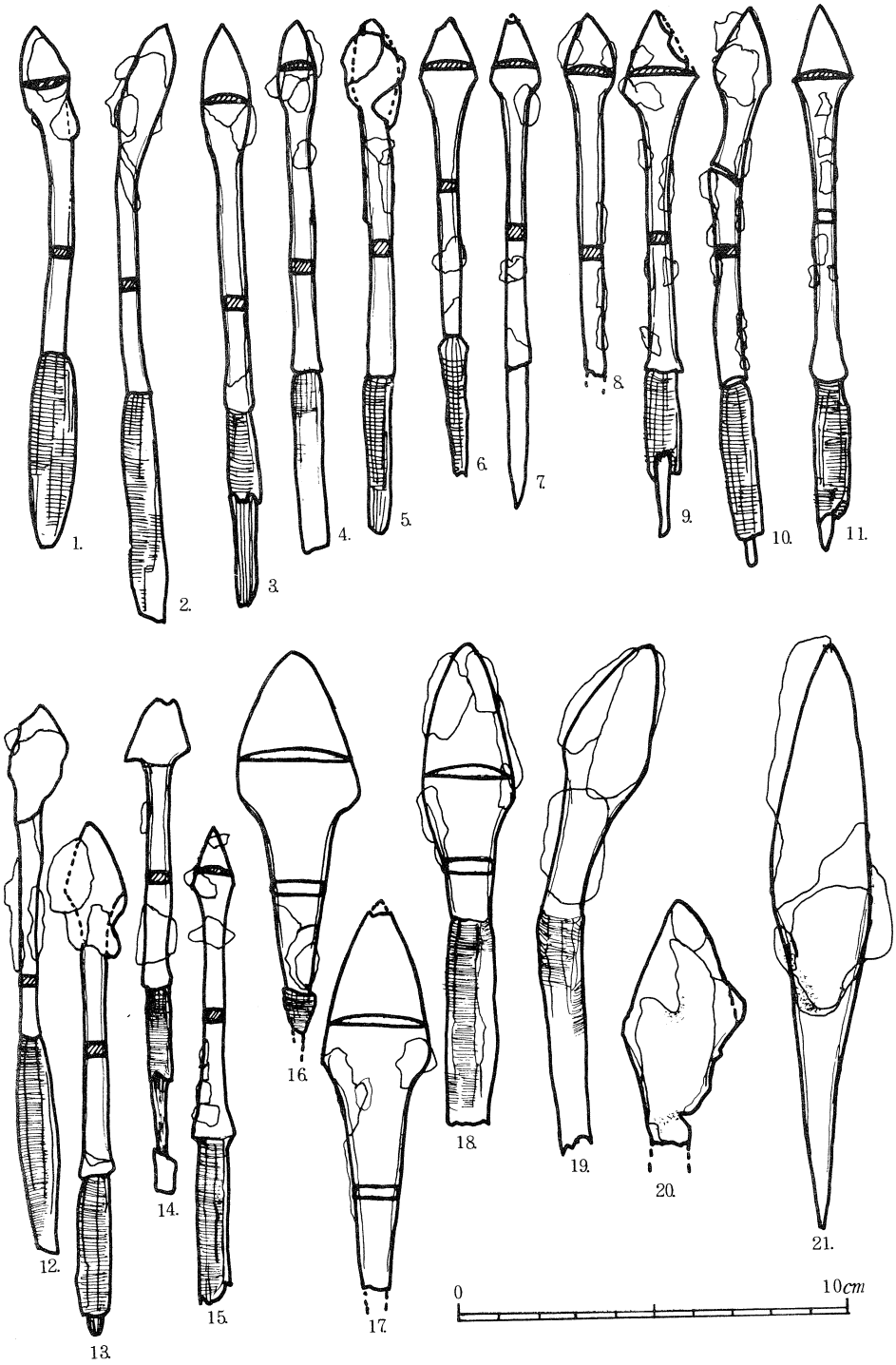
出土地点を異にしたが，長頸の尖根鏃と，平根式とがある。それぞれ鏃身の形態によって細分される。

尖根鏃（第４図１～１５）　　片丸造鑿箭式の鉄鏃である。鏃身が細身で剣身状のもの（１～５）と，鋒から左右に側辺が張り出した菱形状のもの（６～１３）とがある。後者の中には箆被と茎との境に棘状突起のみえるものもある。箆被部分は角状を呈し，平均の長さは６～７*cm*でさほど長頸ではない。各鏃の重量は，茎に銹着する矢竹の遺存度にもよって多少の差があるが，平均重量

（表・２）
大荻地下式横穴３６号出土の鉄鏃

図番号	全　長	身　幅	重　量	形　態
	cm	*cm*	*g*	
4図1	8.5	1.2	17	尖根式
2	9.5	1.2	20	〃
3	10.0	1.3	22	〃
4	9.1	1.0	21	〃
5	9.3	(1.3)	22	〃
6	8.3	1.5	22	〃
7	9.0	1.2	15	〃
8	(9.5)	1.2	—	〃
9	9.4	2.0	22	〃
10	9.8	1.5	15	〃
11	9.7	1.5	22	〃
12	8.7	(1.5)	20	〃
13	9.1	(1.5)	25	〃
14	7.4	1.5	15	〃
15	8.0	1.2	12	〃
16	9.8	3.1	27	平根式
17	9.7	2.8	20	〃
18	12.5	2.3	31	〃
19	13.0	2.2	32	〃
20	(6.8)	3.0	19	〃
21	(15.0)	(2.6)	—	〃

※全長は尖根鏃では箆被までの長さ



第4図　鉄　鏃

は 20.6 g ～ 20.4 g の範囲にある。

１４は玄室中央の大腿骨の間に，１５は玄室入口直刀の切先部分に出土したものである。他の鉄鏃に比べ鏃身が細く鋒が鋭利なのが特徴的である。

平根鏃（第４図１６～２１）　鏃身の銹化・銹着によって完形の明確でないものもあるが，平造定角式のものと，やゝ身の長い柳葉形のものに分けられる。この種の鏃は，地下式横穴出土の鏃には類例も多く，大萩遺跡では，Ｆ区の３号，４号，５号の出土品に類例を求めることができる。Ｆ区の地下式横穴には，平根鏃と尖根式鉄鏃との共伴例がないだけに，今回の３６号で両者が伴出していることは注目される。

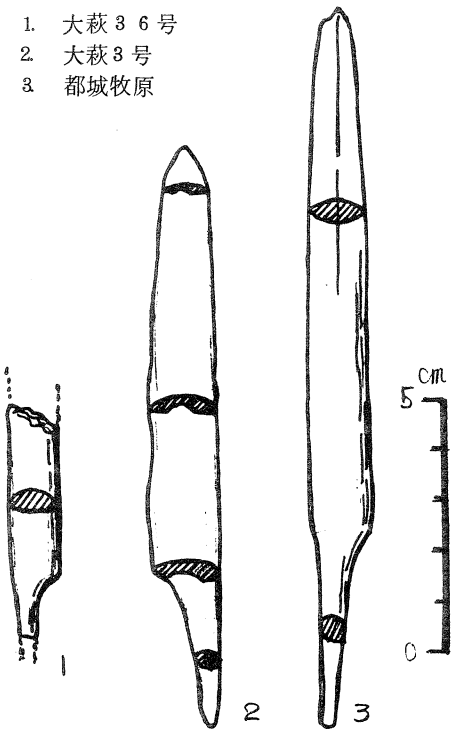
骨鏃残欠（第５図　１　）

尖根式鉄鏃の間に混在していたもので保存状態は悪くようやく採取できた。断面形は片丸状を呈し，幅１ cm，厚さ 0.４ cm，片関造で茎の一部を残す基部残欠である。残存長 4.５ cm。

骨鏃はこれまでに大萩３号や都城市川東牧原２号の８本副葬されていた例があるだけで地下式横穴の副葬品としても特殊である。

大萩３６号出土品は，断面形からは都城市牧原の骨鏃に近い形態をとっていたものと類推する。

※ 1.4 8年県教委緊急調査　※石川恒太郎〝地下式古墳の研究〟



第５図　骨　鏃

(2)　農工具

鍬（鋤）先（第６図　図版６）

先端部が若干欠損しているが，全長 12.5 cm，幅 13.5 cm内幅 10.7 cm，刃先の身幅３ cmを測るＵ字形の鍬（鋤）先である。木台をはめこむための内縁をめぐるＶ字形の入り込みは，幅１ cm，深さ0.5～0.6cmを示す。

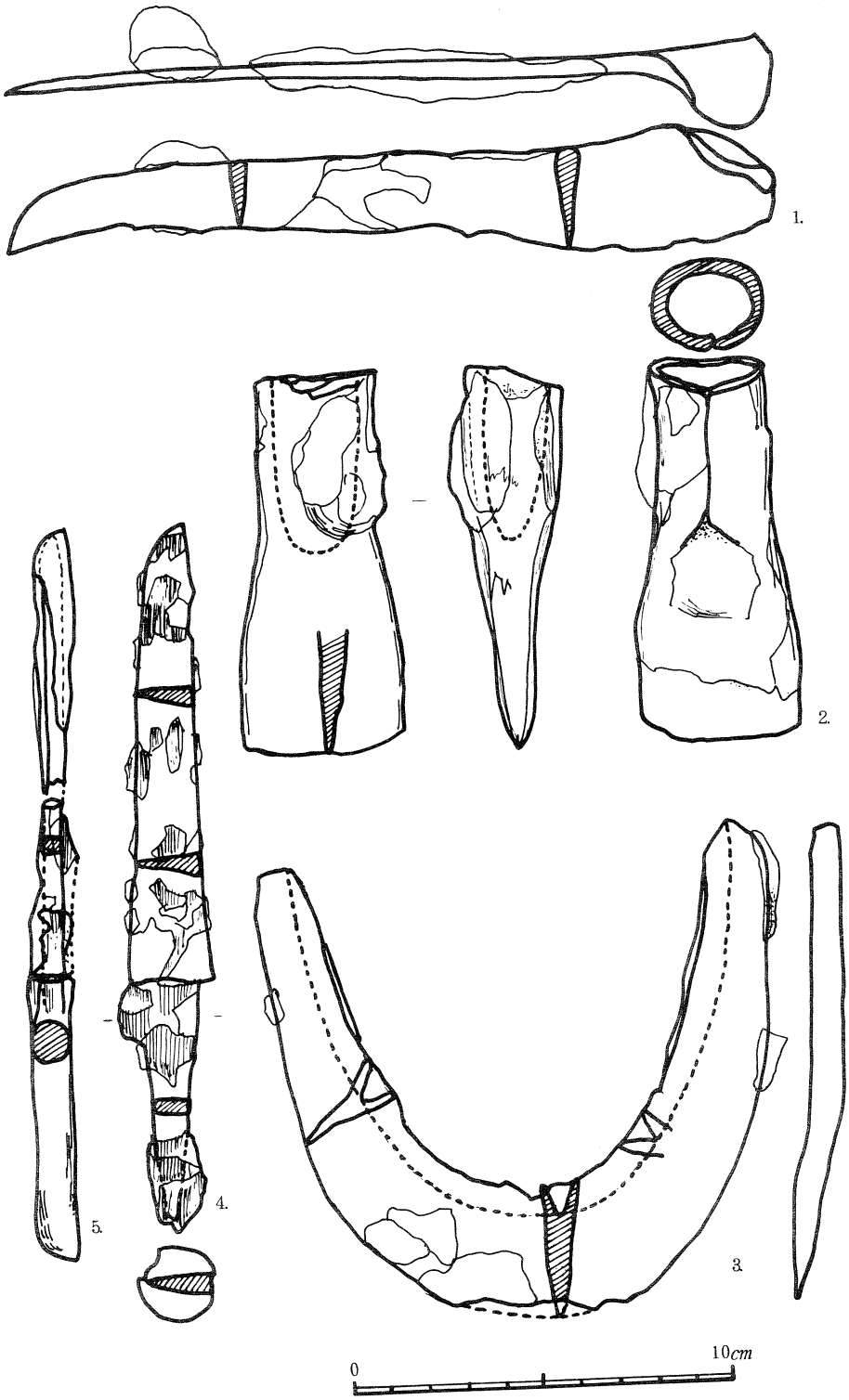
本品の鍬幅と，玄室壁面にのこる半円形の掘り跡が全く一致することから，本品がこの横穴の掘削に使用されたことは明らかで，墓室構築後にそのまま副葬されたことを示すものである。

鎌（第６図　図版６）

全長 20.5 cm，身幅２～2.5cm，平造の背部厚は 0.４ cmを示す。鎌先は内反りとなり，先端が著しく狭く尖っており，全体的に細身の曲刃鎌である。着柄部は基部の上方隅を斜に折り曲げる形式をとる。刃に対する柄の着装角度は 140°の鈍角をなす。鎌の重量は９５ g である。この重量は現在使用されている鎌に比べると若干重く，厚鎌の重量に相当するようである。

鉄斧（第６図　図版６）

全長 11.7 cm，刃先の幅 4.４ cmの無肩撥形の鉄斧である。左右両側を折り曲げて貼り合せられた袋部は，内径 2.２ cm，深さ 4.７ cmを示す。刃先の厚みから本品が斧としての機能を果したとは考えられず，むし



第6図　鎌・斧頭・鍬先・刀子・棒状鉄器

ろ手斧としての削る機能に比重がかかっていたものと推定する。ことに，玄室壁面に残る長方形の掘り跡と刃先幅が完全に一致することは，先述の鍬先同様，本品もまた玄室の構築に使用されたことを示すもので，手斧と同じ着柄方法をとっていたことが考えられる。

刀子（第6図　図版6）

刃身は平造で，ほとんど反りはみられない。現存長18.7cm，刀身部の長さ12cm，身幅は中央で1.6cmを示す。茎は6.7cmで，鹿角製の丸柄を着装していたらしく，柄元から柄頭にかけて径2cmの鹿角装具の一部を残している。刀身は革製の鞘に細められていたようで，所々に皮革の痕跡をみる。地下式横穴に副葬されている刀子の中では中型に属す。工具や護身用武器としての機能を果したものであろう。

棒状鉄器（第6図　図版6）

平根鏃と一諸に採集されていたことから，おそらく1号人骨の頭蓋骨周辺に遺存していたものであろう。先端3分の1のところで折れているが全長およそ19cm，径0.4cmの角形細身の棒状鉄製品である。基部に長さ7.5cmの角質製の丸柄が着装されている。棒状部分にも柄と同様の丸形の角質が銹着残存しており棒状部分を被覆した丸鞘だったものと考えられる。鉄棒の先端については断定できないが，銹化の状態から四角錐になっていたのではないかと推定される。本品と同じ形式で棒状部分が径0.3cmの丸形で，先端を欠損した残存長9cmの遺物もある。

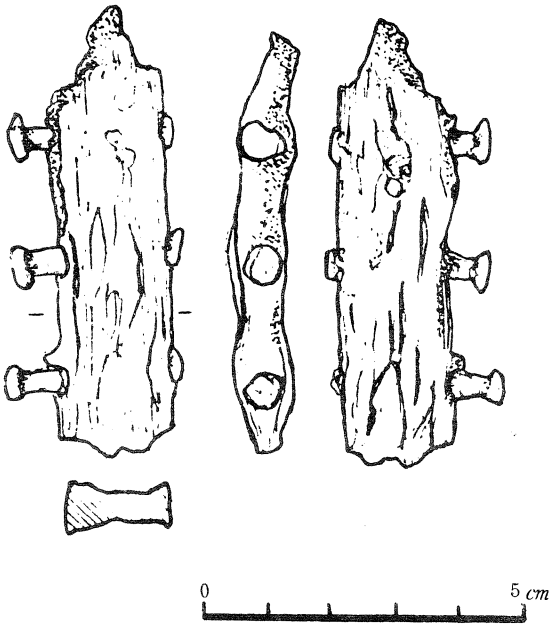
この棒状鉄器は，着柄状態や全体の形態からして錐ではなかったかと考えられる。鞘に納められていたことは，本品が携帯されていたことを示しており，あるいは一種の護身用具としての機能をもっていたのかもしれない。

(3)　その他の遺物

鋲金具付木片（第7図）

2号人骨の頭蓋骨の北側に接して，長軸を東西方向においた状態で遺存していたものである。

長さ6cm，幅2cm，現存厚0.7～0.9mmの縦方向に木目の走る木片である。側面から木片を貫いて両端に鋲頭を見せる3本の鉄製金具が打込まれている。鋲金具の全長2.8cm，頭部を除く軸部の長さ2cmでほぼ木片の幅に等しく，軸径は約3mmを測る。3本の金具はほぼ2cmの等間隔で打込まれている。鋲金具は3本とも木片の片側に突出した形で銹着しているが，木片と金具軸部の接触面には若干の間隙が観察されることから，本来は左右に可動できたのではないかと考えられる。木質の腐朽がすすんでいるため平面はくずれ易い状態にあるが，側面は，表面の硬化がみられ厚形に近い状態にあることを示している。



第7図　鋲金具付木片実測図

また，鋲頭の突出した側面部には，硬化した海綿状の付着物が観察される。或は，皮革製品等が連結されていた可能性もある。

本木片が，果して何であったのかにわかに推定できないが，両端に頭を有する長さ２～３cmの鋲金具については，福岡県宗像町相原２号墳※1や，福岡県宮田町南ヶ浦２号墳※2の出土遺物の中にみられる軸部に木質の銹着した金具に類例が求められる。報告書では不明鉄器，留金具とされているが，これらの両頭金具は，千葉県市原市持塚古墳７号墳の調査例で飾り弓の鋲金具と断定された金具※3に一致するものである。だとすれば，これに類似する金具を装着している本木片は，弓の弭に近い部分の残片である可能性が高いことになり，それも，鋲飾り弓とすれば，鋲金具着装状態を示す貴重な事例として注目すべき遺物といわなければならない。鋲飾り弓とした場合，鉄鏃に混在した骨鏃など，儀仗矢との関係など改めて注目される。

※1　「相原古墳群」宗像町文化財調査報告書第１号　宗像町教育委員会　１９７９。

※2　「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告第１集」　福岡県教育委員会　１９７９。

※3　田中新史『古墳出土の飾り弓－鋲飾り弓の出現と展開－」『伊知波良』１９７９。
本木片については田中氏の教示に負うところが多い。

朱　玉

最大のもので径２.５cm，ほぼ１.５～２.０cmの大きさの小片に分割されているが，小片の周縁にみえる円弧から推定すると，本来は，直径３.６～４.０cm内外の円形乃至は楕円形の平面形をもつ厚さ８～９mmの円盤状に作られていたもののようである。朱玉そのものは，ベンガラと考えられるが，それが辰砂に伴う天然ベンガラか，酸化鉄かは明らかでない。

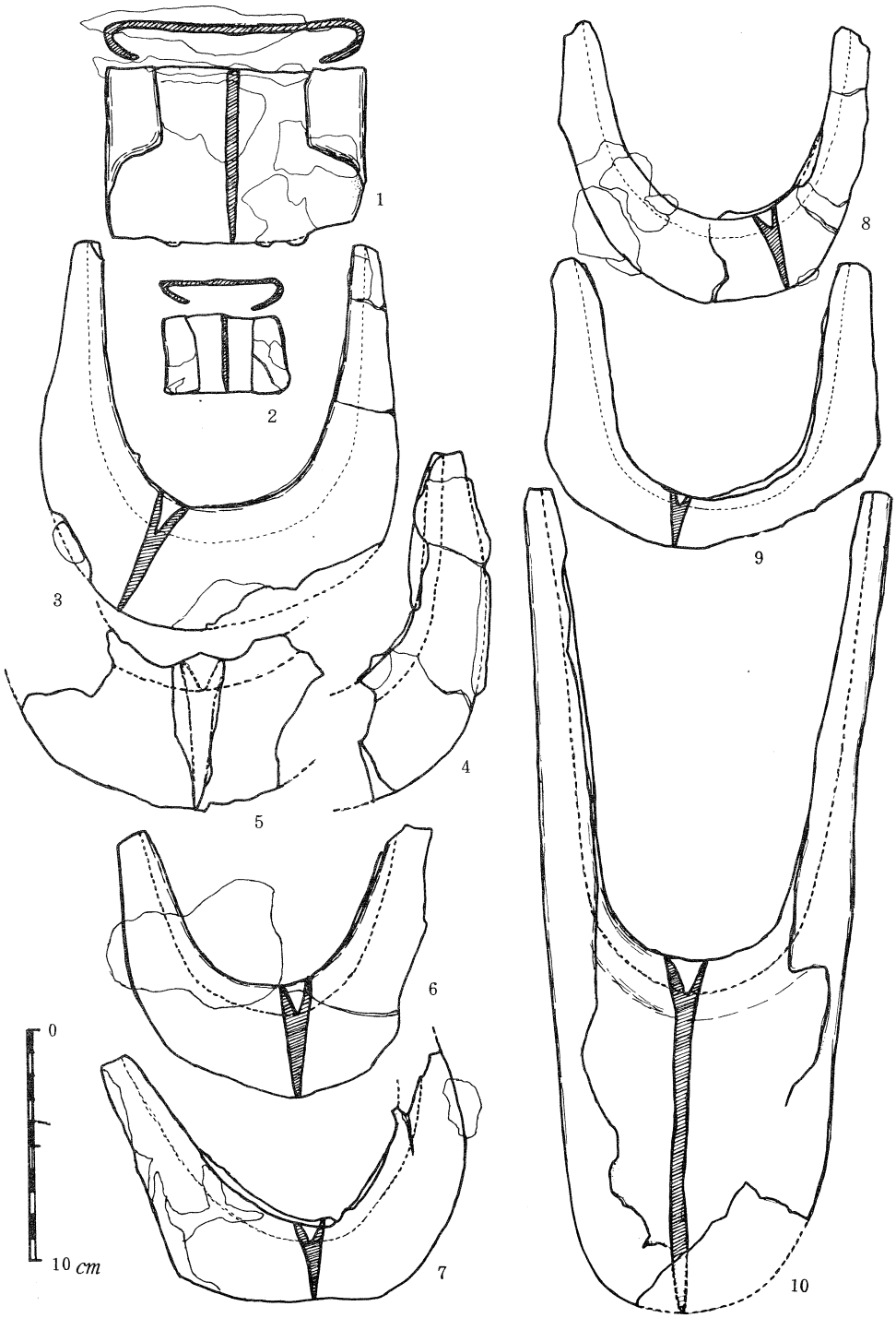
このような朱玉は，過去に大萩地下式横穴Ａ号※1や，小林市尾中原の地下式横穴※2に出土例がある。壁面の塗朱と共に注目される資料である。従来の報告の中にある玄室床面の朱塗された例のなかには，このような朱玉が溶けて泥状になっていたものがあったのかもしれない。いずれにしろ，地下式横穴に朱玉の出土例が集中している事は，後世の続日本紀文武天皇２年９月１０日の条※3に記す常陸国，備前，伊予と共に日向からも朱砂を献じたこととも関連して検討さるべき課題であろう。

※1　鈴木重治「野尻町大萩地下式横穴」県文化財調査報告書第５輯　昭３５年

※2　栗原文蔵「朱玉」

※3　改訂増補国史大系本

第8図　地下式横穴出土の鏃先実測図



1. 都城市下水流町　3. 宮崎市塚原４号　5. 国富町六野原１０号　7. 国富町大坪　9. 野尻町大萩３号
2. 国富町木脇塚原　4. 国富町飯盛１号　6. 国富町六野原　８号　8. 西都市元知原５号　１０. 高崎町城ノ前

Ⅵ　玄室壁面の装飾（第２図，図版１.２）

玄室壁面をいろどる赤色は，一見したところ朱を塗布したかのようであるが，いずれも３～４cm幅の朱線を横走或は斜走させて塗飾したもので，具象物を描いたものではないが，彩色線文といえる。

西側壁の線文　三角形の天井縁に沿って朱線をまわし，中に５本の横線と，これに交わる縦線を棟から棚状部分まで描いている。棚状施設から下方の壁面には等間隔に近い状態の横線が通り，その間に斜行する短線が描きだされている。短線のなかにはX字状に交差させ何らかの表出とみえるものもあるが，どの朱線も粗く雑然と描かれており判然としない点が多い。

東側壁の線文　　天井部に描かれた線文は短線で斜行文や雁行状を呈するものがあるが，雑然として全体の文様構成を把握できない。壁部分については一部剝落しているが，斜行線と横線それにこれと交差する短線で塗飾しており，奥壁側には斜線文，南壁寄りにはヨ字状の直線文がみえる。この壁面の図文が如何なる意味をもつものか俄に断定できないが，東側壁は頭位方向にあたるだけに注目される。

羨道のある南側天井壁の線文　羨道より上方の天井壁だけに斜行線や蛇行線，これに交わる短線があり，羨道の西側部分には三本の横線も描かれている。これらの線文は，羨道を中心にして左右に描出された感じがあり，丁度開口した羨道を陽光としてその光を受けて輝く雲を表現したかのようであった。

奥壁の線文　天井部から壁までほとんどすき間のないように朱線を横に斜に走らせベタ塗したかのように塗飾している。これは，羨道上方の天井部に描かれた線文を夜明けの行雲とすれば，奥壁の彩色は，夕日を受けて茜色に照り映える朧雲を思わせるものであった。

Ⅶ　考　　察

鍬（鋤）先と鎌について

大萩３６号の築造年代推定の基準となるものは副葬されていた鉄製品である。剣・直刀・鉄鏃・刀子・鉄斧・鍬先・鎌等はいずれも地下式横穴に通有の副葬品で確実な決め手となる遺物はない。ただ副葬品の組み合せとして甲冑を伴わないことから一時期下ることが考えられる。副葬品の中で若干注目されるのは，地下式横穴の中でも出土例の少ない鍬先と鎌である。以下，鍬先と鎌について述べてみたい。

鉄製の鍬（鋤）先には，長方形鉄板の左右両端を折り曲げて台木を挿入する袋部とした角型のものと，内縁に台木を挿入する刳り込みのあるU字形鍬先のあることは周知のことである。大萩３６号出土の鍬先は，刃幅と長さがほぼ均衡するU字形を呈し，都出A類に属する。A類の出現は５世紀中葉に位置づけられている。一方鎌は，刃部が内反りし，刃先の著しく尖[※1]った細身の典型的な曲刃鎌である。曲刃鎌の出現はU字形鍬先よりもやゝ早く５世紀前半といわれる。

ところで，地下式横穴の鍬先・鎌の副葬例は，六野原１号をはじめ今回の大萩３６号を加えわずかに１６例を数えるにすぎない（表３）。この中で，鍬先と鎌の両方を副葬していたのは大萩３６号と都城市下水流町の２例だけである。下水流出土品は，大萩例とは異なり角形の鍬先である。（第７図１）。角形鍬先は５世紀[※2]の中頃には姿を消しU字形鍬先と交代するといわれ大萩例に先行することは確実である。

それでは都出A類の副葬例はというと８例あって，これらは共伴[※3]関係で次の二つに分けられる。①は，

（表３）鍬（鋤）先・鎌を副葬した地下式横穴

出土地・（番号）	鍬・鎌の型	共　伴　遺　物	玄室の形態	文　献
国富町六野原　1号	曲刃鎌	横矧板鋲留短甲，直刀，斧，鏃		宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告第１３輯
〃　〃　8号	U字形鍬	三角板革綴短甲，眉庇付冑，直刀，剣，刀子，斧，鏃	長方形・妻入り	〃
〃　〃　１０号	U字形	獣形鏡，眉庇付冑，横矧板鋲留短甲直刀，剣，鏃，轡，土師器，管玉	長方形・妻入り	〃
〃　大坪	U字形	鏡，貝輪，直刀，剣，刀子，斧，鉇	長方形	宮崎県文化財調査報告書第１５集
〃　須志田飯盛　1号	U字形	直刀，……	長梯形・妻入り	宮崎県文化財調査報告書第１３集
〃　木脇塚原	打グワ仮器	三角板革綴短甲残欠，革綴衝角付冑残欠，頸甲，剣，斧，刀，鏃		田中茂"国富町塚原地下式横穴Ａ号出土遺物" 宮崎考古３号
西都市下三財元知原　5号	U字形	直刀，剣，刀子，鉇，斧，鏃，管玉	長方形・妻入り	４５１調査（日高正晴氏）
宮崎市下北方町塚原　4号	U字形	直刀，刀子，鏃，鉇、半円玉，臼玉，小玉	長方形・妻入り	宮崎県文化財調査報告書第１６集，石川恒太郎"地下式古墳の研究"
〃　〃　〃　5号	曲刃鎌(外反り)	鏡，直刀，剣，鉄，鏃，頸甲，眉庇付冑，横矧板鋲留短甲，三角付鋲留短甲，手斧，馬具，のみ，斧，玉類	長方形・妻入り	"下北方地下式横穴５号" 宮崎市文化財調査報告３号１９７７
高崎町横谷原村	茎付鎌	剣，鏃，土師器	半楕円形	石川恒太郎"宮崎県の考古学"
〃　原村城ノ前	U字形	直刀		石川恒太郎"高崎町原村城ノ前遺跡調査報告" 宮崎県文化財調査報告第１５集
都城市下水流町	角形鍬・曲刃鎌	剣，貝輪	楕円形	４９３調査（黒木昭三氏）都城市郷土館
野尻町三ヶ野山大萩　A	曲刃鎌	剣，鏃，刀子，斧，銀環，貝釧，朱玉	梯形，平入り	鈴木重治"野尻町大萩地下式横穴" 宮崎県文化財調査報告第５集
〃　〃　3号	U字形	剣，刀子，鏃，斧，骨鏃	長方形	４８１２調査
〃　〃　岩瀬口大萩36号	U字形・曲刃鎌	剣，直刀，鏃，斧，骨鏃，鉄器，刀子	梯形，平入り	５３　８調査

六野原８号や１０号のように副葬品も豊富で，三角板革綴短甲あるいは横矧板鋲留短甲に眉庇付冑などの甲冑に共伴するもの。（表３）

②は，国富町大坪，下北方町塚原４号，西都市元知原５号のように直刀・剣・刀子・鉇・鉄鏃・斧頭等に共伴し，甲冑を伴なわないものである。（表３）

大萩３６号例は②の群に属し，鍬先の形態からは元知原５号例に最も類似している。元知原５号例は直刀・剣・刀子・鉇・斧頭・鉄鏃・管玉に共伴したもので，副葬品の組合せでは大きな差は認められない。ただ，鉄鏃についていえば，元知原５号は尖根長頸鏃を伴わず平根式鏃だけであること，その中には二重の逆刺を有する無茎の平根鏃も含まれていることである。この無茎平根鏃は，５世紀末から６世紀初頭に比定されている横矧板鋲留短甲を共伴した西都原地下式４号の鉄鏃に類例が求められるだけに大萩３６号との間には若干の時間差が考えられる。また下北方町塚原４号にも[※4]二重の逆刺の無茎平根柳葉鏃が含まれており元知原５号とほぼ同期とおもえる。

鍬先自体の形態では，六野原出土品や下北方塚原４号例が，刃先部の身幅が５～７*cm*と広いのに対し，元知原や大萩３６号例は３.５*cm*前後の身幅しかなく，①群より②群がやゝ細くなる傾向がうかがえる。大萩３号例はさらに身幅が狭くなり，左右側面に張り出しが見え凹字形に近く，都出Ｃ類への移行形ともいえる形態を呈する。[※5]

一方，曲刃鎌の副葬例は５例を数えるが（表３），甲冑との共伴例は六野原１号と下北方町塚原５号とがある。六野原１号出土品は現在すでに現物の確認ができないが，塚原５号の曲刃鎌は先端部が外反り乃至は直に近く他に類例をみないものである。共伴の甲冑・馬具等から５世紀後半に位置づけられるものである。都城市下水流の曲刃鎌は着柄部が直角になる型式で，角形鍬先と共伴している。角形鍬先

の下限を5世紀中頃とする都出氏の編年観に従えば，下水流の曲刃鎌はU字形鏃先に先行するもので，地下式横穴に副葬された農具としては古い方に属するとみてよいであろう。大萩３６号と同じ台地に発見された大萩A号では，剣・刀子・斧頭・鉄鏃・貝輪・銀環に共伴しており，築造年代は6世紀前半に比定されている。

以上のことから判断されることは，地下式横穴に都出A類のU字形鏃先や曲刃鎌が副葬されるのは5世紀後半から6世紀の前半に限定されるのではないかということである。遺構の形態からみれば，ほとんどが地下式横穴の構造編年[※6]からは第一様式にあげられる長方形・羨道妻入りの形式のものが大半を占めていることは注目しなければならない[※7]。この点，構造上梯形平入りの第二様式に位置づけられる大萩３６号例は，副葬品の組合せでは同じ②類に属する元知原５号や下北方塚原４号よりは遺構編年上後出と考えられる。このことは遺物の上でも指摘されたことであるが，それがどれほどの時間差を伴うものかは，なお共伴遺物との詳細な比較検討が必要である。

註※１※３※５　都出日呂志"農具鉄器化の二つの画期"考古学研究１３巻３号　１９６７

※２　４９年３月に黒木昭三氏によって調査され，現物は都城市郷土館に保管されている。

※４※７　日高正晴"日向地方の地下式墳"考古学雑誌４３巻４号　１９５８年

※６　鈴木重治"野尻町大萩地下式横穴"宮崎県文化財調査報告第５輯"１９６０年

装飾について

大萩３６号の装飾は，羨門外壁の朱彩と，玄室内壁に描かれた彩色線文とで構成されている。羨門外壁の朱彩は，羨門を囲むように左右と上部に塗彩したものである。それは，特別な図文を描いたものではないが，横口式家形石棺やあるいは横穴の入口の外壁に彫刻や彩色の図文を描いたものと軌を一にするものとも考えられ，死者の安息の場である壙内への悪霊や悪魔の侵入を防ぐための除魔封禁のしるしではなかったかと考えられる。玄室内壁の彩色線文は，幅３～４*cm*の朱線でもって一見ベタ塗りともおもえるように塗彩したもので，具象的な図文が少ないだけに彩飾の意図を明確にすることは困難である。しかしそれらの朱彩が，被葬者に対する深い感情と他界観念にもとずいて特別な意図をもってなされたことは十分に推察されるところである。また，根底に赤色による除魔の思想があることも否定できないことであろう。

ところで，東西両側壁の図文のうち，西壁に描かれた線文[※1]は，高原町旭台の地下式横穴７号をはじめ６号，１２号などに描かれていた直線図文に対比されるものであろう[※2]。旭台の図文にくらべると，線文は雑然として形骸化は否めないが，明らかに家屋内部の貫や束木あるいは柱を表示したものと考えてよい。一方，東壁の図文は，壁面の剝落もあり満足ではないが，埋葬人骨の頭部に位置するだけに，壁面に残る斜線文とヨ字状の直線文には，悪魔や悪霊から死者を守るための呪禁の意図が付与されていたものであろう。

羨道のつく南壁天井部に描かれた意図不明の複雑な線文も，詳細に観察すれば羨道を中心に放射状に描かれた感じがあり，それは，あたかも羨道を陽光とした旭日に輝く行雲の表示ともうけとられるものである。またベタ塗りともみえる北壁の彩飾は，夕日に映える朧雲の重なりにも例えられる。果して，当時どのような太陽信仰があったか速断できないが，少なくともこれらの壁面の朱彩の中には，陽光をもって来世への蘇生と安穏なくらしを祈念する呪的観念が表示されているのではないかと思えるのである。それは，地下式横穴が家屋形構造をとることの中に，来世の生活を願う他界観の存在を見い出すからである。

分布　現在までに朱彩直線文を描いた地下式横穴は，高原町旭台の３基のほかに，高崎町前田谷川仮屋尾３号，同町江平宇之原にも発見されている。これに，今回の大萩36号を加えると６基の装飾地下式横穴が存在したことになる。[※3] [※4] この６基は，野尻，高原，それに高崎の三町が境界を接する地域を中心に，一辺12㎞前後の正三角形に囲まれる範囲内にそれぞれ位置しており，特殊な分布地域を形成することが予想される。今後，確実に分布範囲が限定されることになれば，その背景について特殊集団の存在とも関連して検討さるべき課題である。

従来．地下式横穴の天井に線刻された屋根形の表現は装飾としてとりあつかわれた事はないが，旭台の彩色線文による垂木表現とも通じるものがあり当然装飾の範疇に加えらるべきものとおもう。そこで壁面塗朱の事例も加え，地下式横穴の装飾を次のように分類しておきたい。

まず第一に挙げられるのは，線刻によって屋根や家屋内部を表出するもので，地下式横穴の模式図として引用される六野原２号に代表される。[※5] これを１類とする。六野原２号のほかに，国富町大坪，えびの市真幸島内などがある。[※6] [※7] 島内は楕円形の寄棟造の構造をとるが，他はいずれも長方形妻入の遺構である。副葬品に三角板鋲留短甲や，横矧板鋲留短甲を伴っている。

次は，玄室壁面の全面か或は片面だけを塗朱したもので，これを２類とする。これは，石棺や石室内面に塗朱したものとも通じるもので，本来装飾古墳の中には加えられていないが，玄室壁面全面を塗朱したことは，単に除魔鎮魂を目的としただけでなく多分に装飾的な意図も加味されていたとおもえるからである。宮崎市下北方町塚原５号，[※8] 西都市西都原４号，[※9] 大萩Ｆ－10号が[※10]挙げられる。西都原４号には部分的に朱線文とみられるものがあり，次の３類との関連も考えられる。玄室の一面のみに塗朱した例として，国富町須志田飯盛１号がある。[※11] 玄室の平面プランは，大萩Ｆ－10号が梯形で，他の塚原５号，西都原４号，それに飯盛１号は長方形妻入りの構造である。

最後が，旭台の６号，７号，12号に代表される朱線によって屋内の貫や束木或は棰木などを表出したと考えられる彩色直線文の図文を描くものである。これを３類とする。高崎町前田谷川仮屋尾３号，同江平宇之原[※13]などがこれに属する。大萩36号も一応３類に分類されるが，玄室内壁全面を家屋表示とみられる彩色で[※14]統一した旭台例とは，若干の相違もあり３類－Ｂとしておきたい。

以上の分類は同時に若干の時期差を伴うことも考えられる。副葬品や玄室構造からは１類と２類に先行するものが多く３類が後続するとおもえるが，構造編年上は第二様式とされる片袖梯形の玄室をとる仮屋尾3号では，副葬された鉄鏃の中に野中アリ山古墳から多量に出土している鏃身の両側に二段の逆刺をもつ有茎腸抉柳葉式の鉄鏃[※16]がみられるなど一概に後出と決められない要素もあり，編年については更に検討を要する課題である。

註※１　斉藤忠　〝葬送儀礼－古代日本人の死の儀礼〟現代のエスプリ№111　　1975

※２　石川恒太郎・岩永哲夫　〝旭台地下式古墳群調査報告書〟宮崎県文化財調査報告書第19集　　1975

※３　畑地造成で破壊　45年３月に黒木昭三氏調査，同氏より教示。写真確認による。

※4　黒木昭三氏の教示による。　46年7月黒木氏調査

※5　史蹟名勝天然紀念物調査報告　第13輯　宮崎県　1944

※6　石川恒太郎〝国富町大坪地下式古墳調査報告〟宮崎県文化財調査報告第15集　1970

※7　栗原文蔵〝えびの市真幸島之内地下式横穴〟宮崎県文化財調査報告書第12輯　1967

※8　〝下北方地下式横穴5号〟宮崎市文化財調査報告書第3輯　1977

※9　日高正晴〝日向地方の地下式墳〟考古学雑誌43巻4号　1958　報告書では「壁面は朱の様なもので塗られている」とだけ記されているが，再点検の結果，鮮明な朱彩が認められる。開放されているめ，心ない落書で寸断されているが壁面から天井にかけて部分的に朱線の痕跡が認められる。

※10　大萩遺跡(1)　宮崎県教育委員会　1974

※11　石川恒太郎〝国富町飯盛の地下式古墳調査報告〟宮崎県文化財調査報告第13輯　1958

※12　鈴木重治〝野尻町大萩地下式横穴〟宮崎県文化財調査報告第5輯　1960

※13　※3に同じ

※14　※4に同じ

※15　※9　同書

※16　北野耕平〝野中アリ山古墳〟『河内における古墳の調査』大阪大学　1964

※17　稿了後昭和54年5月，高崎町仮屋尾に隣接する高原町日守の地下式横穴で，斗組の表示とみられる浮彫線刻の装飾が発見された。1類の線刻装飾の中に浮彫を伴うものを細分する要がでてきた。

Ⅷ　結　　語

玄室壁面を朱線で彩色した大萩地下式横穴36号の発見は，50年高原町旭台に初めて発見された装飾地下式横穴に新な資料を加えただけでなく，旭台を中心に野尻，高崎を結ぶ装飾地下式横穴の新な分布圏を予想させた点で重要であった。同時に，すでに300を越す地下式横穴の中に，装飾地下式横穴として3つの類型を見出す切っ掛けを与えたことは大きな成果であった。装飾地下式横穴が，九州の装飾古墳の中でどのように位置づけられるのか，系譜や背景については今後の課題としたい。

ところで，大萩36号は，遺構の構造上は特に変った点もなく一般に見られる形で，玄室平面プランは羨道側を底辺とする梯形で，天井寄棟造，羨道は平入りの構造である。大萩遺跡の中では，49年に発見調査されたF区の10号にもっとも類似しており，しかも10号が玄室全面を塗朱していたことは，両者の関連を示唆するものとして注目すべきである。※1

大萩遺跡では，これまで発見された36基の地下式横穴中，一般に古式に位置づけられる長方形妻入りの玄室平面プランを有するものが1基もなく，大半は，梯形平入り型で占められている。※2 これは，大萩遺跡の地下式横穴群の築造年代比定の上で，一つの指標を与えるものとして重視される。

大萩36号に埋葬された遺骸は２体であった。家族墓としての性格を有する地下式横穴では当然追葬が予想されるが，36号では副葬品の出土位置に若干の疑問が残ったが，追葬を示す積極的な確証は得られなかった。埋葬遺骸は，玄室の右手・東南側に頭位を置き仰臥伸展葬されていたものと推定した。大萩遺跡では発見された遺骸の大半は仰臥伸展葬をとっており，大萩集団の一般的な埋葬姿勢だったものとおもえる。埋葬人骨の頭位については，玄室の長軸方向によって決定されるだけに，墓坑の構築にあたっては，当然，墓地を構成する所属集団のもつ頭位方向の慣習に従って掘坑の方向を定めたとおもえる。※3 大萩地下式横穴群では，頭蓋骨の遺存した21例からは次のような結果を得ている。

東南におくもの …… 15例

北東におくもの …… ４例

北西におくもの …… ２例

全体の70%が東南に頭位をおいていることになり，大萩遺跡では頭位方向を東南にする慣習が存在していたのではないかと考えられる。大萩36号もそうした一般的な慣習に従っていた事になる。ちなみに，えびの市久見迫地下式横穴群の場合をみると，人骨のあった10例中，ほとんどが北東に頭位をとっていた。※4 また，同市馬頭の地下式横穴群では南北に玄室の長軸方向が置かれているなど，地域とその所属集団の慣習によって方位の異なることが指摘できそうである。※5 しかし，東南や北東の方位は，古墳時代の一般的な頭位に一致するものでもある。※6

副葬品は，剣１，直刀１，鉄鏃21，刀子１，鍬（鋤）先１，鎌１，斧頭１，細身の棒状鉄器など武器と農工具だけで，須恵器や土師器は伴っていなかった。全般的に副葬品の少ない大萩遺跡の地下式横穴群の中では，A号，B－１号，B－９号，C－４号，F－３号などと並んで比較的豊富に副葬品をもっていた例である。大萩遺跡の群内ではこれまで甲冑を所持していたものがなく，梯形や楕円形の平面プランをもつものの多い事とも関連して注目されることである。大萩遺跡では，武器や農工具が，甲冑に変わり編年の基準にされなければならない指標遺物として位置づけられる。

大萩36号は，副葬されたU字形鍬（鋤）先や曲刃鎌，それに鉄鏃の構成，玄室の平面プラン等から判断して築造年代は６世紀前半とするのが妥当かと考えられる。同じ平面プランをもつ遺構との群内での編年や，玄室彩飾の背景，そして，被葬者の問題等，なお多くの課題が残されたままである。

（茂山　護）

註※１　「大萩遺跡」(1)　宮崎県教育委員会　1974

※２　大萩遺跡では36例中16基までが梯形かそれに近い長方形状平入りの構造をとっている。

※３　※１に同書　坂田邦洋〝人骨の埋葬方法〟

※４　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告(1)　宮崎県教育委員会　1972

※５　※４に同書

※６　斉藤忠　〝古墳方位考〟　考古学雑誌39巻２号　1953

図版 2

壁面の彩色線文

西　側　壁

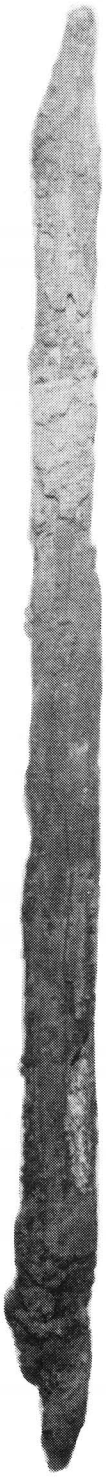
南　側　壁

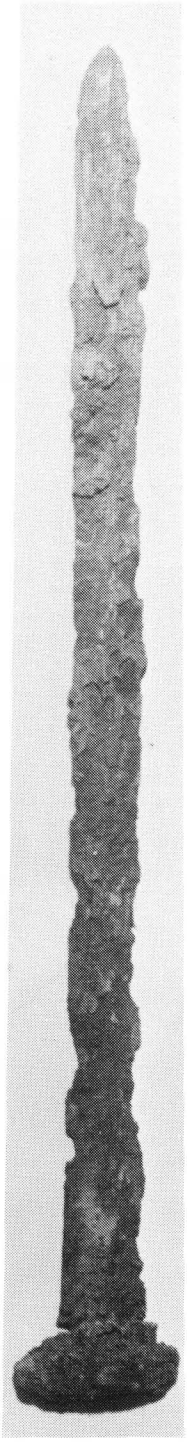
図版 3

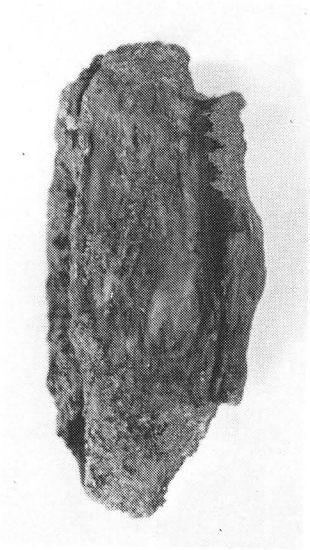
鉄鏃・鉄斧・鍬先の出土状況

図版 4

直刀・剣・木製装具







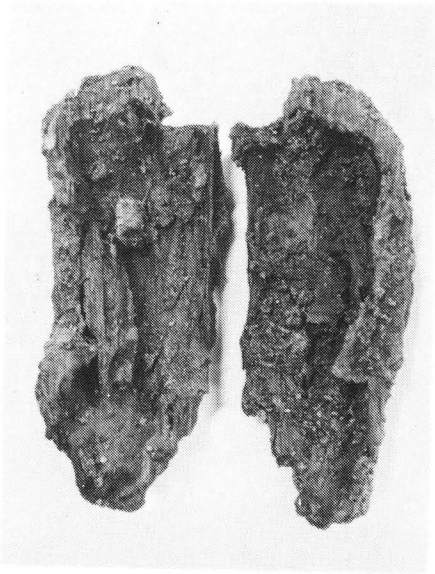
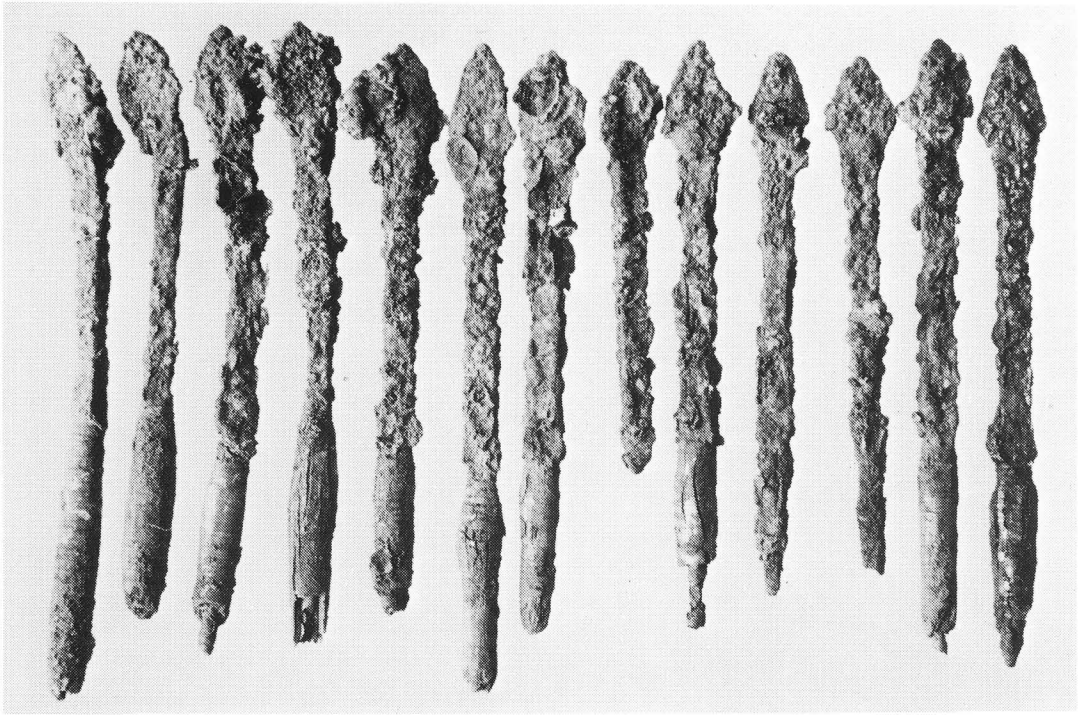
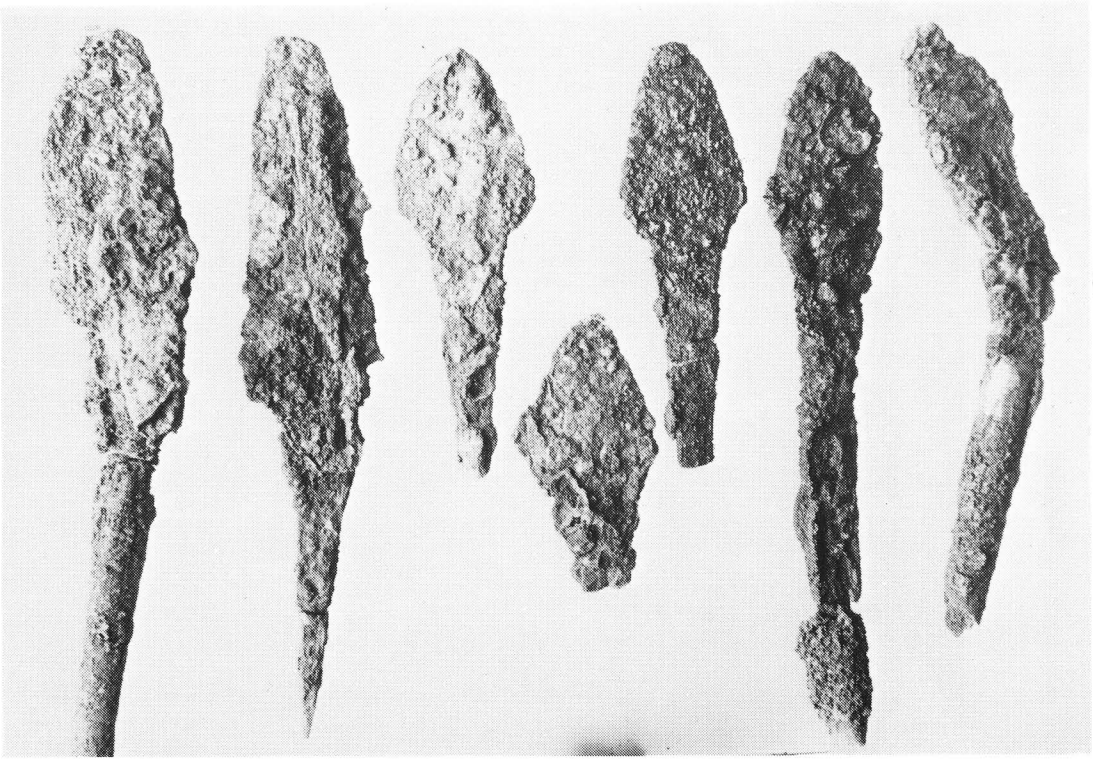


図 版 5

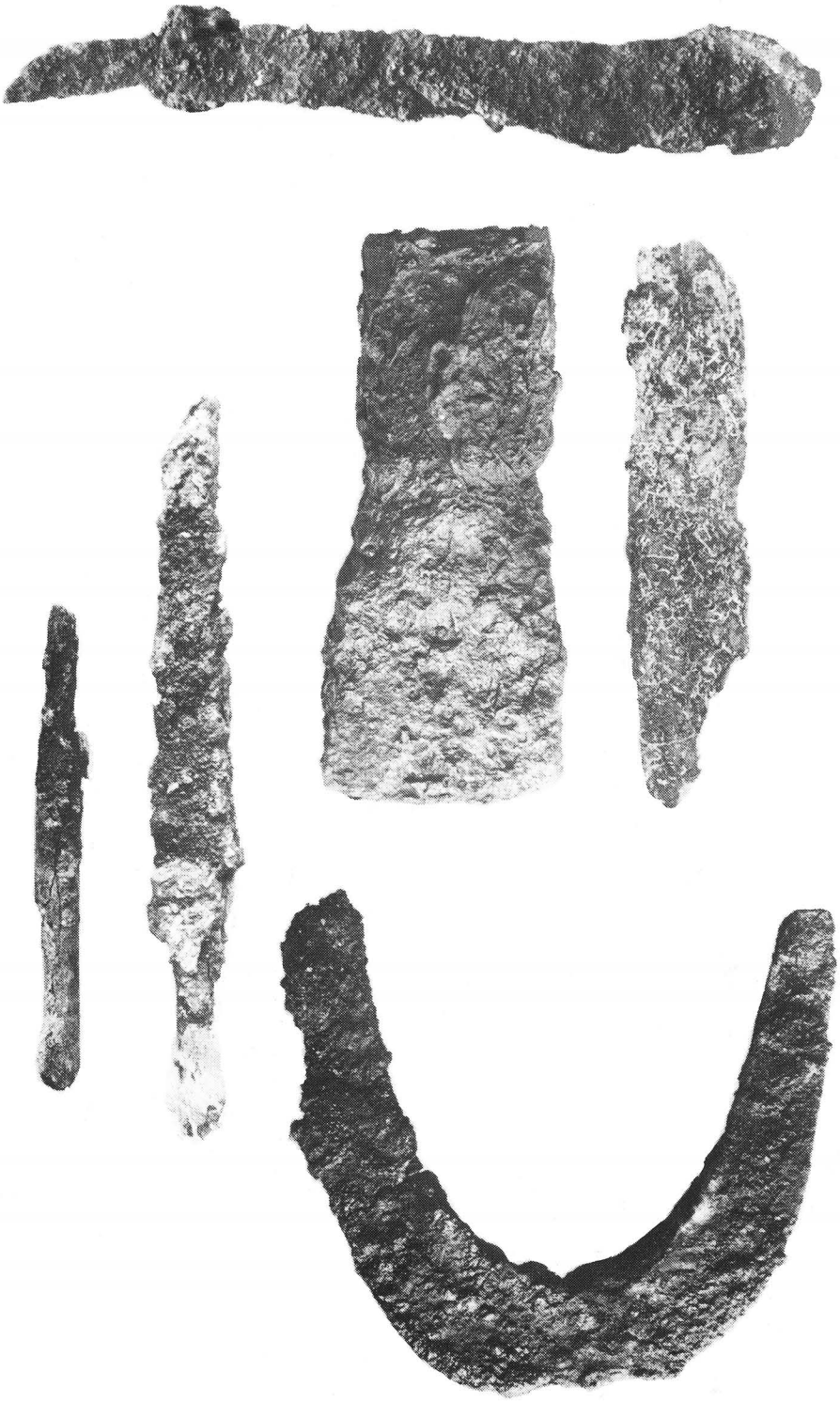
鉄鏃





図版 6

鎌・斧・刀子・鍬先・棒状鉄器



Ⅳ　日守地下式横穴５４－１～４号発掘調査

西諸県郡高原町大字後川内１の１１９

県埋蔵文化財調査員　茂山　護

〃　面高哲郎

県文化課主任主事　岩永哲夫

本　文　目　次

はじめに …… 64
Ⅰ　調査の経緯 …… 65
Ⅱ　遺跡の状況 …… 66
Ⅲ　遺構と出土遺物 …… 67
1　54－1号墳 …… 67
2　54－2号墳 …… 67
3　54－3号墳 …… 70
4　54－4号墳 …… 74
Ⅳ　結　語 …… 78

挿　図　目　次

第1図　遺跡周辺地形図 …… 64
第2図　遺跡地平面図 …… 65
第3図　土　層　図 …… 66
第4図　54－1号地下式古墳実測図 …… 68
第5図　54－2号地下式古墳実測図 …… 69
第6図　54－2号副葬品実測図 …… 71
第7図　54－3号地下式横穴実測図 …… 72
第8図　54－3号墳出土鉄剣実測図 …… 73
第9図　54－4号地下式横穴実測図 …… 74
第10図　4号墳出土遺物実測図 …… 75
第11図　高崎町大字前田仮屋尾地下式3号墳実測図 …… 76
第12図　高崎町前田仮屋尾地下式3号墳出土遺物実測図 …… 77

図　版　目　次

図版 1　(1)　遺跡全景 …… 81

　　(2)　遺跡発見状況 …… 81

図版 2　(1)　54－1号玄室状況 …… 82

　　(2)　54－1号束柱状況 …… 82

図版 3　(1)　54－1号副葬品 …… 83

　　(2)　54－2号閉塞石 …… 83

図版 4　遺跡の現状 …… 84

図版 5　遺　　構 …… 85

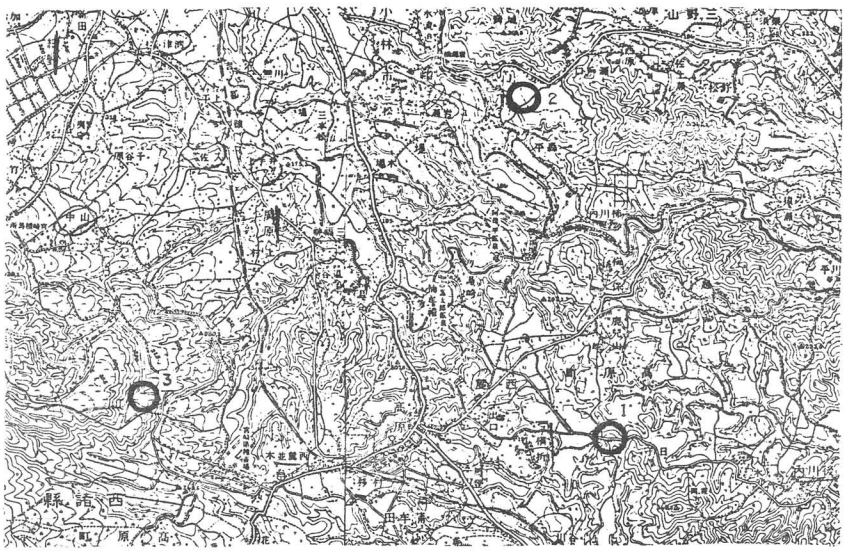
図版 6　4号墳の閉塞 …… 86

図版 7　鉄鏃・刀子・剣 …… 87

はじめに

５４年５月と６月の２度にわたり，西諸県郡高原町の土取場で，地下式横穴が発見され緊急調査したので結果を報告する。高原町は，これまで西諸県郡内では地下式横穴の調査例の少ない地域に数えられていた。今回の発見は，５０年末の大字広原，旭台の高地で，装飾地下式横穴３基を含む１３基の群集墳発見につぐものであった。しかも，その中には，家屋構造の墓室に束柱の浮彫を有するものがあり，装飾地下式横穴に新たな資料を加えることになった。

この日守地区に，地下式横穴の存在が確認されたのは，昭和４４年の埋蔵文化財分布調査である。当時すでに後川内と出口を結ぶ県道の開削工事で６基の地下式横穴が開口しており，地下式横穴群集の可能性のある重要地点として指摘されたのであった。（「九州縦貫自動車道遺跡分布調査報告書」宮崎県教育委員会　昭４４）今回発見されたのは４基であり都合１０基存在したことになりいよいよ群集地としての確証が得られたわけである。ところで，日守とは道路を隔て南方に広がる丘陵地（行政上は，高崎町大字前田字仮屋尾に属する）　にも，畑地造成の為の地盤切下げ削平工事で３基の地下式横穴が発見されている。（石川恒太郎「高崎町仮屋尾地下式古墳調査報告」県文化財調査報告１５集・４５年）このうち１基には，旭台と同じ彩色線文の装飾のあったことが確認されており（黒木昭三「諸県地方の地下式古墳」ひなもり誌抜刷),今回の日守１号の浮彫装飾との関連など注目されるところである。日守地区は，隣接する仮屋尾を含め，西諸県郡の中でも特異な地下式横穴の群集地として一層重要性が強調されてきたわけで，今後，この地域の開発行為には厳しい監視と規制が要請されることになった。



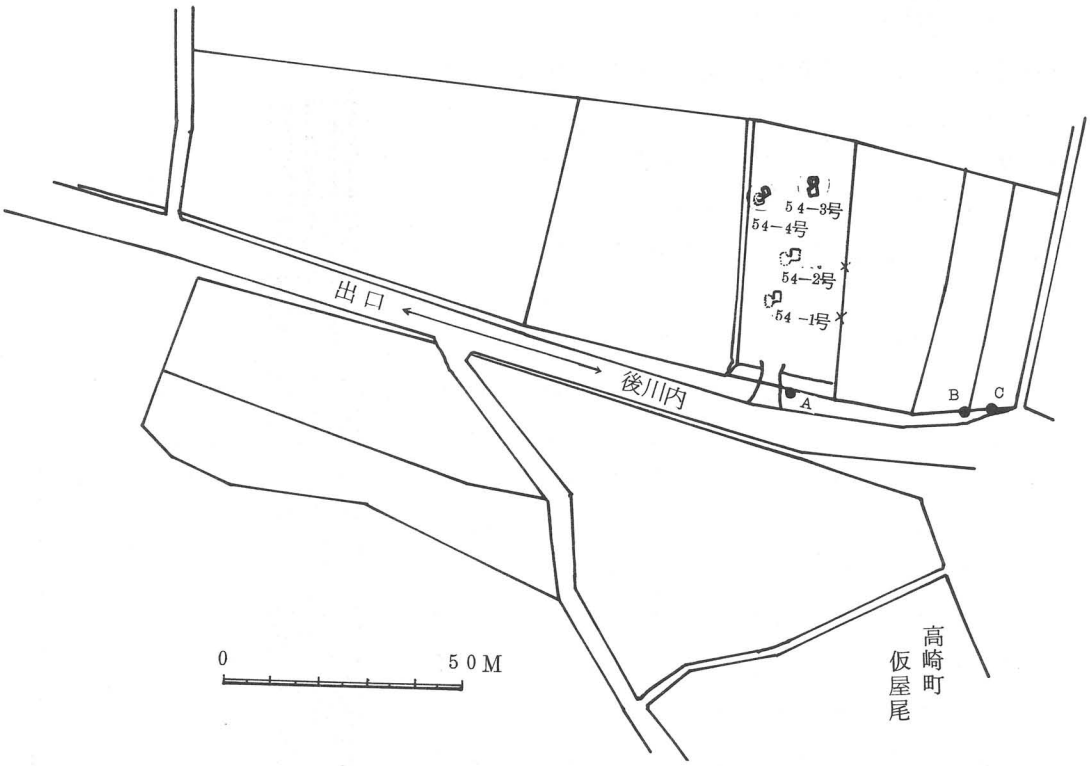
第１図　遺跡周辺地形図

1. 日守・仮屋尾地下式横穴群　　2. 大萩地下式横穴群
3. 旭台地下式横穴群

Ⅰ　調査の経緯

遺構発見の直接の動機は，高原農協が，日守１－１１９番地（地主大鼓稔氏）の畑地の土を，水稲苗床用として採土したことにはじまる。なだらかな丘地をおよそ５ｍも切り下げる採土作業中，掘削機の爪先に突然空洞が現われ遺構の発見となったものである。現場からの急報を受けた高原町教委は直ちに県文化課と連絡をとり緊急調査の運びとなった。

遺構は，５４年の５月に２基，６月に２基と都合４基が発見された。各遺構は，１５.６ｍの間隔で所在発見されている。調査に先だちこれらの遺構は，発見年を頭につけて５月発見のものから５４－１号，２号，６月発見の遺構を東側から５４－３号，西側土堤下にかかるものを５４－４号と呼称することにした。発見当時の各遺構の現状は次の通りである。



第２図　遺跡地平面図

● ４４年分布調査時に確認された地下式横穴

⊂⊃ ５４年度発見

× 断層に竪坑らしき掘り込み

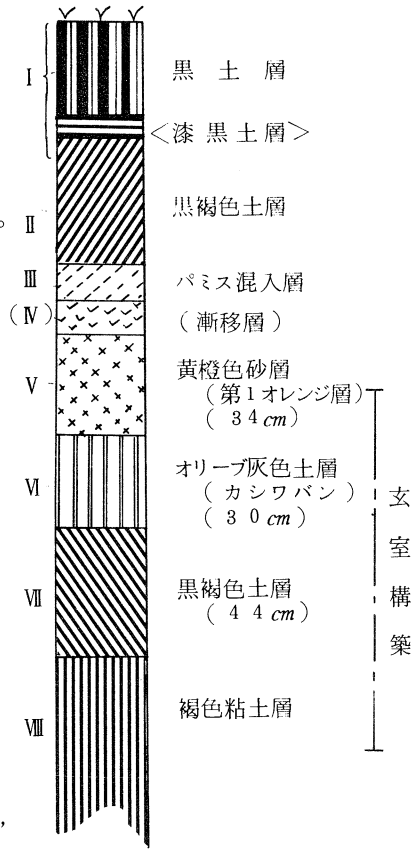
５４－１号は，玄室の東南側半分を対角線状に斜断削除され，北壁の一部を残すだけの状態で発見され，残された北壁切妻部分に束柱表示の浮彫がみられた。５４－２号は，玄室の南側と東壁の一部を削除された状態にあった。次に，１号と２号の北側に位置した５４－３号は，玄室の南西隅をわずかに掘削しただけの損傷の少ない状態で開口，４基の中では最も遺構の原形を保っていた。５４－４号の方は，遺構の上層部が削平採土されていたため，玄室と羨道境目の天井部分が陥没開口したものであった。このため羨道の閉塞石積の一部が破損してはいたが，遺構の原形はほぼ確認することができる状況におかれていた。

調査は，１号と２号を５４年５月８・９の両日，岩永哲夫が実施し，３号と４号は，５４年６月７～９日の３日間，面高哲郎・茂山護の担当で行なった。調査期間中，高原町教委社会教育課をはじめ，町文化財委員山下氏の協力を得た。

Ⅱ　遺跡の状況

遺構の発見された西諸県郡高原町大字後川内字日守は，高原・野尻を結ぶ県道から，出口で分岐して後川内へ通じる県道を東へおよそ３Kmほど進んだ地点，道路堀割の北側丘陵地にあたる。付近は標高２１０*m*，なだらかな丘陵地になっている。その丘地の頂部にも相当する円丘状部分が遺跡地になっていた。遺跡に立つと，丘地は西方へ裾を引き，開削地の水田が広がる。その前面には霧島山の霊峰を仰ぎ，山麓の一角に装飾地下式横穴の所在地旭台を眺望する。また，北方には野尻町三ヶ野山大萩遺跡が遠望される。遺跡背後には，民間信仰の霊山霞権現の鎮座する標高３４８*m*の霞ケ岡も控えるなど，周囲の集落からもやや隔絶したこの地は，千古の眠りを続ける古代人の奥津城に相応しい環境ではある。

掘削された丘地断層の観察から，遺構は地表下2*m*20*cm*の粘土層内に床面をおいて構築され，次の層序が確認された。地表下３０～４０*cm*の黒土層を第Ⅰ層として，Ⅱ層黒褐色土層（４０～４５*cm*），この間部分的に漆黒土の薄層が介在する。Ⅲ層橙色パミス混入褐色土層（１２*cm*），Ⅳ層灰黄褐色土層（漸移層１２*cm*）となり，Ⅴ層が俗に赤ボクと呼ばれる黄褐色大山砂層いわゆる第一オレンジ層（３４*cm*）がくる。このあと，Ⅵ層に，この地方でカシワバンと呼んでいるオリーブ灰色の固い土層があり，Ⅶ層黒褐色粘質土層，そして褐色粘土層と続く。遺構は，



第３図　　土　層　図

Ⅲ層黒褐色土層面を竪坑の掘り方として，墓室は，Ⅴ層を天井にⅥ層・Ⅶ層を穿ち，粘土層を床面として構築されていた。従って，もっとも堅牢な土層内に墓室を構えていただけによく保全されていたわけである。竪坑掘り方の検出されたⅢ層面に遺構構築時の地表面があったものとおもえる。断層面でもこの付近に土器砕片の包含されるのが観察されている。竪坑から玄室部にかけての地表面での盛土等外部施設については，遺構上層部の削平等もあり検証することはできなかった。遺構床面に高低差のあった事や，円丘状の地形からみて，自然地形を生かしこれを墳丘として遺構が構築されていたとも憶測されるところである。（茂山　護）

Ⅲ　遺構と出土遺物

1.　５４－１号墳（第４図）

この地下式古墳は，町教委に届出の時点で既に半壊の状態であったが，幸いだったのは日守地下式古墳の築造年代に大きな示唆を与える遺構の一部即ち玄室左側壁に刻み込まれたいわゆる束柱が残っていたことである。右側壁はほとんど破壊されていたが，付近で左側壁と同様（造りは若干劣るが）の束柱造り出しとみられる土塊を見つけ，両側壁に加工していたことが考えられた。

以下遺構の概要について述べる。

遺構の全体形はおそらく左片袖型平入り寄棟造りであろう。竪坑と玄室を結ぶ主軸の方位はＥ１０°Ｎでほぼ東西である。

残念乍ら，竪坑は発掘できなかったが，町教委の話では閉塞方法は軽石による羨門部閉塞であったようである。羨道は短かく，左側で２５*cm*，右側で５０*cm*をはかる。高さは中央で５５*cm*である。

玄室は，南北に長方形が考えられる。原状の残っていた玄門付近での長径は約１５０*cm*であり，短径は約１００*cm*程度を推定できる。玄室入口部分及び左側壁にはそれぞれ最大８*cm*，４*cm*の幅を持つ棚状施設が床から４０*cm*の高さにおいて掘り込まれていたが，右側壁及び奥壁は不明である。天井までの高さは９５*cm*である。

また，前述したように左側壁には地下式古墳においては初めて見る家屋構造で束柱にあたると思われる柱状浮き彫りを造り出していた。長さは５４*cm*，幅１７～２０*cm*のもので，下部３７*cm*は長方形状であるが上部は丁寧な彫刻である。

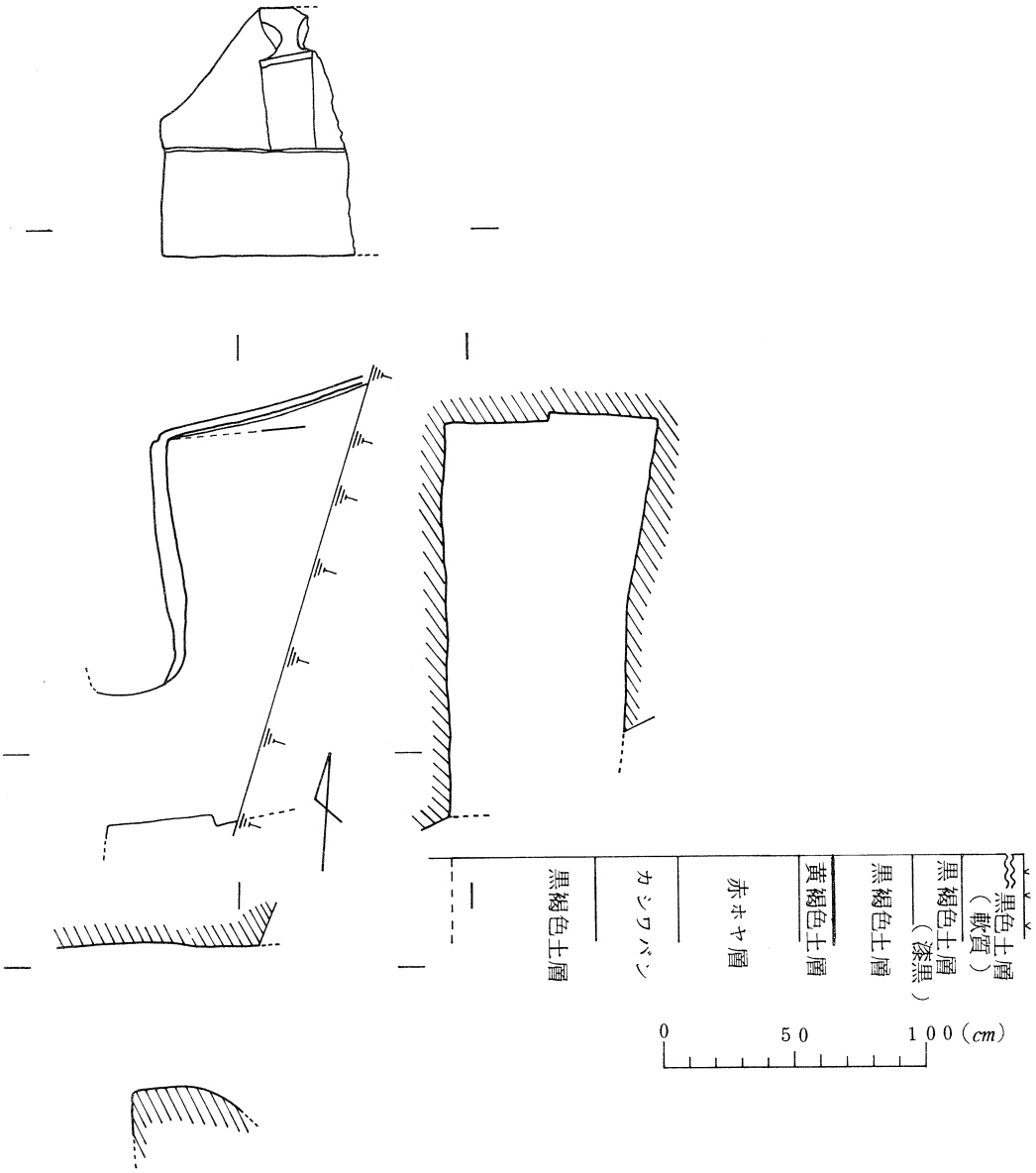
人骨及び副葬品は，床面がすでに荒されていたため発見することができなかったが，床面清掃の段階で中央付近に鉄さびが残存していたのでおそらく何かの鉄器が副葬されていたのであろう。

2.　５４－２号墳（第５図）

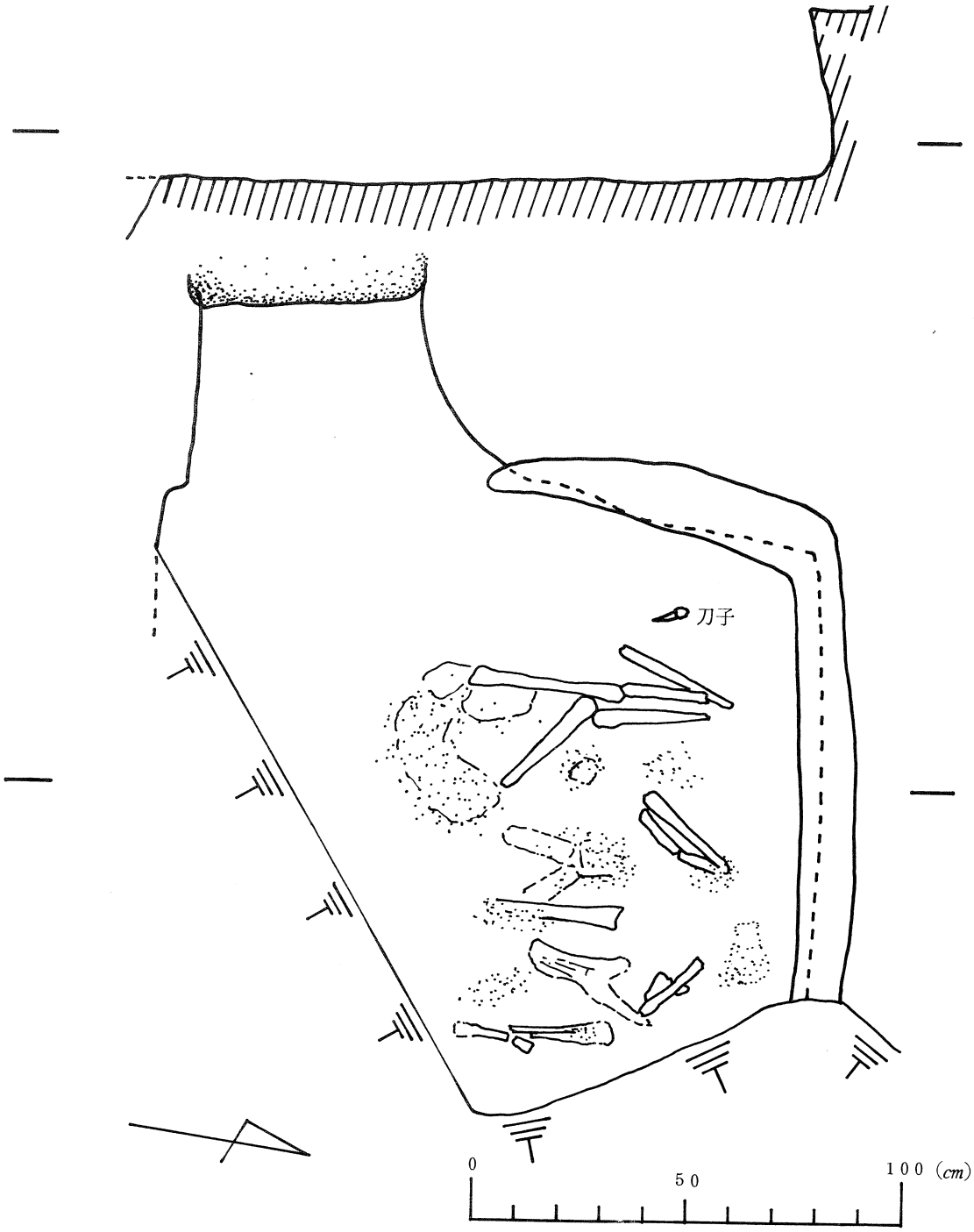
前記１号と同様半壊の状態で，３体分とみられる人骨及び副葬品はすでに取り上げられていた。

調査の結果は次の通りである。

残存している部分からの判断では，左片袖型平入り寄棟造りと思われる。竪坑と玄室を結ぶ主軸の方位はＥ１０°Ｎで，１号とほとんど同じである。



第４図　５４－１号地下式古墳実測図



第５図　５４－２号地下式古墳実測図

竪坑部は破壊されており，閉塞石を残すのみであったが自然石5個で羨門を塞いでいた。

羨道は，右側はほぼ直線的に伸び45cm，左側は弧状に外反しており，長さは同じく45cmである。幅は羨門で50cm，玄門になると約70cmに広がっている。高さは不明である。

玄室は方形状をなし，左壁には幅13～15cm程度の棚状施設を有している。玄室内には3体分とみられる人骨があったが，頭部は取り上げられ，実測図の通り下半身のみが残っていた。頭位は3体とも南である。

副葬品

刀子〔第6図(1)〕

総長9.4cm，身長6.4cm，柄長3.0cm。身は細身で関寄りの最広部1.5cm，柄部は桜皮巻き（？）をした後鹿角装にしている。棟幅0.2cm。この刀子のみが調査中発見した遺物である。

貝輪〔第6図(4)〕

オオツタノハ製？で，中央で二つに割れているが，内径をはかると，長径7.4cm，短径4.9cmで幅は最大1cmである。

その他，鞘に入った剣〔第6図(2)〕，鉄鏃〔第6図（3，5）〕がある。町教委の話では2号出土ということであった。（岩永哲夫）

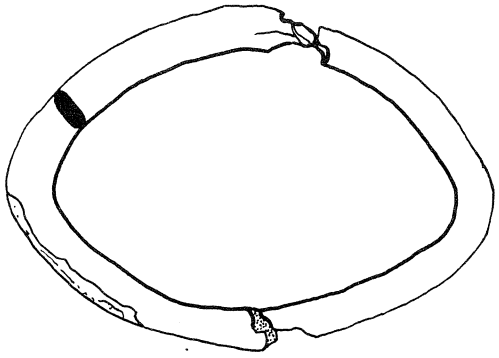
3. 54－3号墳（第7図）

竪坑・羨道・玄室を結ぶ主軸方向をN29°Wにとり，北に竪坑，南を玄室として構築されていた。竪坑と玄室を結ぶ床面の長さは3.7m，中規模の地下式横穴であった。

玄室の奥行1.9m，幅1.6mで，床面から天井棟までの高さ1.15mあり，天井は南北に棟の走る寄棟造になっていた。東南西の三方には，床面から40～42cmの高さの位置に，幅10cm前後の棚状施設があり45°～50°の傾斜の天井と交差し庇をなしている。玄室の左右壁面には，墓室掘削時の掘り跡が明瞭にしるされている。これを見ると右斜上から左下へ向う掘り跡と，左上方より右斜下への掘り跡とがあり，掘削用具の使用状況を推察することができる。これらの掘削跡がすべて方形状を呈することは，掘削用具の刃先が角形のものであった事を示すものである。掘り幅は，右側では狭いもので6.3cm，広いもので8.7cmを計り，左側では4.7cmから7.7cmの間にあり，5cm前後の刃幅のものと，8cm代の刃幅をもつ広狭2種類の用具が使用されたのではないかとおもわれる。大萩36号墳や，都城市下水流の地下式横穴の例から，狭い方は手斧が，広幅の方は角形の鍬先を着装した鍬（鋤）が使用されたのではないかと推測する。しかしながら副葬品の中にはいずれの遺品も見出すことはできなかった。

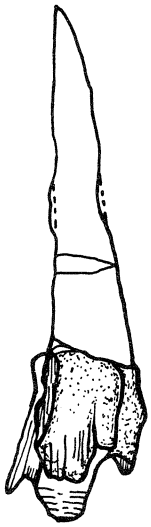
羨道は，玄室の片端に，寄棟造の天井に対しては，平入となる片袖型平入になっていた。羨門は，幅65cm，高65cmの方形を呈し，厚さ10cmほどの板石を立てかけた石蓋式で閉塞されていた。竪坑は，掘り方150×175cmの長方形で，坑底までの深さ160cm，角錐状に掘り狭められた坑底は120×130cmと方形に近く，ほぼ垂直に掘り下げられている。基底面中央に羨門を穿孔していた。

奥壁に沿って1体分の人骨が散乱していた。東北東を頭位として埋葬されたものである。頭部の位置した側面や，床面，体位中央部分，足元と朱痕がみられ，頭蓋骨も朱に染っていた。しかしながら開口後に内部が攪乱された形跡があり，頭蓋骨が踏み砕かれていたのは残念であった。人骨のあった床面，奥壁から60cmの間は床土が柔かく，精査の結果，約10cmほど床面が凹められ，この凹みにシラスを盛土し，屍床を設けていたことが確認された。

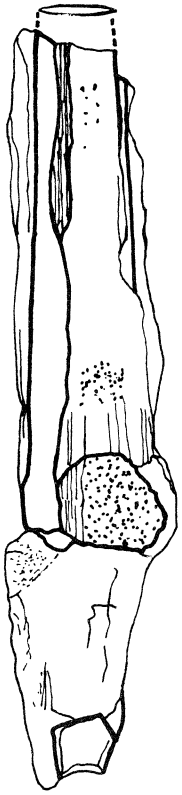


(4)

(5)



(1)

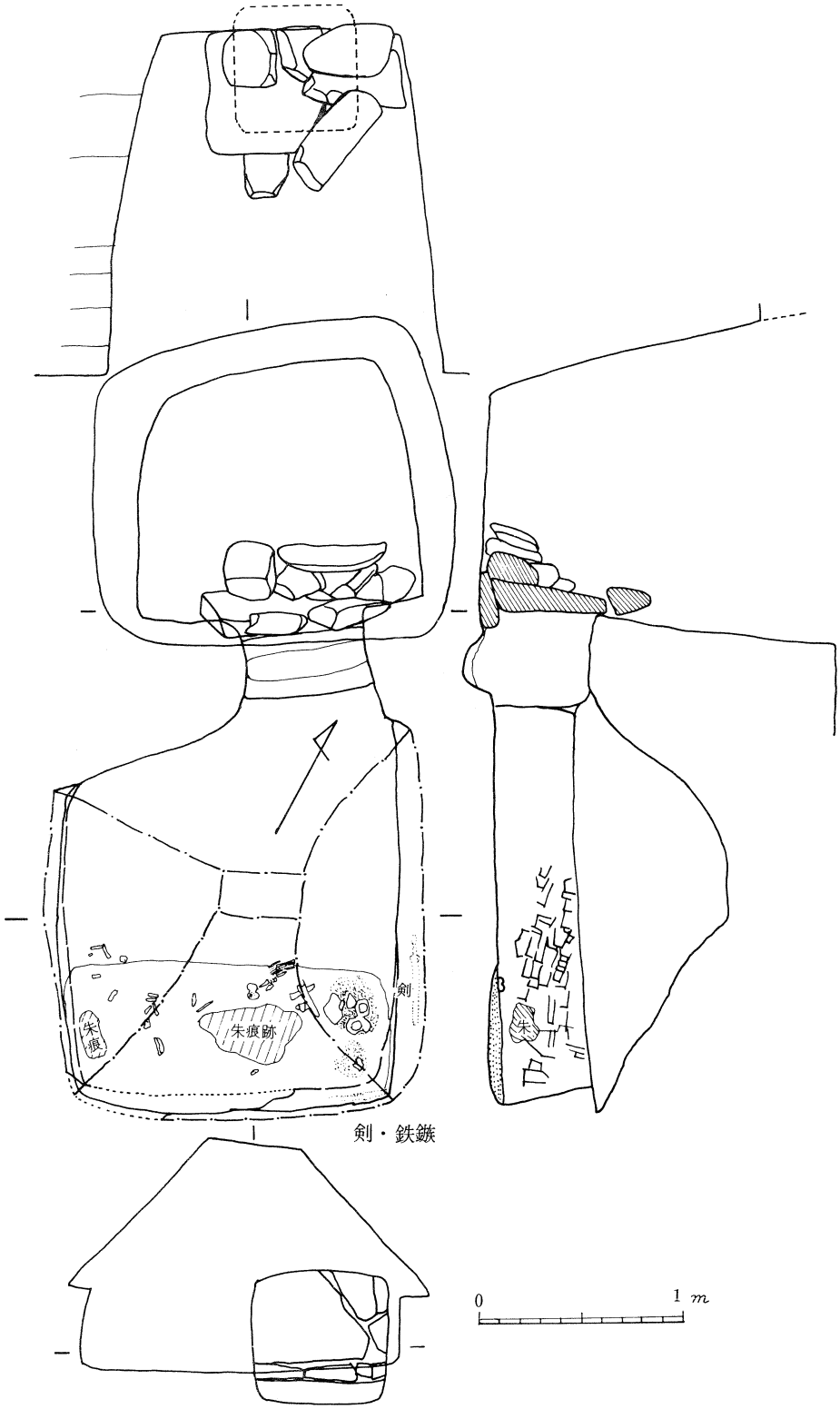


(2)

(3)

0　　5 (*cm*)

第６図　５４－２号副葬品実測図



第７図　５４－３号地下式横穴実側図

出土遺物　　3号墳からは剣2振（うち1振は柄部のみ）と，鉄鏃2本が出土している。調査前にとりあげられ詳細は不明であるが，棚状部分に残る銹の痕跡から，すべて棚状施設に副葬されていたものと考えられる。

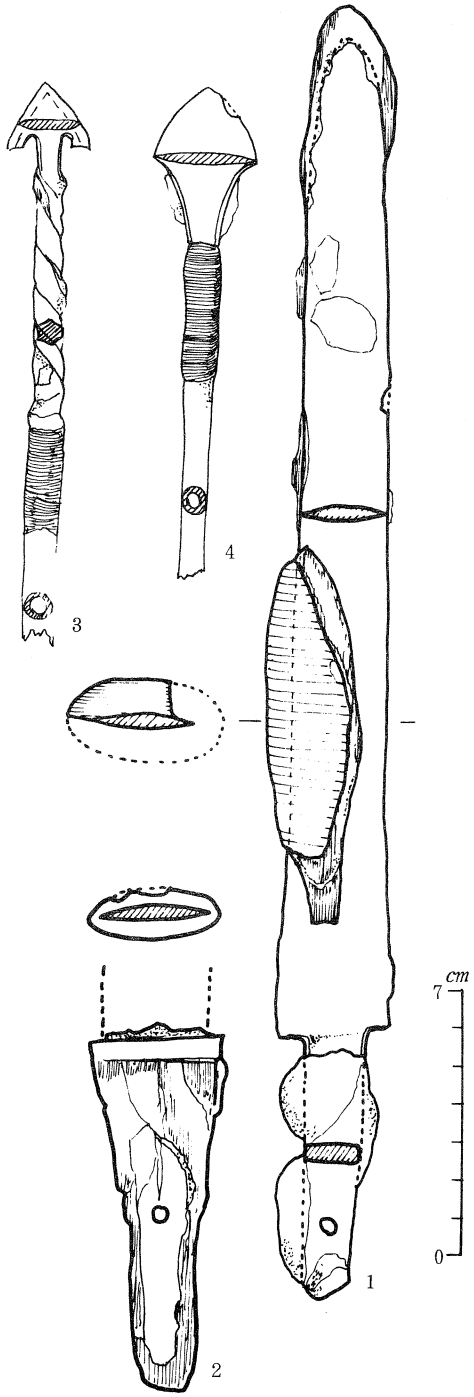
剣①（第8図1）は，全長34.5 cm，剣身の長さ26.3 cm，身幅2.5～2.9cmと鋒に向って身の狭まる細身短剣である。関は角関，茎の長さ7 cm，茎尻は栗尻をなす。身は茎のほぼ5倍となっている。鋒部分と身の中ほどに鞘木の残片が銹着する。中程の鞘木には幅2 mmほどの紐あとが残り鞘巻の状況が観察できる。

剣②（第8図2）　柄だけで身を欠ぐ。棚上に残された鉄銹の痕跡からは剣身の遺存していたことが容易に推定されるだけに，開口後に紛失したものとおもわれる。残存する柄部の長さ9.5 cm，柄木の中にみえる茎には，茎尻から4.5cmの位置に目釘孔が一孔みえる。柄元の幅3.7 cm，柄元周縁には幅6 mmの口金痕がのこる。柄元断面から身幅3 cmの剣身であったものと推定される。

鉄鏃①（第8図3）　平根三角形腸抉鏃である。身は両刃で，縁に沿ってかすかに鎬がみえる。茎には径8 mmの竹製矢柄が残る。身と茎との間，6.7 cmの棒状部分にはひねりがあり，地下式横穴の鉄鏃としては，これまで類例の少ないものである。

鉄鏃②（第8図4）平根菱形式に属するが，鋒から稜角部にかけてゆるやかな丸味がみえる。稜角部から茎にかけては，両削関となり急に細身になっている。茎にはわりと深く竹製矢柄が装着されている。

菱形式の鉄鏃は，西諸県地方の地下式横穴には最も多く副葬されている型式であり，鋒が鋭利で尖り稜角までの刃部の長い形のもの，身幅が著しく広く，いわゆる広根式と呼ばれる形のものなど，それぞれ墓地集団によって形態差がみられる。



第8図　54－3号墳出土鉄剣実測図

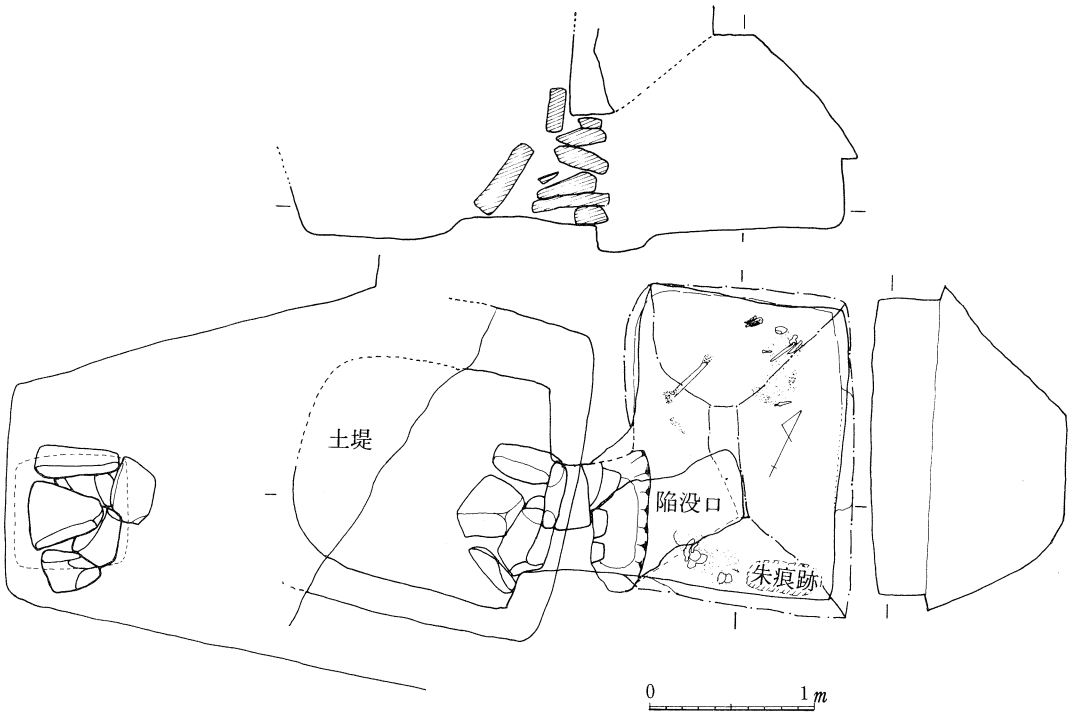
4. 54－4号墳（第9図）

3号墳の西方16mの位置に，竪坑を西に，玄室を東にして構築されていた。

竪坑は，大半が西側畑地との境界土堤下にかかり，完掘することはできなかったが，東を基底とする半円形の掘り方が予想された。基底面は幅1.8mでほぼ垂直に掘り下げられ，側壁は坑底へ向けて大きく傾斜する。坑底の計測値は，幅1.3m，長さ1.5mの半円形となる。土堤断面に残された黒褐色土層面の掘り込みから坑底までの深さは約2mほどであった。

羨門は，竪坑基底面の中央よりやや南寄りに，坑底から若干高い位置を底辺として幅65cm，高さ65cmと方形に近く穿孔されていた。羨道の長さ約50cm，羨門から30cmほど入りこんだところに幅30cm，深さ10cmの掘り込みがあり，玄室との区切になっている。恐らく玄室内部の排水溝の役割を果していたものと推定される。羨門の閉塞は，西諸県地方に多い石積型で，砂岩や安山岩の礫や剝石を平積して閉塞したものであった。石積の前面には，さらに斜に数個の扁平な礫岩を立てかけていた。この閉塞に使用されていた礫石や剝石の総数は，大小16個を数えた。

玄室は，羨道から左側へ掘り広げられた，南北を長軸とする長方形片袖型の平面構成をとっていた。床面は，奥行1.2m，南北の幅1.7mを測る。天井は，南北に棟の走る寄棟造で，天井勾配は45°～50°をなす。床面から30～40cmの高さに四方をめぐる幅10cmの棚状施設が，家屋形の庇を形作っている。床面は中凹みとなり，羨道へ向ってゆるい傾斜がつけられるなど，羨道凹みへの排水が考慮されていた。



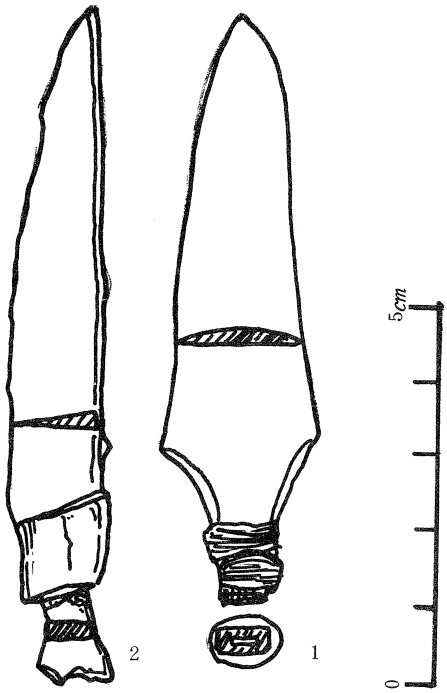
第9図　54－4号地下式横穴実測図

遺骸は，掘削時の天井落盤で原型をとどめないが，床面に遺存した骨片や骨粉の痕跡から，２体が埋葬されていたものと推定される。頭位は南南東におかれ，頭蓋骨のあった付近には朱痕が観察された。四肢骨は，ほとんど消滅しており，大腿骨の断片や蹠骨の一部が遺存しただけであった。

出土遺物　玄室の北東寄りの位置に，鋒を北東にして遺存した鉄鏃１と，落盤で遺存位置の明らかでない刀子１本が出土しているだけである。副葬品としては極めて貧相なものであった。

鉄鏃（図１）　片丸造柳葉形の鉄鏃である。身の長さ5.5*cm*，身幅2.1*cm*，両削関を有する。茎部分を欠ぐが，深い矢柄の装着痕がのこる。

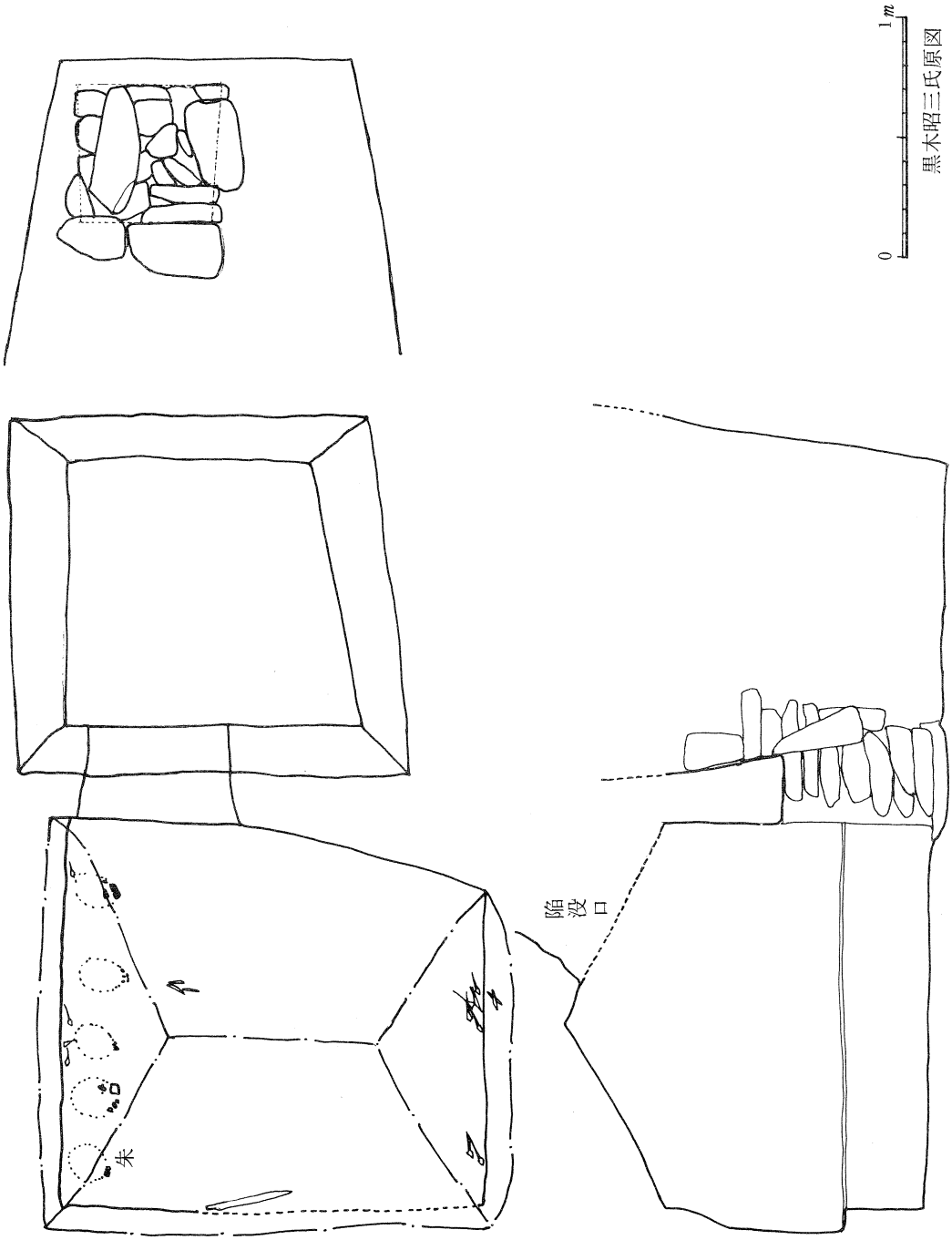
刀子（図２）　現長９*cm*，刃渡り6.8*cm*，身幅1.5*cm*反りの少ない刀子である。背厚２*mm*，茎幅９*mm*，柄元に柄木残欠が銹着する。



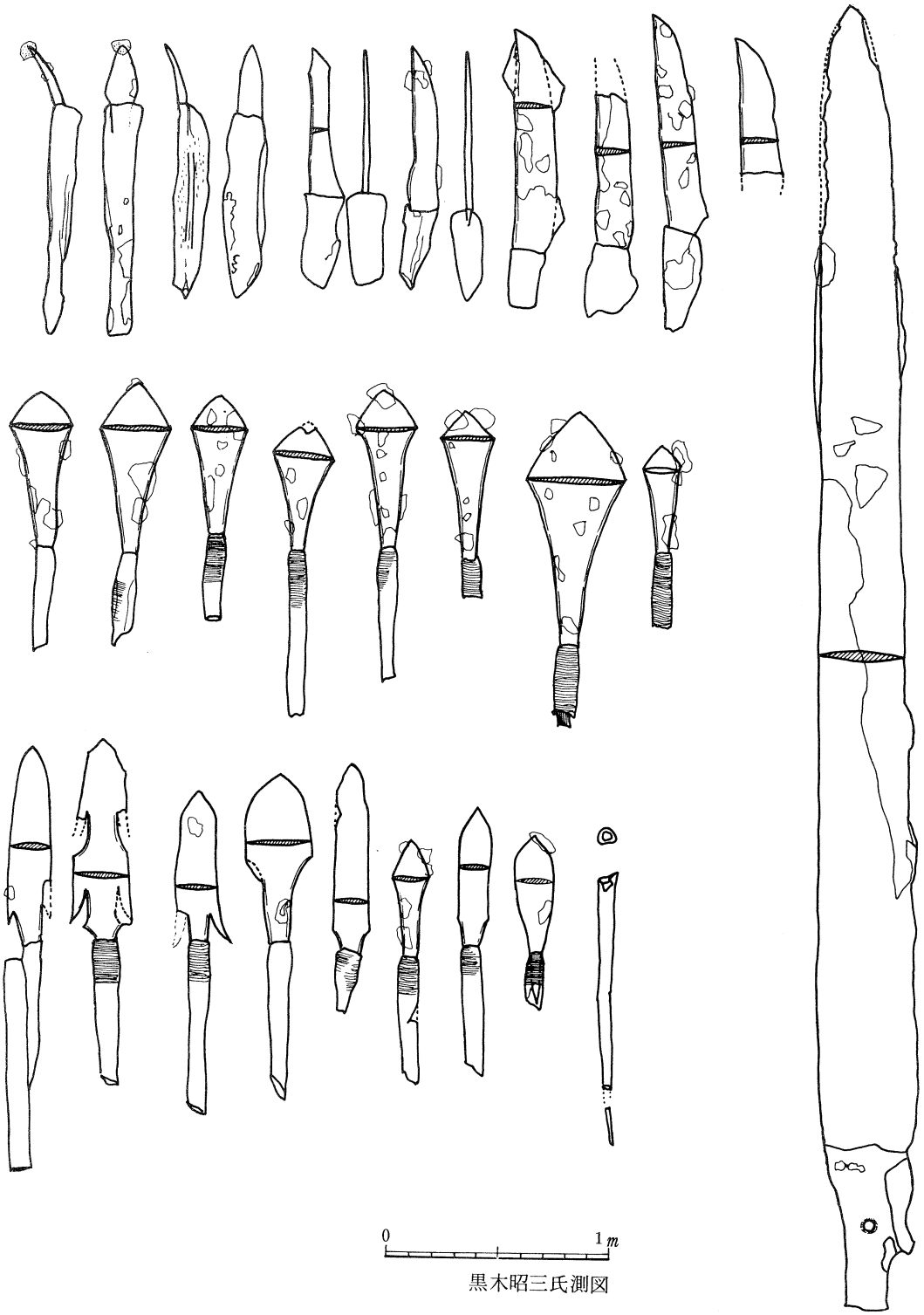
第10図　４号墳出土遺物実測図

日守地下式横穴構造一覧

	54－１号	54－２号	54－３号	54－４号
竪坑の形態	?		隅丸方形 上縁　170×140 坑底　135×125	半円形？ 上縁　190×？ 坑底　140×150
羨道	片袖型平入	片袖型平入？	片袖型平入 64×45×50 溝あり，朱塗付	片袖型平入 62×50×65 溝あり
閉塞方法	軽石	砂岩	板石による蓋式閉塞	剝石の平積閉塞
玄室平面形	長方形状 150×100（推定）	長方形状	長方形状 195×143	長方形状 175×125
天井の形態	寄棟造　高≒95	寄棟造　高？	寄棟造　高 113	寄棟造　高 117
棚状施設 床面からの高さ	四方？　約 40	四方？約 40	三方　幅 20～10 40～42	四方　幅 10～5 35～40
玄室・羨道を結ぶ長軸方向	E 10° N	E 10° N	N 28° W	N 63° E
玄室の長軸方向	N10°W（ほぼ南北）	N10°W（ほぼ南北）	N 28° W	N 26° E
人骨	?	３体か？	１体 朱痕　頭蓋骨著しい	２体　朱痕
頭位	－	南	東北東	南南東
遺物	?	貝輪１，剣１，刀子１，鉄鏃	剣１振，矢，鉄鏃２	鉄鏃１，刀子１
備考	３号壁面の鍬先跡著しい			



第11図　高崎町大字前田　仮屋尾地下式３号墳実測図



黒木昭三氏測図

第12図　高崎町前田　仮屋尾地下式３号墳出土遺物実測図

Ⅳ 結　語

日守地下式横穴の発掘調査は今回が初めてであったが，遺構の存在は，すでに44年の分布調査で確認されており，重要遺跡に指摘されていたところである。それだけに，掘削による遺構発見まで，工事計画が事前に把握されず，全面的な調査体制のとれないまま臨床的な緊急調査に終始する結果になったのは残念であった。しかし，今回の発見で都合10基の遺構の存在が明らかになったことによって，隣接する仮屋尾遺跡を含む日守地下式横穴群集地を再確認できたことは多とすべきかもしれない。従って，今後，遺跡の破壊湮滅を未然に防止するためにも，この地区の開発行為には，一層厳重な監視体制の強化が要請される。

遺構について

今回発見の４基は，いずれも竪坑と墓室を結ぶ羨道を墓室の片側に寄せ，寄棟造の天井に対して平入となる「片袖型」の平面構成をとっていた。このような片袖型平入の遺構は，高原町旭台の６号～11号，隣接の仮屋尾１号・３号，或は高崎町縄瀬塚原などに類例が求められる。いずれも四方に棚状施設をめぐらし天井稜線の明瞭な寄棟造の家屋形という共通性がある。この点，日守の遺構では，３号・４号共に棟幅が狭まり稜線も明確さを欠き寄棟造からの変形とみなされる。閉塞については，旭台が比較的大きな礫石積となっているのに対し，日守や仮屋尾が剝石・板石の平積或は立石蓋式とする若干の違いはあるが，羨門石積閉塞法としては共通した形態として把握される。また，１号墳にみられた家屋内部の束柱表示は，旭台の６号，７号，９号の浮彫とも関連するもので，それをより明確に装飾化している事が注目される。このように，片袖型平入羨門石積閉塞の遺構が，日守周辺に集中することは，竪坑上部の蓋石式閉塞型が灰塚遺跡や平松遺跡などえびの地方に限られるように，高原・高崎地区を中心とする一つの地域型とみてよいであろう。

１号墳の浮彫について

玄室の切妻部分に束柱を表わしたとみられる角柱の浮彫は，旭台や，小林市尾中原などに散見されてきた。しかし，日守54－１号の束柱の浮彫は，従来の浮彫とは，やや類を異にするものであった。棟に接する上部の抉り込みと，これを画する２本の沈線文は，明らかに柱上にのせられた斗の表示として理解されるものである。埴輪にも群馬県茶臼山古墳出土の切妻造倉庫埴輪にみるよう束木表示したものがあるが，「斗」を示したものは皆無といってよく，少なくとも寺院建築以前の日本の家屋にはみられなかった様式といわなければならない。建築史上，斗組様式は，明らかに中国建築の影響をうけたものであり，仏教建築に始まるといわれる。肘木等の表示はなくいまだ組物までにはいたっていないが，本例は，何等かの形で中国建築様式を受容した建造物があり，それを模放することによって生まれたものとおもえるのである。建築史上からも貴重な資料といえよう。更に憶測が許されるならば，旭台の彩色直線文による柱や貫，梼木の表示といい，浮彫による棟，柱，束柱の表現は，死後の生活を意図した葬送観による家屋墓と考えられる。そこには墓室に朱塗の柱や梁・斗供を描き家屋内部を表示する朝鮮の墓

室例に通じるものがあり，九州の装飾古墳の中でも他に例のない地下式横穴の家屋内小屋組表示の装飾は，直接的ではないまでも，意外とここらに源流がたどれるのかもしれない。

築造年代

4基の築造年代については，出土遺物が貝輪・鉄鏃・刀子・剣だけで量的にも少なく，時期比定の決めてとなる遺物に欠けるだけに速断し難い。貝輪には，国富町大坪出土のゴボウラ製をはじめ，イモガイや傘貝類製がみられる。このうちイモガイ製横型貝輪は，えびの市島内（2号），小木原（101号）野尻町大萩（3号，10号），国富町市ノ瀬，高崎町原村等がある。いずれも共伴遺物から6世紀に比定されている。4号の細根片丸造柳葉形の鉄鏃は，地下式横穴からの出土例は少ないが，成川遺跡の五類に類例が求められる。3号の平根菱形鏃は，諸県地方の地下式横穴に最も出土例の多い形態である。隣接の仮屋尾や旭台に類例をみる。なかでも仮屋尾3号では5世紀代に位置づけられる鉄鏃を共伴するなど，遅くとも6世紀前半に比定されるものであろう。また，3号の腸抉三角形鉄鏃は茎のかつぎ部分にひねりが加えられており，地下式横穴では類例の少ないものである。時期的には，喰や引手の棒状部分にひねりを加えている馬具との関連が考慮される。両関細身の短剣は際立った特徴はないが，比較的茎の短かい点が留意される。これまで地下式横穴をはじめ，板石積石室や，成川遺跡の出土品の中に多くの類例をみるものである。

時期比定の決め手となる遺物がないだけに困難であるが，類例遺物の年代観からすれば6世紀前半に位置づけてもよいかもしれないが，遺構形態にみる寄棟造の変形を考慮すれば，旭台や仮屋尾より後出とみなければならない。相対的にみて日守地下式横穴群は6～7世紀の築造とみるのが妥当と考えられる。ただ，1号の束柱にみた斗表示が，仏教建築との関連ありとすれば，年代観はさらに大きく引き下げられるかもしれないが，現段階ではあえて引き下げる根拠はないものとおもう。個々の編年についてはなお今後の課題としたい。

（茂山　護）

参　考　文　献

宮崎県文化財調査報告書　第9集　宮崎県教育委員会　1964年

宮崎県文化財調査報告書　第15集　宮崎県教育委員会　1970年

宮崎県文化財調査報告書　第19集　宮崎県教育委員会　1976年

灰塚遺跡　宮崎県教育委員会　1973年

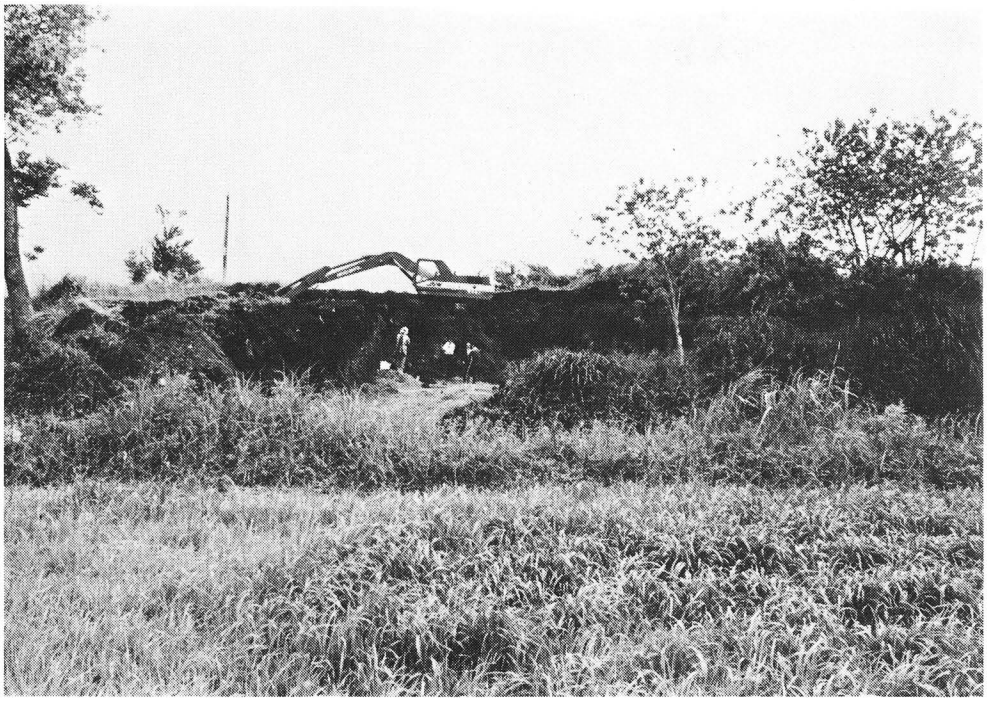
日本原始美術大系6・壁画・石像物　1977年

斉藤忠　日本装飾古墳の研究　1973年

成川遺跡　文化庁　1973年

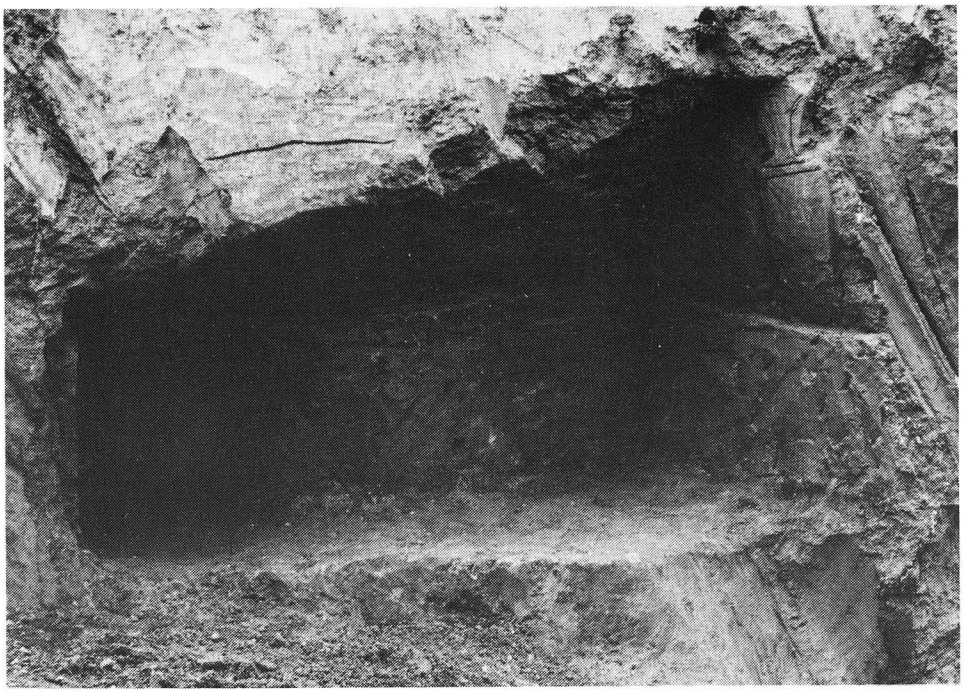
古代史発掘8・装飾古墳と文様　1974年

九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告（1）　宮崎県教育委員会　1972年

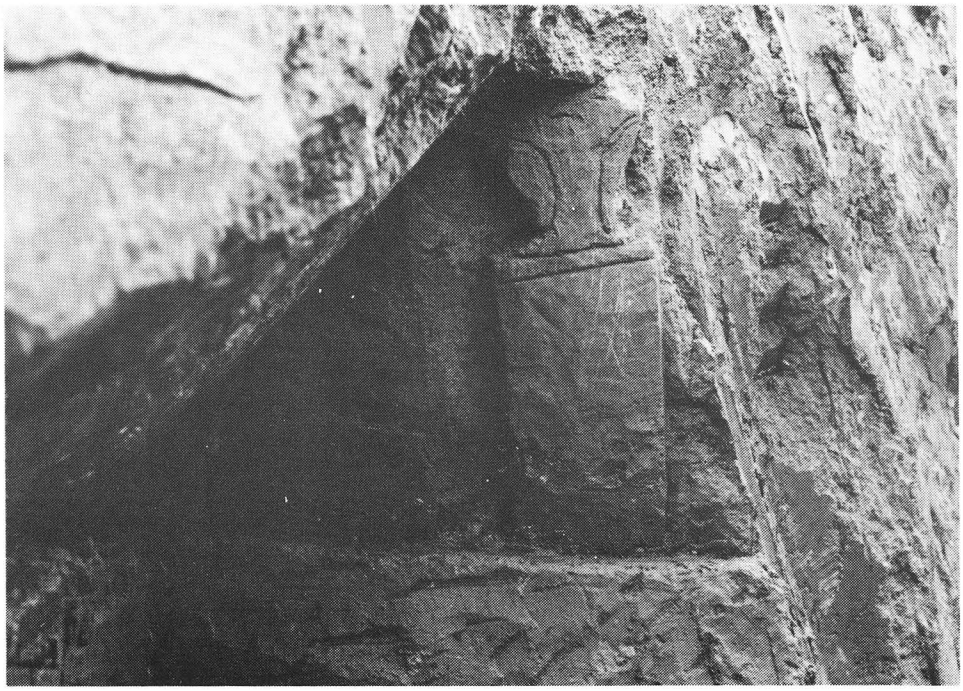


(1)　遺 跡 全 景

(2)　遺跡発見状況

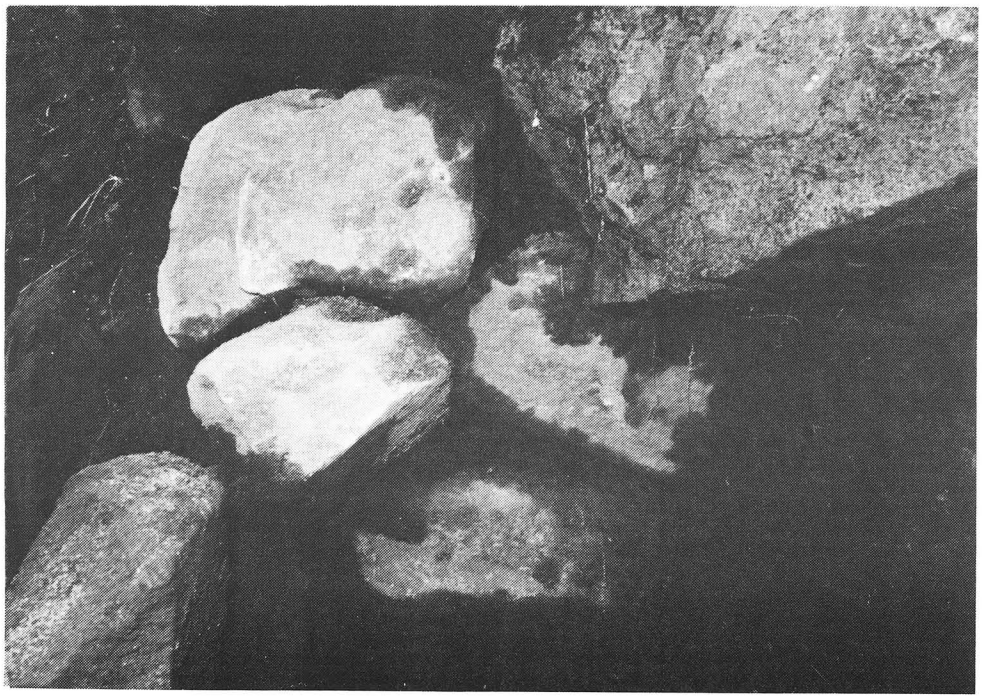


(1)　5 4.－1号玄室状況



(2) 5 4 － 1号束柱状況

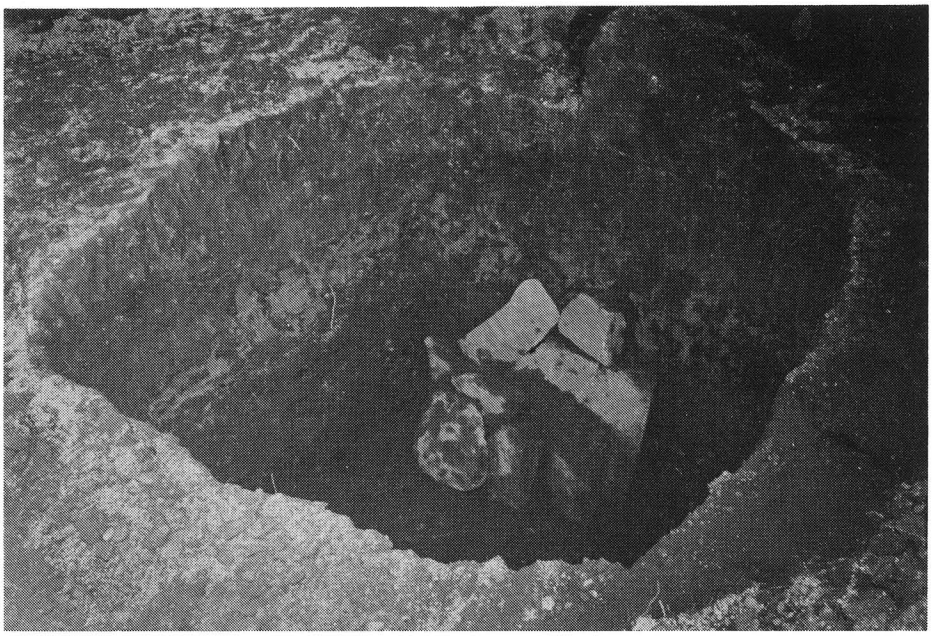
(1)　５４.－１号副葬品



(2)　５４.－２号閉塞石

遺跡の現状

3号地下式横穴の穿穴状況



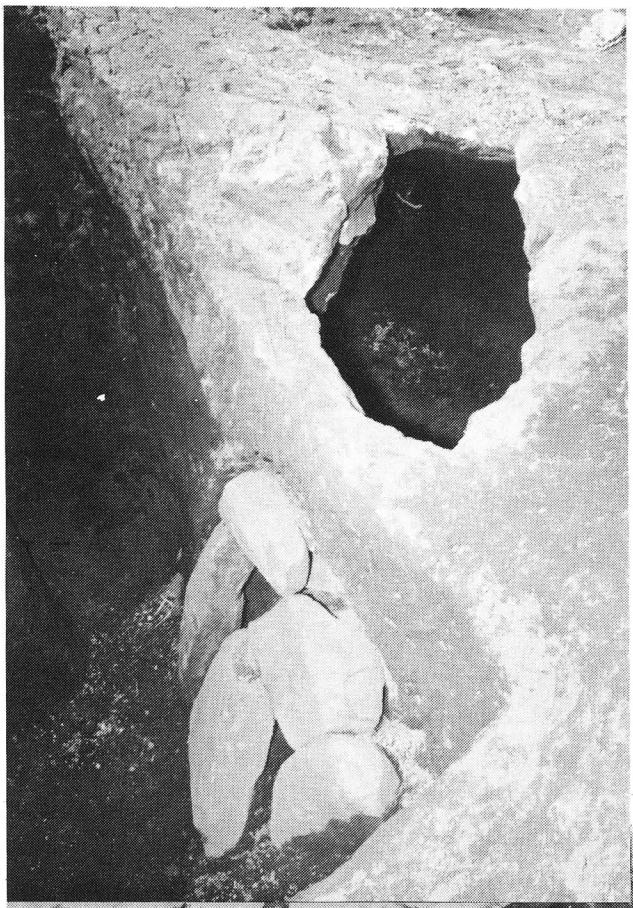
3号墳の竪坑と閉塞状況

3号墳の玄室内部と羨道

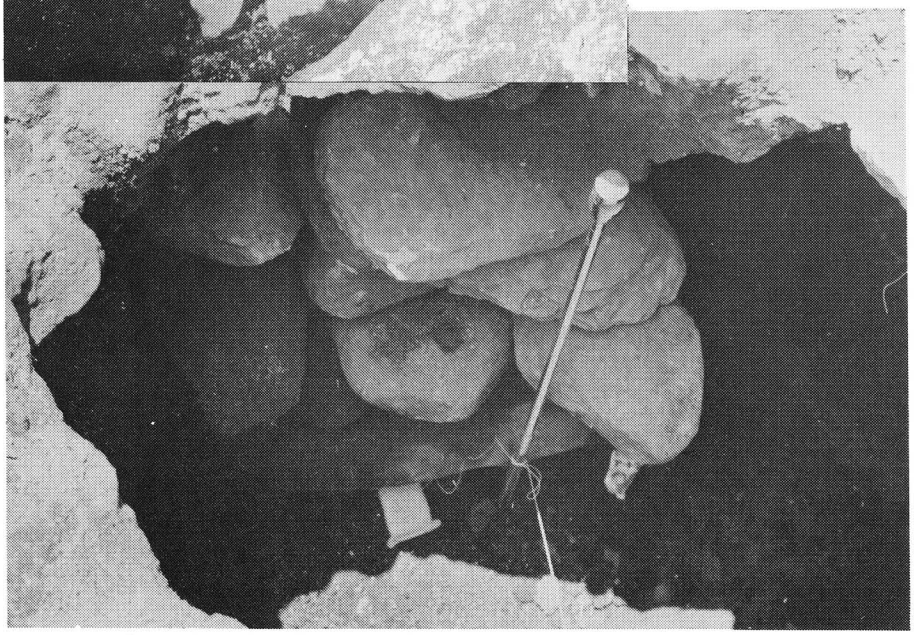
図版6

4号墳の閉塞

◀竪坑羨門部の閉塞状況



玄室側から見た羨道の石積▶

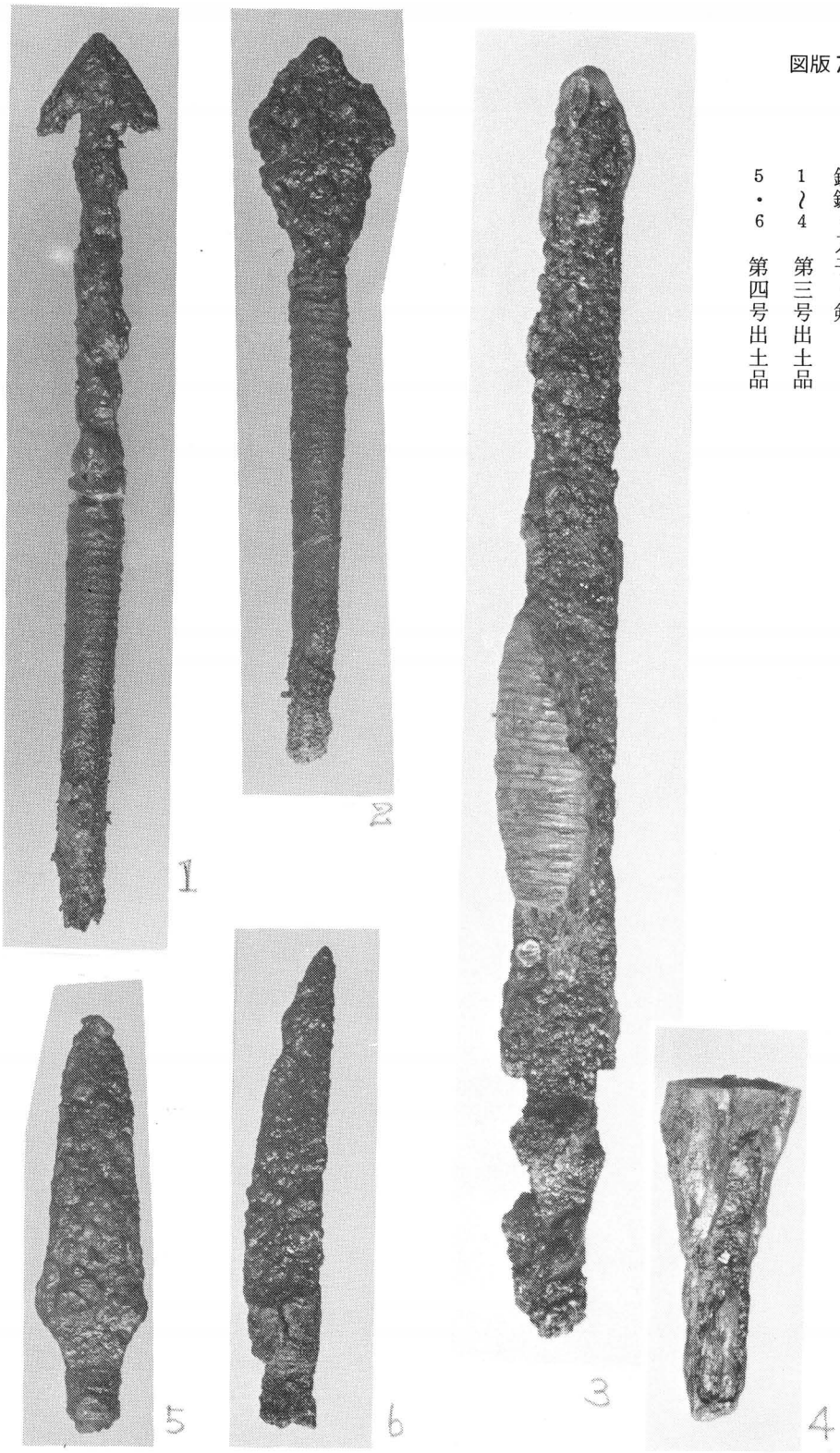


図版7

鉄鏃・刀子・剣

1～4　第三号出土品

5・6　第四号出土品



V 上示野原遺跡発掘調査

かみじのばる

北諸県郡高崎町大字大牟田上示野原

県埋蔵文化財調査員　茂山　護

〃　石川恒太郎

県文化課主任主事　岩永哲夫

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の位置と発見の動機 …… 91
Ⅱ　遺構について …… 93
Ⅲ　出土遺物 …… 97
Ⅳ　むすび …… 101

挿　図　目　次

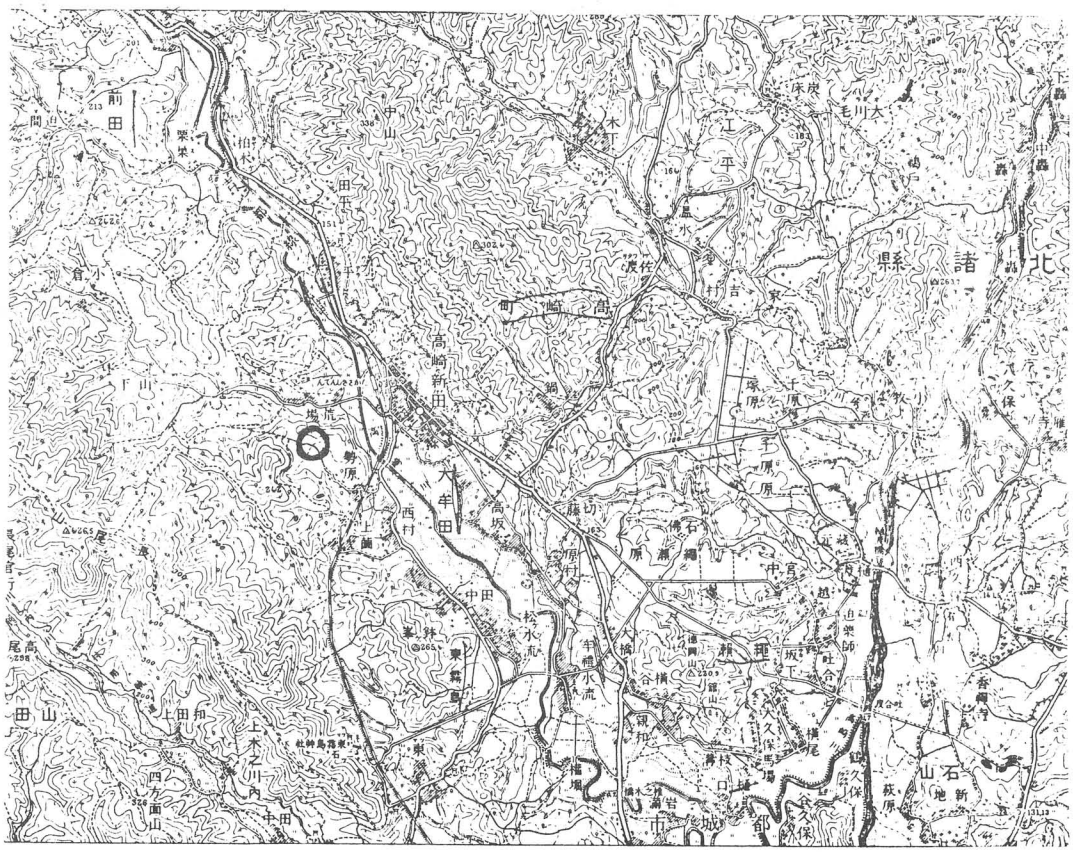
第1図　遺跡付近地形図 …… 91
第2図　上示野原遺跡平面図 …… 92
第3図　2号竪穴実測図 …… 95
第4図　出土土器拓影（1号竪穴） …… 98
第5図　〃　（2号竪穴） …… 99
第6図　石器・鉄鏃・小玉 …… 100
第7図　甕形土器 …… 100
第8図　小形土器 …… 101
第9図　調査前の出土土器 …… 102

図　版　目　次

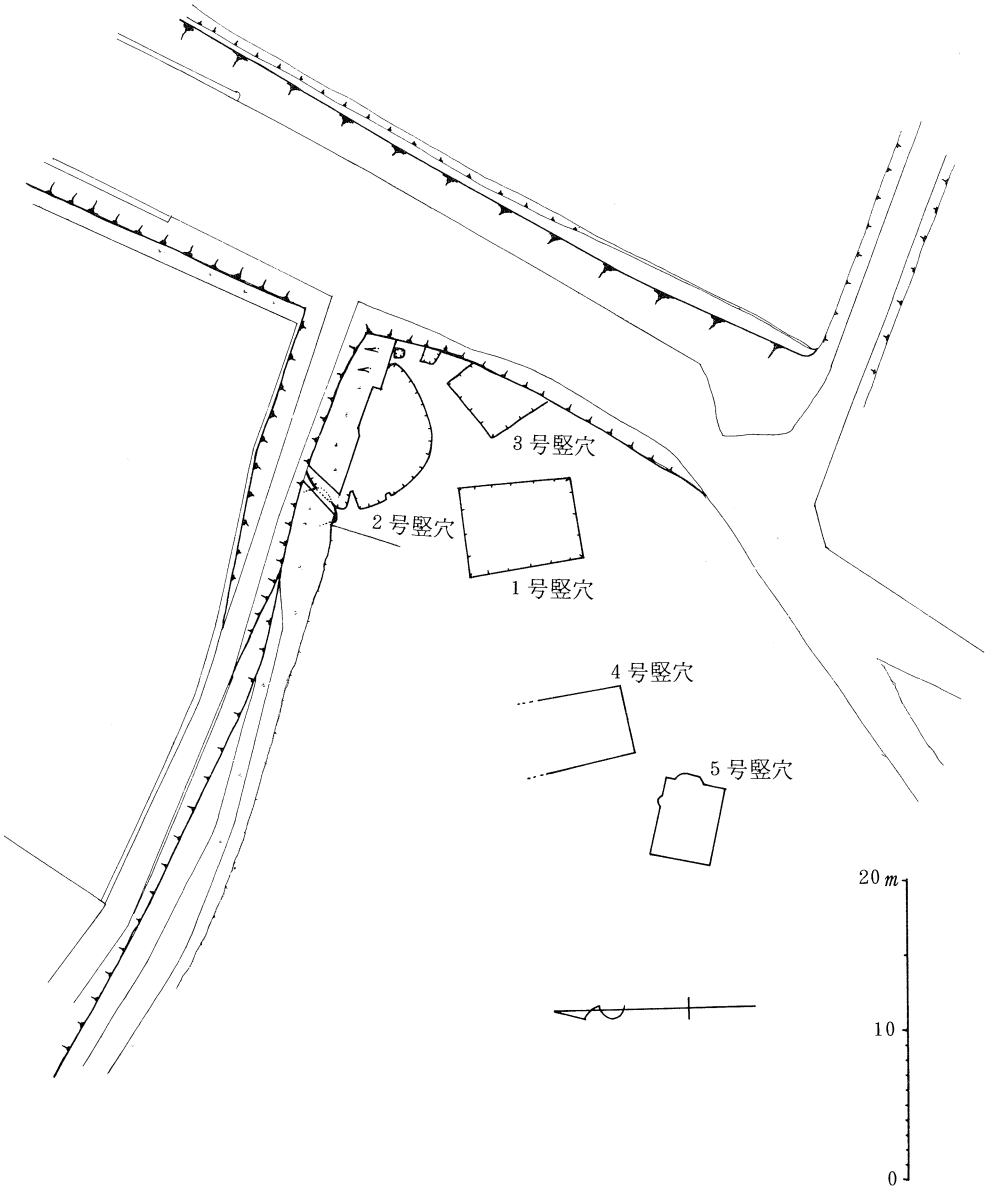
図版1　遺跡遠景 …… 105
図版2　調査状況及び遺物出土状況 …… 106

Ⅰ　遺跡の位置と発見の動機

上示野原遺跡は，高崎町の中心部に近い国鉄吉都線高崎新田駅の西方１㎞の地点にあり，大字大牟田字上示野原４２１３番地に位置する。この地は，高崎町を貫流する高崎川の右岸にあたり，支流の荒場川に開析された標高１５０～１８０ｍのシラス台地が遺跡になっている。荒場川との比高差２０ｍの台地上は，ゆるやかな起伏をもつ畑地が開ける。荒場川を渡り新たに設けられた切通しの農道を登り詰めた左側台地縁の近くが，今回調査した遺構の所在地となっていた。



第１図　遺跡付近地形図



第 2 図　上示野原遺跡平面図

上示野原遺跡発見の直接のきっかけは，高崎町が地域の経済開発を促進させる目的で推し進めた企業誘致の為の敷地造成工事によるものであった。上示野原の畑地およそ3*ha*が工場敷地として削平した結果，多量の土器と，ボラ層内に陥入した長方形状の黒土の存在から遺跡の発見となったものである。結果論ではあるが，造成工事着手前の道路取付工事の際に完形土器が採取されており，かつ，切通しの断面には，ボラ層に陥ちこんだ竪穴遺構も観察できるなど，竪穴住居跡群の存在を予想させる条件がそろっていただけに，遺跡の大半を湮滅したことは残念であった。町教委で遺構の存在を把握されたのはすでに造成工事も完成間近い頃で，遺跡の重要性を察知された町教委文化財係の黒木昭三氏の奔走の結果，辛うじて，敷地東北隅の一角だけ，ボラ層面に露出した竪穴遺構が削平を免れたのであった。

49年の夏に実施された遺跡分布調査の折，黒木昭三氏の案内で現地を訪れ，ボラ層に陥入した黒土部分が竪穴遺構の陥ち込みであることを確認したのであった。その後，町教委から調査の要請を受けた県文化課では直ちに発掘調査し，遺構の確認を行なう予定であったが，諸般の事情で延び延びになり，ようやく50年の7月22日から26日までの5日間発掘調査したのであった。

Ⅱ　遺構について

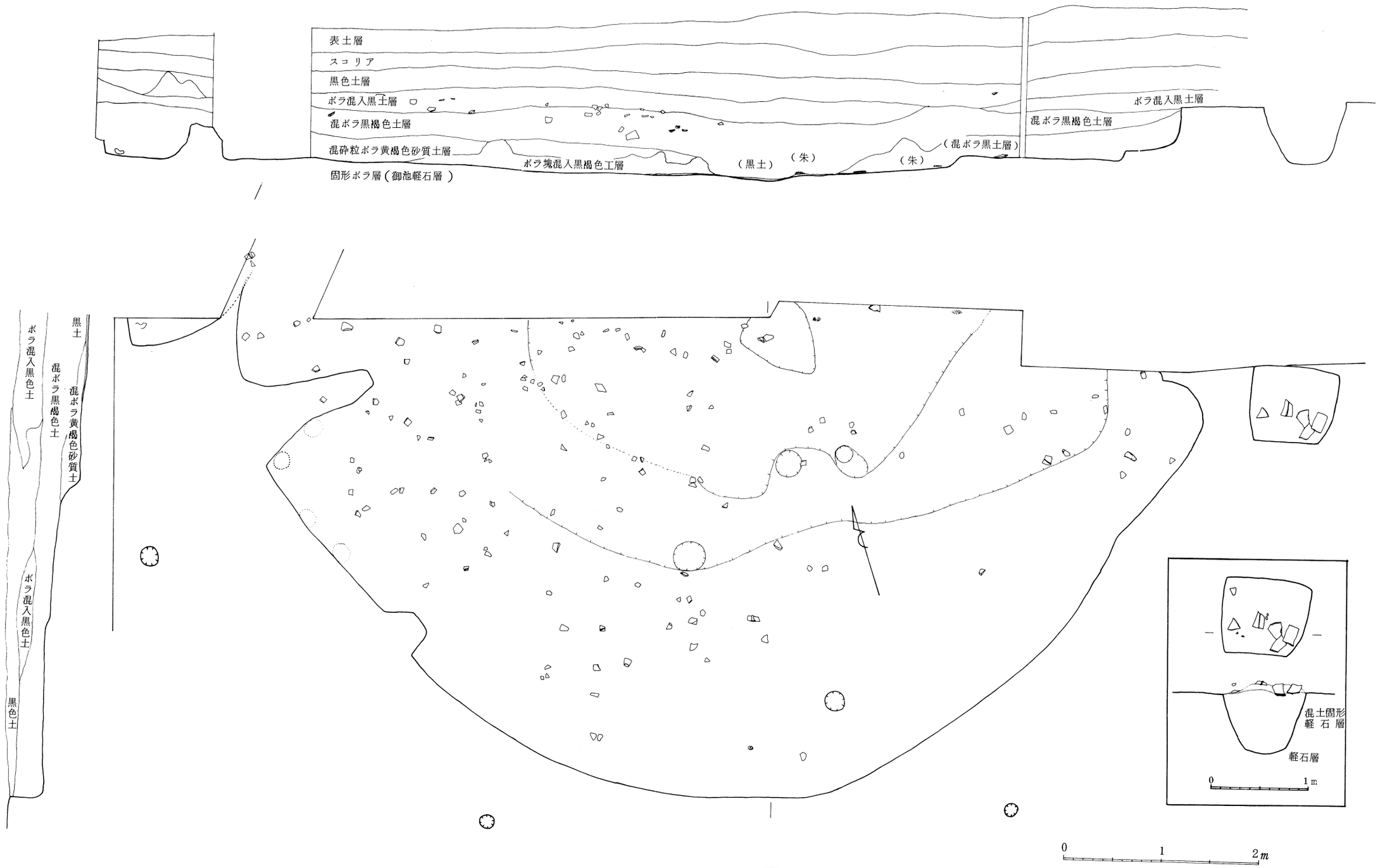
造成地の東北隅に残された竪穴遺構とみられる黒土の陥ち込みは大小5ヶ所を数えた。造成のために遺構の上層部は削平されており，遺構の掘り込みや原状を把握することは困難であった。僅かに残された北側農道との境界土堤の断面から掘削前の層序をある程度観察することができた。それによると，元の地表面下60～100*cm*の深さまで削平されており，残された遺構はいずれも竪穴のなかばを剝ぎ取られている状況にあることが判明した。削平部分の層序は次の通りであった。地表下23～25*cm*の表土層をⅠ層として，Ⅱ層には黒褐色のスコリア層（15～30*cm*），Ⅲ層に黒色土層（20～25*cm*），Ⅳ層　ボラ混入漸移層（20～25*cm*），Ⅴ層が火山性軽石層（50～60*cm*）となる。竪穴は，Ⅴ層のボラ層に掘り込まれていたわけで，上層の削平によって，この軽石層内に陥入した黒褐色土が，明瞭に遺構の存在を示したものである。

5ヶ所の竪穴は，2号が隅丸方形で，他は全て長方形竪穴であった。調査期間の制約もあったことから，比較的上層部の掘削が少ないと見られた1号，2号，3号の3ヶ所を発掘調査しただけであった。

1号竪穴　南北を長軸とした長径7.5*m*，短径5.5*m*の長方形竪穴である。軽石層内に残された壁高は30*cm*であった。竪穴内部の埋土を排除した竪穴床面には柱穴を検出することはできなかった。また竪穴周囲にもそれらしき柱穴は確認できなかった。

3号竪穴　東側が造成地への導入路にかかり一部切断されており竪穴の全形を確認することはできないが，遺存部分から幅5*m*で1号竪穴に類似した長方形竪穴だったとおもわれる。竪穴の長軸方位はN32°W。現存の側壁高は38～40*cm*であった。1号同様，柱穴は検出できなかった。

4号竪穴　未調査であるが，軽石層面に陥ち込み踏から幅4.7*m*，長さ6～7*m*の長方形が計測された。


表土層
スコリア
黒色土層
ボラ混入黒土層
混ボラ黒褐色土層
混砕粒ボラ黄褐色砂質土層
固形ボラ層（御池軽石層）
ボラ塊混入黒褐色工層
（黒土）
（朱）
（朱）
（混ボラ黒土層）
ボラ混入黒土層
混ボラ黒褐色土層
黒土
ボラ混入黒色土
混ボラ黒褐色土
混ボラ黄褐色砂質土
ボラ混入黒色土
黒色土
混土固形軽石層
軽石層
0
1m
0
1
2m

第３図　２号竪穴実測図

5号竪穴　これも発掘することができなかったが，軽石層内への掘り込みは15cmほどを残すだけで上層は大半を削られていた。陥ち込み面の広さは4m×5.3mと，やや小形であるが，東側に張り出し部分らしい形跡のみられる竪穴であった。長軸方位が東西にあり，前者との違いがみられる。

2号竪穴　北側境界の土堤下にかけて遺存した竪穴である。当初円形竪穴とみられたが，北側農道側の断面にみられた掘り込み位置から円形の復元ができず，西側の一角に竪穴内部への入り込みの確認もあって，東側にも同様の入り込みをもった隅丸方形の竪穴になるものと推定された。他の長方形竪穴に比べて規模も大きく，径9～10cmを測るものであった。周壁高40cm，周壁から2m内側に約20cmほどの段があり，内部に1段低い床面が形成されていた。このため，周囲に床の間状の段を構えた竪穴であることが推測されたが，境界土堤下の発掘ができず，全貌を確認するにはいたらなかった。

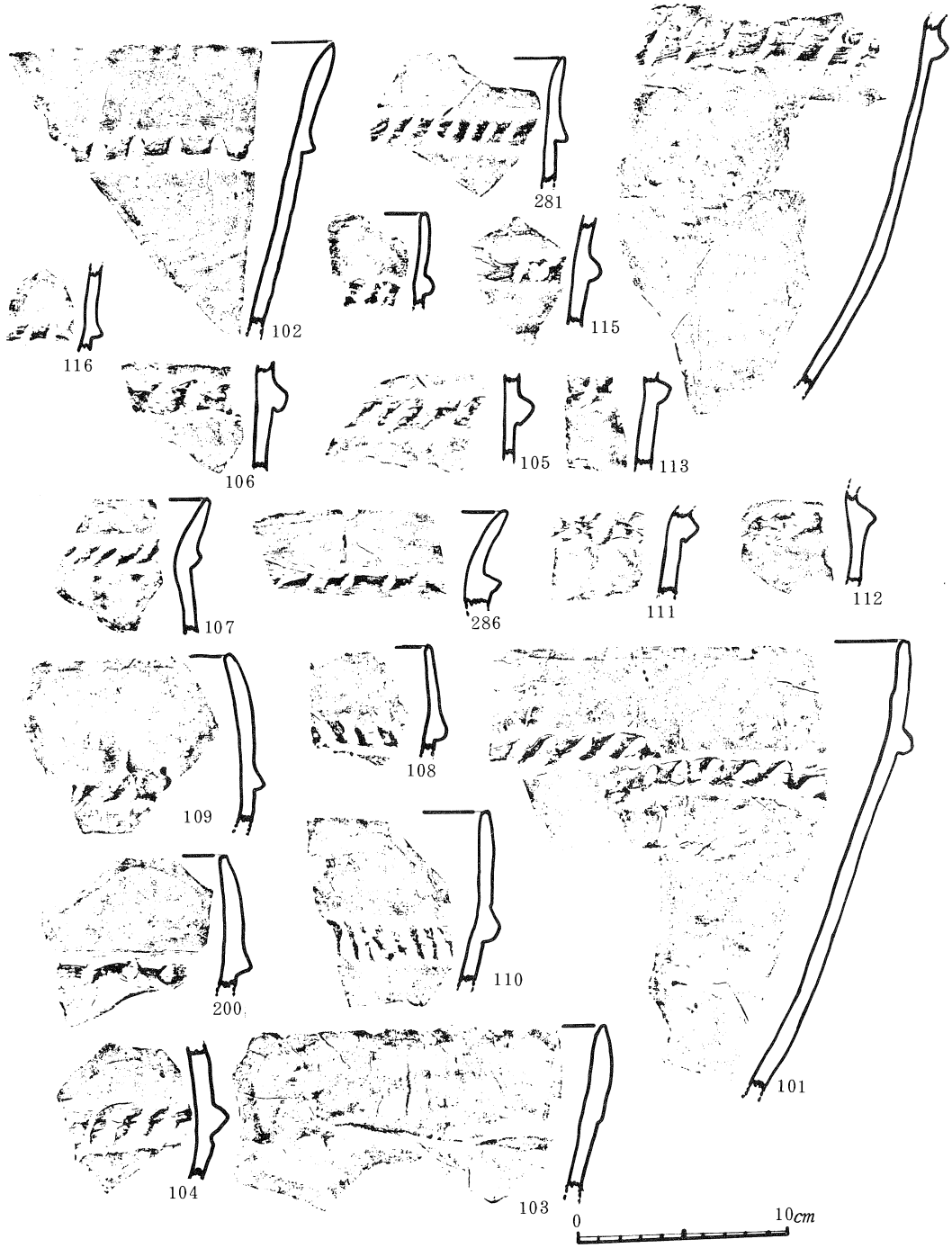
柱穴は，外周沿いの段と内側床面の境に3個，周壁西側の入り込み部分に4個，それに竪穴外周に3個が検出されただけである。これらの柱穴は，いずれも径20～30cmのもので，主柱穴とみなされるような柱穴は発掘範囲内に検出することはできなかった。竪穴周囲の柱穴はいずれも垂直に掘られており，外周から斜に立てかけた棰木穴ではなく，少なくとも，垂直の柱穴の状況から軒先を支えた軒もたせの支柱穴ではなかったかとおもえるものであった。

Ⅲ　出土遺物

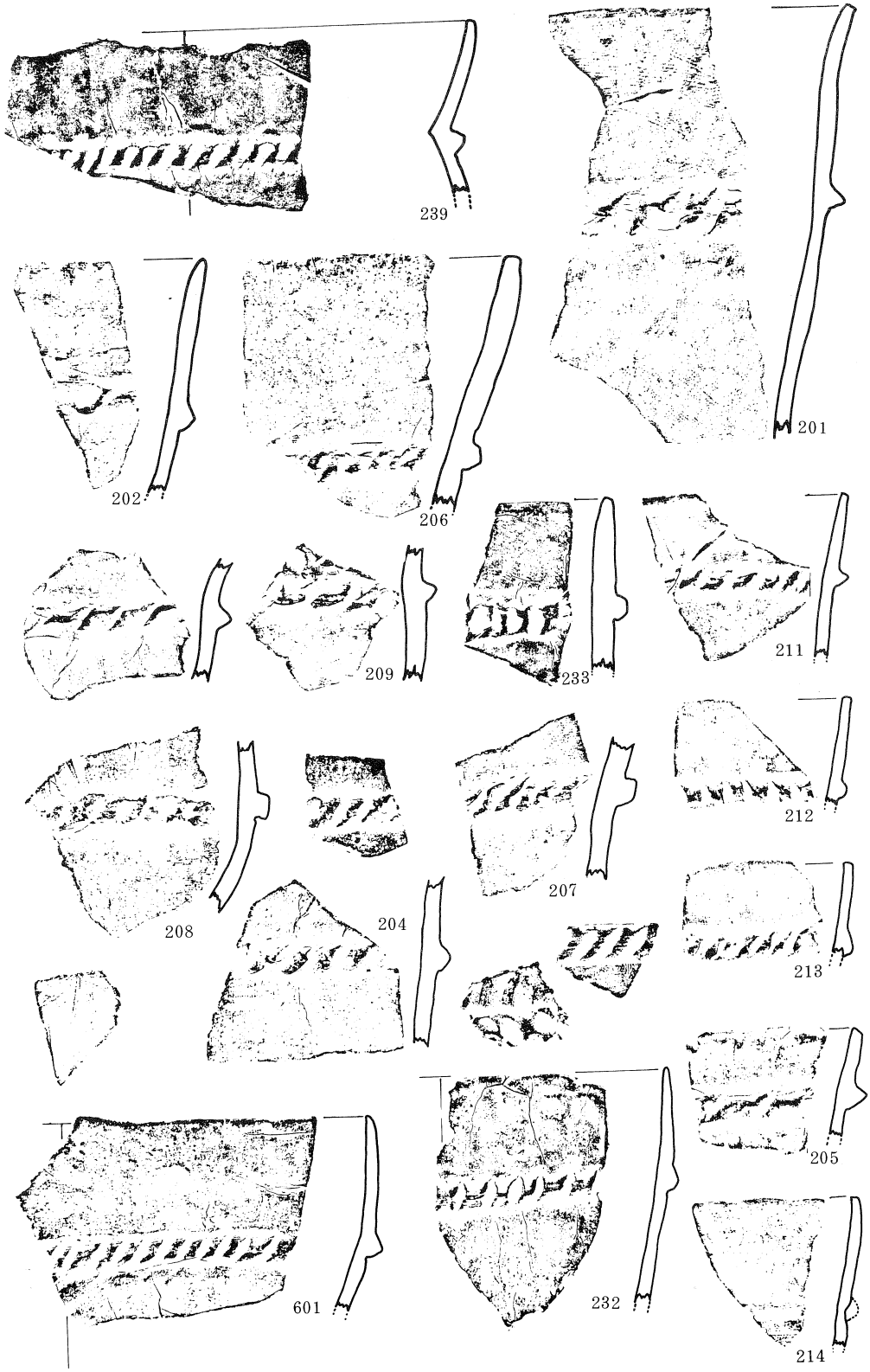
各竪穴から多量の土器が出土しているが，各竪穴の土器間には著しく時期差を示すものはなく，ほぼ同時期の竪穴遺構であることを示唆するものであった。

出土土器は，ほとんどが破砕し，中には意図的とおもえるほどに細かく破砕していることもあって，復原できたものは僅か数例にすぎなかった。この傾向は特に2号竪穴の土器に著しく，自然放棄ではなく作為を感じさせるものであった。比較的まとまりをもって出土したのは1号竪穴で，あるていど復原可能な甕形土器もあり，唯一の完形品であった盃形の小形土器も出土しており，生活跡としての確証を示すものであった。このほか，1号竪穴には，長頸の鉄鏃と見られる長さ10cmほどの鉄片と，脚台状の底部の断片とみられる須恵器片も検出されている。これらは1号竪穴を含む上示野原遺跡の時期比定の上で注目される遺物であった。2号竪穴から出土した高坏形土器は，その復原器形から古式土師器とも受けとれるものであった。このほかに特殊な遺物として，2号竪穴から径4.7cm，厚1.2cm，中央に径0.5cmの円孔をもつ扁平な軽石製の有孔円盤1個と扁平打製石斧1個のほか，縄文期の遺物とみられる打製の石槍状石器や石鏃片，石刃などが検出されているが，出土状況から直接竪穴に関係するものとは考えられない。

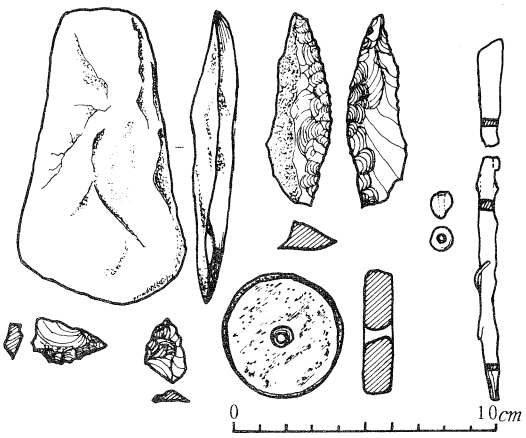
最も多量に出土した土器片は，大方甕形土器の破片とみられるもので，口縁部直下頸部に一条の絡縄状の突帯をめぐらしたものであった。これらの中には，巻きつけた縄の様に突帯の片端を下に垂らしたものもみうけられるなど，いわゆる絡縄状突帯文土器として位置づけられる土器である。



第４図　出土土器拓影（１号竪穴）



第５図　出土土器拓影（２号竪穴）



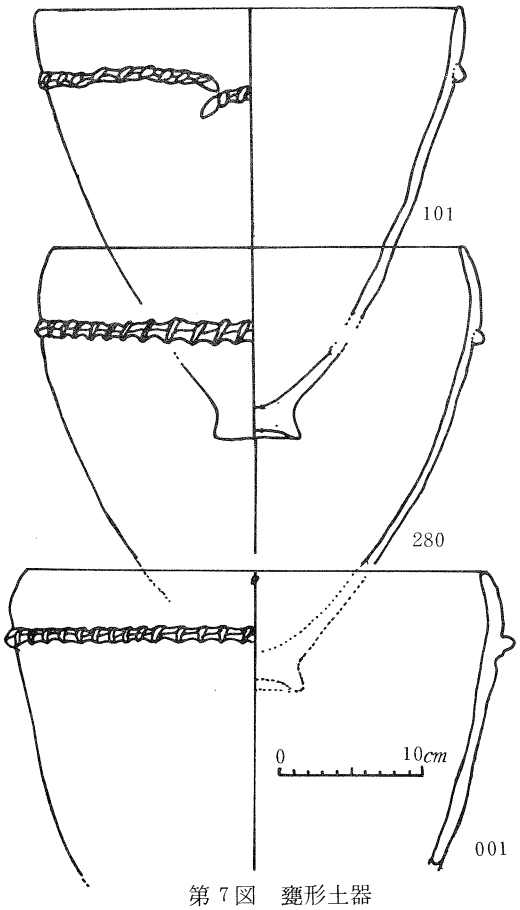
第６図　石器・鉄鏃・小玉
1～5－2号竪穴出土　6・7－1号竪穴出土

これらの絡縄突帯文土器は，口縁部の形態によって３種類に分類される。(1)は，口縁が「く」の字状に屈曲して外反する型のもの，(2)　口縁から胴部にかけてほぼ直口のもの。(3)　口縁が器の内面に向って湾曲する型のものの３種類である。これらは，更に，口縁から突帯までの長さの長短によって，各２つに細分することができる。胴部の張りは小さく，わずかに湾曲する程度で底部へ向って直行するものが多い。底部はやや脚台状の小さな揚げ底を呈する。

遺構別にみると１号竪穴では，絡縄突帯をめぐらす甕形土器片は19点が採取されている。直口または軽く内湾するものが多く，「く」の字に外反する口縁をとるものは１点だけである。101は，口径30*cm*ほどの器形が推定復原できるもので，貼付突帯の末端の垂れ下げがみえる。壺形土器はほとんど出土していない。わずかに，椀形の口縁から「く」の字に屈曲した頸部から下腹部の張る丸底の器形が予想される小形の坩形土器片がみられるだけである。高坏形土器としては脚柱部分が２個体分出土している。坏では柄差しとなるもので，脚底は屈折して裾開きになることが予想される。脚柱は比較的短かく，中膨らみとなる。坏部は，口縁部の断片があるだけで完形は明らかでないが，直線または椀状に開く薄手の坏部がつくものと推定される。

126の盃形土器は，口径５*cm*，器高2.5*cm*，唯一の完形土器である。

２号竪穴出土の土器は，甕形土器で占められており，壺形土器は，口径12*cm*ほどの破片１点がみられるだけである。高坏形土器は磨耗した脚柱部分が１片出土している。器種に乏しい。ただ焼成度のよい丹塗土器の細片が検出されていることは注目される。甕形土器で絡縄突帯を有するものは42片ほどあるが，大半は直口型で，若干の内湾型を含む。直口型のうち厚手のものに口縁部の長いも

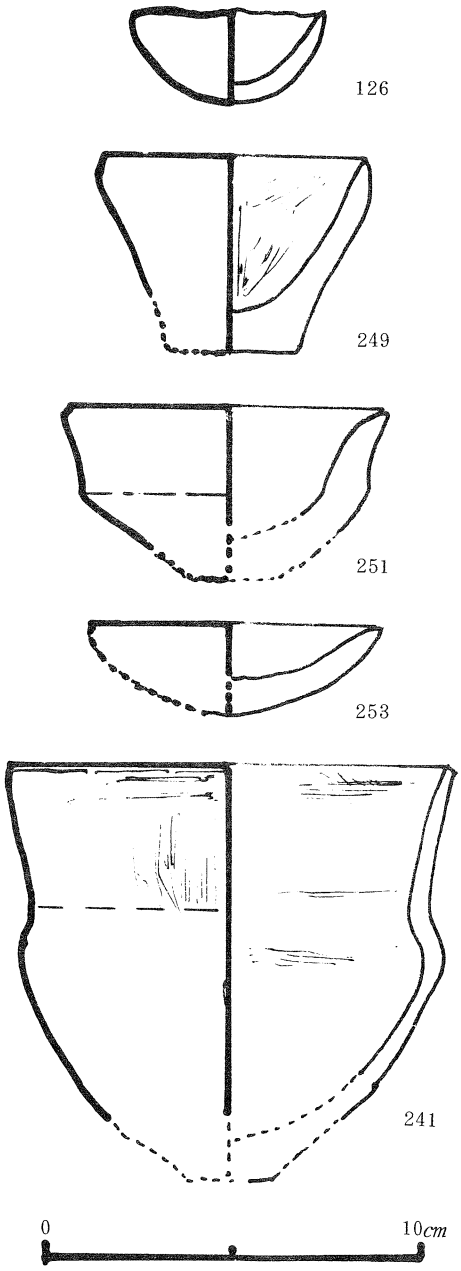


第７図　甕形土器

のがみられる。内湾型は，突帯までの口縁部の短かいものが多い。床面から「く」の字に屈曲外反する型式の破片が1点出土している。

3号竪穴の甕形土器は，口縁の直口乃至外反型が多く内湾型がほとんどみあたらない。絡縄突帯のある土器片は口縁部のあるものが少なく，逆に突帯のない短かい口縁断片が多く出土していることは，これらが突帯貼付土器の口縁になることも考えられる。壺形土器は1，2号同様少なく，屈曲部に刻目を施文した二重口縁の断片が1片検出されている。高坏土器には，坏部が比較的深く，底部近くに接合部分の屈曲をみせる坏部に短脚で裾開きの脚台が予想される破片が検出されている。このほか薄手の丹塗土器の細片が採集されているが器形は明らかでない。

以上の様に，各竪穴間の土器には著しい型式差は認められない。また器種においても甕形土器と高坏土器が主となり壺形土器の少ないことなど共通した出土状況を示している。細片化した土器片の中に小形土器が散見されたことは，丹塗土器片と共に注目されることである。



第8図　小形土器

Ⅳ　むすび

竪穴遺構

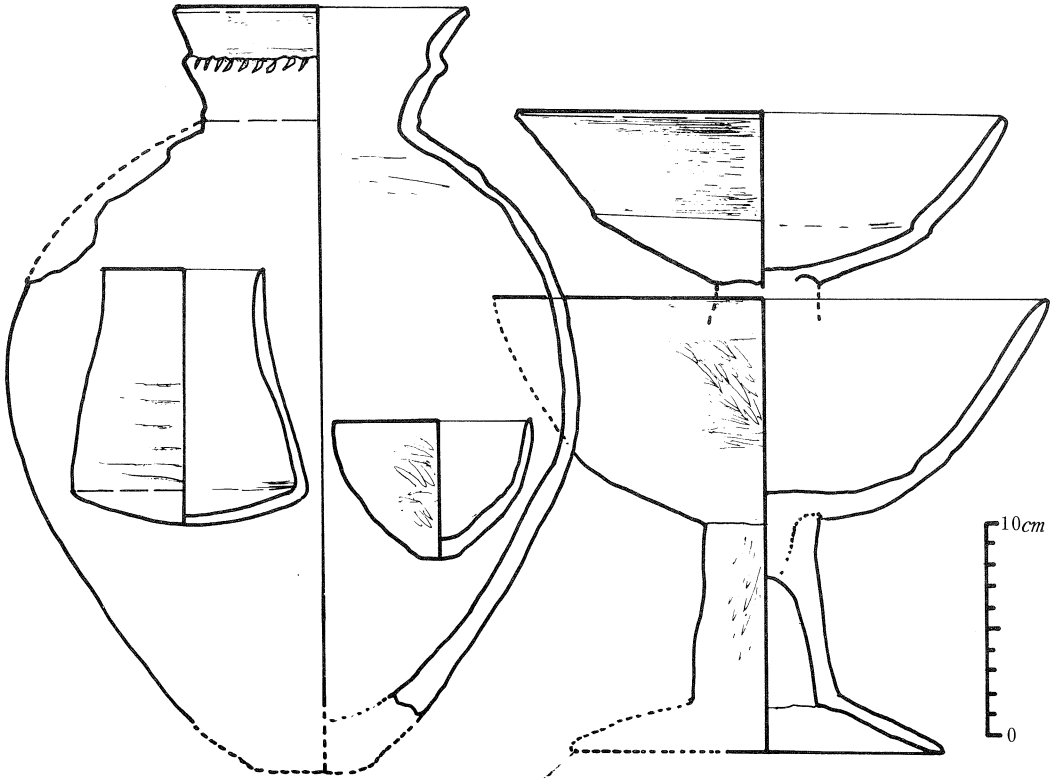
上示野原の5棟の竪穴は，隅丸方形と推定の2号竪穴以外は，すべて長方形プランの竪穴で構成されており，画一化の傾向がみられる集落遺構であった。

長方形竪穴の長軸方位は，1号と4号が南北に3号竪穴は北西－南東，5号竪穴は東西と，それぞれ異なり，方位の統一はみられなかった。各竪穴の平面積は，1号の4.5m^2を最小として，3号と4号が27.6m^2，5号竪穴21.6m^2であった。隅丸方

形の２号竪穴は推定面積80㎡が予想される大形住居跡である。これらの竪穴は，いずれも明確な主柱穴が検出されず家屋構造を判断することは困難であった。また炉跡についても，若干の木炭や炭化物の痕跡が認められた２号竪穴以外では，全く検出されず果して住居跡となるものか断言できない一面もあった。しかし，それぞれに煤付着の甕形土器が出土しているだけに全面的に否定されるものではなかった。

２号竪穴で上層部と床面出土の土器の間に若干の形態差が認められたが１片だけであり，出土量の差を除いては各竪穴間の土器に著しい形態差はなく明瞭な時期差は考えられず，大型住居の２号竪穴を中心に構成されたほぼ同時期の集落群とおもわれる。ただ，長方形竪穴が２号竪穴の付属建物になるのか或は，長方形竪穴を単位とした集落の集会所か共同作業所として２号竪穴が位置づけられるかについてはなお検討を要する。わずかに外周に検出された垂直掘込のピットから持上げ軒の予想される２号竪穴の家屋構造からは，２号竪穴か共同体の中心的建物としての役割をもっていたのではないかとも考えられる。

２号竪穴の東側に検出された一辺80*cm*，深さ60*cm*の小坑は，上面から001の絡縄突帯土器を出土しており，一種の貯蔵用穴倉が予想されたが，その性格を究明するにはいたらなかった。また，２号竪穴床面にみられた段差については，これをベッド状遺構とみるか，あるいは竪穴拡張に伴う段差とみるか検討を要するところであったが，遺構の完掘ができなかったこともあって課題を残すことになった。



第９図　調査前の出土土器（高崎町教育委員会保管）

各竪穴ともくずれ易い軽石層内に掘り込まれているだけに，周壁の保護や土間の堅築にはそれなりの工夫があったとおもうが，それらを十分に確認することができなかったのは残念であった。

竪穴出土の土器が，いずれも細かく破砕されており，ほとんど完形品を認めることができなかったことは，竪穴放棄に伴う意図的な破砕行為があったのではないかと考えられる。盃形土器や丹塗土器などの小形土器や手捏土器の存在は，放棄に関連した何等かの祭祀の行なわれたことを示す痕跡ともうけとれるものであった。

上示野原遺跡は造成による半壊状態での確認調査であり，当初から集落構成を意図したものでなかっただけに多くの課題を残したままであった。しかし，後の土器の項でもふれる様に古墳期にかかる長方形プランに画一化されつつある竪穴集落遺構について，その一端なりをかい間見ることができたことは諸県地方における集落調査上貴重な資料を得ることになった。

絡縄突帯甕形土器

本遺跡を特色づける口縁部に絡縄突帯をめぐらした甕形土器は，口縁部の形態から3分類され，さらに口縁から突帯までの長短によって6つに細分されることは先述したところである。

これらは各竪穴に出土しており，出土量に若干の差はあっても土器間に際立った層位差は認められなかった。強いていえば，2号竪穴で1類土器がⅡ・Ⅲ類土器より若干下層に検出されたていどである。この差が土器自体の時期差を示すものであれば，2号竪穴は，他の長方形竪穴に若干先行して構築されたとも考えられるが，わずか1片だけに時期差を断定するには積極性に欠けるところである。ただ，相対的にⅢ類土器を主体とした1号竪穴にくらべ，2号竪穴にはⅡ類土器が多く出土している事は注目されるところである。

従来，これらの絡縄突帯土器は成川式土器として取扱われてきたが，最近，地域によってかなりの形態差や，共伴遺物に違いがあることが明らかにされ，次第に細分化と時期差が検討されてきていることは周知のところである。最近の例によれば，上示野原出土の絡縄突帯甕形土器は，辻堂原遺跡のⅡ類や平田F類，G類[※1]に類例が求められる。両遺跡では共伴する須恵器の編年観から，辻堂原では古墳前期に萩原遺跡では古墳後期[※2]に位置づけ，土師式の鬼高・真間期と対比する編年試案が提示されている。上示野原遺跡においても，須恵器小片の混在をみたが，共伴資料として時期比定の決め手となし得るものではなかった。一般に須恵器の出土側の少ない諸県地域では，須恵器に編年基準を求めることは困難といわなければならない。

一方，共伴した高坏形土器にみる屈曲する坏部と，脚柱をもち，くの字に屈折して裾開きとなる脚底の復原形態には，熊本の塚原古墳群の第1類や，福岡県有田遺跡・狐塚遺跡の高坏の中に類例が求められ，土師式の和泉期に比定されている六野原地下式横穴3号・10号出土の高坏に通じるものがある。このことは，古式土師器との接触も考慮され，今後の編年観確定上注目すべきこととおもわれる。

このような高坏土器との共伴関係を考えるとき，絡縄突帯甕形土器は古墳期に位置ずけられることは否めないところであろう。それが果して，古墳前期にかかるのか，中・後期に比定されるかについては，

なお比較検討が必要である。

県下の絡縄突帯甕形土器の分布をみるとき，西諸県・北諸県の霧島山麓に分布が限られることは，この地域が県内有数の地下式横穴の群集地だけに，その時期比定ともかかわって，絡縄突帯甕形土器を伴う住居跡群と地下式横穴群との関係など今後に検討さるべき課題といえよう。

（茂山　護）

引用文献

和島誠一・田中義昭　「住居と集落」『日本の考古学』Ⅲ，1967，

玉口時雄　「土師器とその集落」『日本考古学の現状と課題』　1974，

『成川遺跡』　文化庁　1973，

「狐塚遺跡」　筑後市教育委員会　1970，

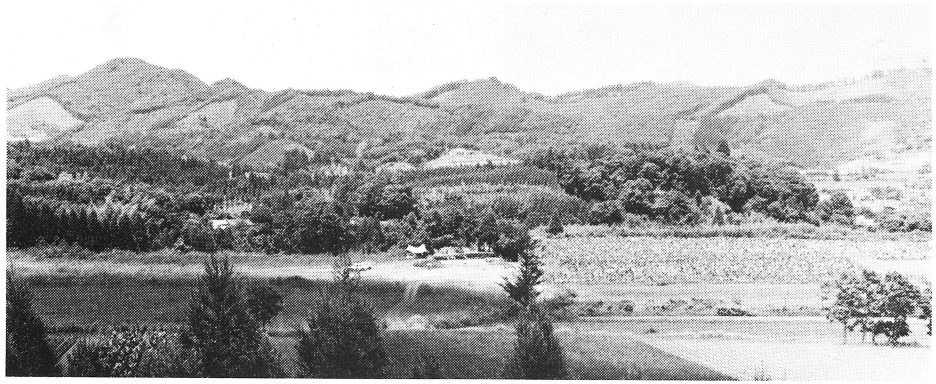
「辻堂原遺跡」　吹上町教育委員会　1977，

「荻原遺跡」　姶良町教育委員会　1978，

「史跡名勝天然紀念物調査報告　第13輯」　宮崎県　1944，

武末純一　「福岡県早良平野の古式土師器」『古文化談叢』第５集　九州古文化研究会　1978，

図版1



遺　跡　遠　景